

口頭伝承

はじめに

東上秋間では、正月様に、ゆり(百合)とこぶ(昆布)を供える。そのいわれは、正月様がよろ(百合)こぶ(昆布)からだど聞いた。すでにこの地では、ゆりをよろとはいわなくなつたが、「大辞典」(平凡社)を見ると、「よろ 百合、秋田、山形、新潟、長野、山梨、神奈川、静岡」と出ている。実際には消えてしまったことばが、行事の中に、秘蔵されているようなゆかしさを感じた。

昔話は、桃太郎、蛇姫、飯食わぬ女房、馬鹿蟹、馬鹿蜂、物臭者などが報告された。

第一回の片品村の報告には、一つも出て来ないが、後に笹谷明氏の「金の瓜―上州・利根の昔話」(桜楓社)が生れ、第四回の六合村、第十五回の嬭恋村の調査でも、数は少なかったが、これもまた「吾妻昔話集」(全国昔話資料集成引岩崎美術社)を生み出す、昔話の豊かな土地だった。第十三回の水上市町の報告の時、「今度の調査を機会に、すぐ隣りにいるかもしれない語り手の紹介をお願いしたい」と書いたが、今年になって、「民話の手帖」の別冊として、「藤原の民話」(蒼海出版)が発行された。

三泊四日の共同調査が、昔話の採集に適當かどうかという問題もあるが、こうした調査の粗い網の目からもれた多くの昔話が、これを機会に、世に出てほしいものである。

謎は、ここ数回の調査でも、多くの報告があつたが、今回も多かつ

た。

「ゴマは蒔きに行く人と、取りに行く人とかち会っても取れる」「照り胡麻」と、胡麻が目についたのは、土地柄であろう。(上野勇)

一、伝説

木部様の杉 権名神社は木部様を祭っているという。その境内に杉の大木があり、これを伐つたら血が出たのでやめた。その木の主が木部様だったという。木部様は権名湖に入つて三度浮んで三度沈み、三度目にそのまま沈んでしまった。右の木を伐つた枝が下後閑の天神様の境内につつまつてささつて根づいたので、その杉の枝は下向きになつている。(一区)

権名湖で蛇になつたお姫様 むかし、どこの人だかわからないが、お姫様をおかごにのせて権名湖へつれて行つた。お姫様が飲みたいといふので、湖のところへ連れて行つたところ、湖の中へ入つて蛇になつた。付人も湖に入つてカニになつたといふ。

そのために、カニをとると権名へは行けないという。また、お姫様がつれこむから、あまり湖の真中へは行くなといっている。(中秋間、吉田文雄)

木部姫むかし 木部の大尽のお姫様が、権名へ行きたいといふので、つれて行つたところ、いい着物を着たまふ沼へ入つて、そのまま沈んで、沼の主になつて、大蛇になつたといふ。

それから後、木部の縁者は、赤飯をこしらえて持つて来て、沼へお



石舟様 (東上秋間) (撮影 上野 勇)

重(重箱)ごと浮かしてやったら、渦がまいて、重箱をひきこんで、また渦がまいて、空になったお重を浮かせたという。

榛名湖の主は大蛇だともいうし、ヒゴイだともいう。カニを食べたときには、榛名の沼へ行くなといっている。沼へひっぱりこまれるという。(中秋間)

相水谷津 今から八四〇年も昔、京都から但馬少将という公家に来て、相水谷津に居を構えた。その家来が一部落を作っているが、その庭を土下座しなくては通れなかったという。古文書も残っている。(下秋間)

宝物 館ではヒイラギの木の所に宝物が埋まっているといわれた。「朝日さす、夕日さす、……」という歌があった。昔、ゲンノウ山の頂上を、宝探しのために掘ったが、何も出なかった。(下秋間)

石舟様 刈稲にある石舟様は、日本武尊が奥州征伐に行く時に、馬に水をくれた。雨がほしい時には、蓋をすると、雨乞いになる。(東上秋間)

池の久保 「池の久保に里芋を作ると雨が降る。」とされている。昔死刑囚が首を切られたところだといわれ、ここの畑を耕作すると良いことがないといわれていた。(西上秋間) ほうり塚 榛名様が、池の久保で休んで、ジヨリンで土をすくって投げた。すくったところには池が出来た。投げたところを、ほうり塚(法輪塚)といわれ、そこに百庚申を建てたとい

う。(西上秋間)

山まゆの話 山まゆの布で作った着物を着て舟に乗ると、ワニが好んで寄って来る。この時は、その舟に乗っている者の着物を海に投げ入れて、最初にワニがくわえた着物の主を、海に投げ入れてやらないとワニが舟から離れないという。だから舟に乗る際は山まゆの着物を着るものでないといわれていた。(西上秋間)

関市兵衛の大力 榛名の間魔様に、間魔様の片腕の力をくれと、百朝人に会わないうちに百朝お願しをして小指の力ぐらい貰った。ふたつ橋の工事に出た時、下におれ、下におれて、代官様が来たが、馬が邪魔して通れねえ。立兵衛が四つ足を持ってどけた。橋の工事のでかい石をあげれば爆すというので、ほかの者にかげ声をかけさせ、市兵衛が、もつくらもつくら下から押し上げた。その力が娘に移った。榛名町の室田に嫁に行った。婿が風呂に入った時に、夕立が来たが、入ったまま、軒下まで持って来た。(東上秋間)

忠僕庄助 安中の館出身で、赤穂義士の一人片岡源五右衛門に助けられて仕えた。主人が仇討に成功後、切腹して死んだので、四十七士の



忠僕元助の木像
(東上秋間久保公民館隣)
(撮影 金子緯一郎)

菩提を弔うため、発心して石工三人も雇い、石像を刻んで残した。その後千葉県花岡村で二十一日間の断食をして、石半に入って死んだが、入定する時に、火伏せの神になるといって死んだという。祠に木像が残っている。現在、千葉県と交流をもつて、彼を祀っている。(下秋間) 安中草三 やくざ者で、まんじゅう売りに行った所を、殿様に捕らえられて、打ち首になったという。(下秋間)

二、昔話

桃太郎 むかし、むかし、おじいさんとおばあさんがあって、おじいさんは山へ柴刈りに行って、そうして、おばあさんが川へ洗濯に行ったら、桃が川のところを流れて来て、そうしておばあさんは拾って、皮をむいて食べようと思っただけでも、おじいさんが来ぬえから食べねえで、戸棚へしまっておいて、そうしておじいさんが来たから、「おじいさん、今日はいいものを拾って来た。桃を拾って来たから、おじいさん割って食べべえ。」

それで、包丁でおばあさんが割ろうとしたら、中から、かわいいあかんぼうが生れてきたって。

そうして、おじいさんが、

「これは、おばあさんなんという名をつけたらいいだんべか。」

といたら、おばあさんが、

「これは桃から生まれたから、日本一の桃太郎とつけべえじゃねえか」
つていったって。

子供はだんだん大きくなって、それでおじいさんに、桃太郎がいうことに、

「おじいさん、おじいさん、おれはこれから鬼ヶ島へ、鬼退治に行くから、是非日本一のキビダンゴをつくってくれろ」
つて。

それで、おじいさんとおばあさんと、キビダンゴをつくってやっ

つて。

桃太郎はそれを腰につけて、鬼ヶ島へ鬼征伐へ出かけたって。

それで桃太郎は一人で鬼ヶ島へ進んで行くと、キジが出てきて、

「もしもし、桃太郎さん、どこへお越しになるんですか。」

「おれは、鬼ヶ島へ鬼退治に行くんだ。」

「お腰のものはなんですか。」

「これは、日本一のキビダンゴだ。」

それでキジが、

「わたしにも一つくださいな。」

「それじゃ、このダンゴを一つやるから、おれのあとついて来い。」

というので、そいでダンゴをもらって、キジは桃太郎のあとをついて

行つたつて。

それで、キジがおともをしてはるか行くと、サルが出て来て、

「もしもし、桃太郎さん、どちらへ。」

「鬼ヶ島へ鬼征伐に行く。」

「桃太郎さん、お腰のものはなんですか。」

「これは日本一のキビダンゴ。」

「一つわたしに下さいな。」

「それじゃ、このキビダンゴ一つやるから、おまえ家来になって、あ

とにつて来い。」

それで、サルは桃太郎の家来になって、またはるか行くと、大がわ

んわんといつて出て来て、

「桃太郎さん、お腰のものはなんですか。」

「これは日本一のキビダンゴ。」

「一つくださいな。」

と大がいうと、

「一つやるから、おともをしろ。」

といったて。

それで、四人そろって、鬼ヶ島へついて鬼退治をして、宝物をみんなとって、おじいさん、おばあさんのところへ帰って来たつて。

それで、おじいさん、おばあさんを安心させたつて。

そういうむかしはなしてした。(中秋間、入沢西七 明治三十七年生れ)

蛇聲 むかし、娘がいて、そこへ男が来たんだつて。

めた来るから、どこの人だが、糸をへなけてやつたつて。そしたら、石垣の穴に入ったんだつて。こりやへびだつて。

五月の節供のとき、ショウワ湯をたてるのは、そのたとえという。ショウワ湯に入れば(へびの子)なされるというた。

むかし、五月五日の晩には、女の子に、湯に入ったかと、よくとじよりがいつていた。(東上秋間長石、戸塚ケサ)

飯食わぬ女房 ある人が嫁さんをもらつたが、とてもいい嫁さんだつて。

ところが、その嫁さんが、はたもちを頭の上のせると、なくなつてしまふんだつて。(そういう話を、その翌さんが聞いたので)、仕事

に出かけるふりをして、屋根の上にははつて見ていたら、ご飯をにて、はたもちをつくつて、頭の上から食べていたんだつて。それで、翌さ

んはおかみさんが、鬼だと思つた。

ところが、おかみさんに見つかつてしまふ。翌さんは山へにげた。おつかかれてつかまりになつたとき、ヨモギとショウワの生え

ているところにかくれた。さんざみつけたけれども、みつからなかつたんで、おかみさんは、山へ行つちやつたんだつて。

それで、五月の節供には、魔除けとして、ヨモギとショウワを軒下

にさすのだという。(東上秋間長岩、多胡シゲ)

犬の足は三本足 犬の足はむかしは三本足だつた。神様に足をもらつて、四本足にでもらつたんで、もつたないというので、しよ

んべん(小便)をするときに、足をもちあげてするのだという。(東上秋間長岩、戸塚ケサ)

馬鹿聲 むかし馬鹿聲がいた。嫁さんの家へ行くのに、だんごを買つていけといわれた。その名を忘れないようにと、「だんご、だんご」と

いいながら行つた。(堀があつたので)堀をどっこいしよといつてまたいだら、「どっこいしよ」といいながら行つた。

嫁さんの家へ行つて、「どっこいしよをくれくれ」つていつたら、

「そんなものはない」といわれ、「おまえは馬鹿だ」といわれてひつぱたかれた。そしたらこぶが出来た。それをみて、うちのもんが、「だ

んごのようなこぶが出来た」つていつたつて。そしたら、その翌は「あ

あ、そのだんごだ」といつたんだつて。(東上秋間長岩、戸塚ケサ)

馬鹿嫌 むかし、馬鹿嫌がいた。お湯を飲むとき、あつければ、お湯の中にこうこ(沢庵づけ)を入れればお湯がさめるといわれた。

あるとき、足を洗うお湯があつたつた。すると、その嫁さんは、お湯があつてからこうこを入れるんだといつたつて。(東上秋間長岩、戸塚ケサ)

物奥者 むかし、あるところに、いこく(動く)のがきらいな人がいて、桑の木の下で寝ていた。口あけて寝ていて、ドドメ(桑の実)が落ちくるのをまっていたんだつて。それで、落ちないんで、足をもちあげてふんこくつたら、ドドメが落ちて来て、口の中に入ったんだつて。

それで、人間は動かかけりや食えねえもんだつて、さつたつて。

(東上秋間長岩、戸塚ケサ、M43・7・5生)

世間話 大三郎さんという人の話してくれた話に、秋間に福さんと

いう人がいて、バクチが好きで、サイキョウをぶつて下半ばかりして

いたが、ある時安中ですつてんでんになり、裸なですつてすぐは帰

れないので西の方を大まわりをして来たところ、朝早いことずの時茶

屋の旦那が戸を開けながらこれを見て、「一句よめば酒を出すから」と

いったところ

西行も 幾世の旅も してみたが

経かたばらに 一杯せしめたという 今日の寒さよ

とうたつて一杯せしめたという。

とんちの人で安中の寺で番頭をしていたが節分が出がわりで、坊さんが今日で出すからという、「オレが一句よむから」といつてうたつた句が次の句という。

福は内 福は内と いう中に

福を追い出す 貧乏寺(東上秋間)

鳥の話 ホトギスはむかし兄弟であつたという。

モズはものぐさものであつたという。そのために、ものぐさもんのことは、モズのようだという。また、かまわないで(手入れをしないで)、乱れているあたまのことは、モズのあたまだといつた。

カケスはものわすれがひどいという。ふだん、ものわすれすると、

「てめえ、カケスカ」といわれた。(中秋間)

はてなし話 天から長い長い古ふんどしが下つて来て、たくつても、たくつてもきりが無い。(東上秋間)

三、怪 異

アズキトギバアサン アズキトギは、夕方山みないなところにおいて、「アズキトゴウカ、人トツテクオウカ」というという。(東上秋間長岩、多胡シゲ)

オトウカに化かされた話 馬に乗っていた人が、オトウカに化かされた。馬は化かされないから(家へ帰ろうとするが)、その人はちがう、ちがうといつて、畑中をまわつてあるいていたという。(東上秋間長岩)

狐の嫁入り 小間の天神様の所の富士山で狐の嫁入りを見た。そこは焼き場が上にあつて、さむしい所だつた。提灯行列みたいに灯りが

ボコリボコリとついで、前に出て行く。昭和三十年ごろ、西の掘割の所から見たが、その時は一丁前(一人前)の大人になつていた。(下秋間)

不動様のお札 草刈りに行つて疲れた男が横になつていて、大蛇が出て来て、この男を呑もうとした。しかしこの男の頭から、火焰が立っているのので、呑むことが出来なかつた。お不動様のお札を、元結いにして、髪をしばつていたため、呑まれずに、助かつたのだといふ。(下秋間)

四、命 名

秋間の地名 秋間はむかしから、一区から二十五区に分れている。そして、十七区は三角・蛇喰で構成され、十八区は櫻山・熊ノ貝で構成されるなど、別の地名もある。(中秋間)

礼応寺 今は地名だけ残っているが、かつては寺が存在したらしい。今の道城はもと道場であり、礼応寺と関係があつたのだろうといふ。(十五区)

ニジョウツバラ この地名のところには、お堀があつたから、二条城という城があつたのかもしれない。(十五区)

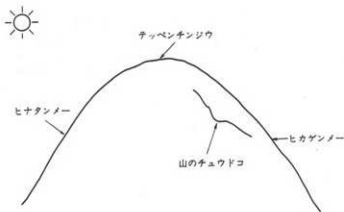
櫻山の多胡姓 吉井の多胡のワカサレといふ。吉井の多胡のオメカケが熊の貝にいて、それから多胡姓が広まつたといふ。

櫻山の多胡姓は直接には、東横野の多胡のワカサレといふが、東横野のもともとは、吉井の多胡であるといふ。(十八区)

峠 サネスリ峠にマラフリ松、ハメ場の峠といふ地名がある。様名の神が妙義へ遊びに来て、女陰をすくつて投げたといふ。(下秋間)

三四里峠 様名山に四里、妙義山に三里の秋間と後閑の境の峠。別名、さねすり峠の丸振り松などともいふ。

大石 大石があるので大石と名づけた。(西上秋間)
地名 カザト——風穴のこと



人たちが住んでいたところらしいと伝える。(西上秋間)
地名 貫木貝(かんぬきがい)、大戸貝(おおとごい)、下り貝(さがりがい)、森熊(もりくま)、平(ひら)、中閑(なかぜき)、関(せき)、明石(あかいし)、大蛇喰(おおじやくい)
安中の背戸——秋間のことをいった。(西上秋間)
屋号 豆腐屋・カジ屋・油屋・問屋などがある。シヨウガ屋という

カジケ——鍛冶屋が刀を打ったところ一年中清水が出ていた。(西上秋間)
秋間の野火 春先になると毎年野火が発生したので有名だった。官林だったので誰れも気にとめなかった。別に焼畑はなかった。
共有地も相当持っており、山の口ということはなかった。したがって、干草刈りも行なわなかった。
大平、平に平なし 小字名に大平、平というところがあるが、けい斜地のところが多く平地のないところばかりであった。
したがって、この地名の起りは別の意味だったという。高貴の人たちに対する普通の



地名となった大石 (西上秋間大石)
(撮影 阿部孝)

旅館もある。(十六区)
二軒茶屋——たこや・おもだかや・松屋。
三軒茶屋——ききょうや、りゅうや・藤屋・みようがや・みなとや・まるや・橋場。(西上秋間)
ガンタクかねさん 本名は、清水兼吉。顔もひらべったく、格好もガンタク(ひきがえる)に似ていた。二十五貫の石を、たすきにとったり、手拭で、石の真中をしばって、歯で持ち上げてゆすった。おかみさんは、おたまさんという。

(東上秋間)
飛行機 早足の異名で、安中から、はがきを胸につけて来て、落ちなかった。自転車より早い。下駄屋のじつさんも、飛行機の次くらいに早かった。決して乗り物に乗らなかった。(東上秋間)
庚申様 気むずかしい人のことは、お庚申様のようにだといいた。(中秋間八貝戸)

五、諺・謎 など

ことわざ
茄子のつるし植え 茄子はつるすように、おさえつけないで植える方がよい。
照り茄子 照った方がよくなる。

照り胡麻 同様に照った方がよく実る。

麦は十七を刈れ 若刈りがよい。

死にごぼう 四月は悪い。

薄田で米とれ厚田でわらとれ

出穂みに四十日 稲は出穂後四十日たてば食べられる。

馬鹿の深植 田植に深植はいけない。

まがり八石く煮て九石

小豆は馬鹿に煮らせろ。(五区)

秋茄子は嫁に食わせるな 秋茄子は味がよいからという。また、嫁

があまり子沢山で、秋茄子をくるとみこもるからともいう。

盆のばたもち しんから米だ。

嫁と姑が仲良くなるのは盆のとき 盆には姑が嫁にばたもちを食

え食えといつてすすめる。それは、夏のころでばたもちがいたんでもつ

たいないから、そうするのだという。その様子をいったもの。(中秋間)

冬至十日前 このころが日が一番短いときという。

冬至からは、米粒一粒ずつ日がびて行くという。(東上秋間長岩)

四月午旁はまくな。死にごぼうといつてきらった。

アズキは馬鹿に煮らせろ。

一見葬礼火事見舞。

照りナス ナスは雨が降らないで、照ったほうがいいといった。ナ

スは照り草であるという。

抱いている子をたすねろ

七度たすねて人を疑え。(中秋間)

イモはかけの俵 むかしはよくイモ飯をして食べた。イモは米のた

しになったというこをいった話である。(中秋間)

二月のからつだけ 旧二月頃、ムギが青く見えるようでは駄目。

その頃あまりほきているとまくなといった。(中秋間)

土用布子に寒帷子 これはクツの手入れ法についていったもの。夏

は根に土をかけておけ、冬は根を出しておけということ。(中秋間)

ゴマは蒔きに行く人と、取りに行く人が、かち会っても取れる。

「八千太郎 暮次郎 土用三郎 寒四郎」という天気の話がある。

「土用三郎」土用三日めがいい天気だと、その年は豊作なので、米

持ちは米が余るから、早く売る気になった。二百十日に荒れると、米

が不足になるので、米を売り洗った。

「寒九の雨」寒の九日めに雨が降ると、その年の夏は水に困らない。

「東福 西貧、北健、南弱」夜寝る時の枕の位置をいい、東枕は幸

福、西枕は貧乏、北枕は健康、南枕は弱い、という。枕は川の流れる

通りに、上流を頭にして寝ろともいう。

「恋をするのに心臓はいらぬ、恋はへそから下でする」

「君の田とわが田と並ぶ嬉しさよ、君が田の水わが田にかかれ」(下

秋間)

「ナマグサはなす分でも、金はなすな」(金は絶対に出したがらない)

(下秋間)

居どころくばむ(宿などした場合、その宿の経済的負担が大きくな

る。)(五区)

朝茶 朝茶はその日の難のがれ、と言いい朝はお茶をのみ。縁起がい

い。(下秋間)

一見葬礼火事見舞 いつも同じ着物を着ている場合に入った。(中秋

間)

嫁をもらうならお勝手からもらえといった。かたい人は、縁談がは

じまると、先方の家へ行つて、水一杯くれといつて、お勝手の様子を

みてきたという。お勝手をみて、その家の身上持ちのいいかわるいか

をみた。(下秋間)

師走女に盆坊主 ともに忙しいことのとえである。(東上秋間長

岩)

彼岸過ぎての麦の肥、土用過ぎての稲の肥。

親の意見と、なすびの花は、千に一つの無駄はない。

小便一町、糞八町。

連れ小便。(東上秋間)

店に行つて、金がない時に、猫のきん玉にしてくれという。猫のき

ん玉は、あときん(後金)だから。

牛のきんたまで、ぶらぶらして居る。

狸のきんたまで、八畳敷。

いかけ屋の天秤、あとさきうんと出した。(東上秋間)

アラ湯は馬鹿が入る。(十六区)

のれえことは牛がする。道を歩くのと、飯を食うのは、そそうでい

い。(十六区)

天気のいいならわし

「安中の汽笛が東から聞えると雨。西から聞えると晴れ」

「西風は、晴れ。東風は雨(つなみ風)」

「こけら雲は三日と天気がつづかない」

「月が笠をかぶると雨。その笠の中に星が一つなら明日雨。二つなら

あさつて雨になる。」

「スズメがさわぐと雨」

「桐の花が沢山咲くと米があたり(豊作)」

「夕立が、はんにや沢から来ると、大雨、大風になる」

「夕立は妙義から来るものは早い」

「雲が東から西へ動くと天気が悪くなる」

「雲が西から東へ流れると天気が良くなる」

「雲が下るから天気、雲が上るから曇り」(西上秋間)

妙義の方からの雷はたいしたことをなし。

朝妙義山に雲がかかると雨が降る。

台所がしけると天気になる。

ポスト(みみずく)が鳴くとあした天気。

ミズハカリ(水鳥で赤い鳥)が鳴くと雨。

蜂の巣が高いところにあるときは水が出る。

アラシ草のふしの具合で風がどうかという。(アラシ草は葉を干して

しばつておいた。)

アリの行列、夕立がくる。

夕日やけ、あす天気。

朝日やけ、すれは雨。

月がさをかぶると三日目に雨。その中に星が二つあれば二日目に

雨。三つあれば三日目に雨。(五区)

三東雨、榎名山と稲含山からくる夕立は、足が早い、三東雨が降る

という。畑で麦を三東東ねないうちに雨が降るので、三東雨という。

稲含山は榎名山のサルオガサ(ツタの一種)を取つて来たので、榎

名山と仲が悪い。そこで両方の山から雷雲が出ると、早く大雨が降る。

(下秋間)

謎、目をあけると見えないで、目をつぶると見えるものなみに：夢

(東上秋間長岩)

六、方言 その他

悪口 榎名山への道路筋だったので、道者が通つた。大正十年頃も盛んだった。子供たちが道者を見ると「びきくんど、びきくんど」といい銭をもらつて榎名山への道を教えた。

当時、二銭銅貨をくれた。これで、つるかめという菓子を買つて食

べた。(西上秋間)

自分の表現 うえんちへ安中からお客にきた子が「あたい」って言つ

てた。それからみんなが真似てあたいって言うようになった。(下秋

間)

あいさつ 先に寝てる男さまの枕もとで、「お先に休ましてもらいま

す。お休みなさい」と言ったもんだ。おかしな話だと思つた。(下秋間)
柄杓 上秋間ではヒシヤクのことをカタテというし、中秋間(高原)ではサルボウという。嫁にきて、サルボウといわれてわからなくて困つた。(十五区)

ことば

ごます ごま化す

くわぜ 糸桑を片づけたあとの桑の棒

えててる 得意

まつと もつと

おやけしい らくだ

あさげ 朝食

おばんし 炊事

おさんし 産婦

つぶっこ それだけを着る

ガンタク ひきがえる

カッカ 蟬の幼虫(東上秋間)

ヒキガエロ コガネヤツで幾年か前だがヒキガエロが二十四から三十四匹ぐらい並んで、田ンボの中をわん回してはつてるのを見た。グーグー言つてたが、春つき三月か四月頃だった。人の足音がしたから尻の方から泥の中へバツタンバツタン入つてしまつたが氣味が悪いようだった。(下秋間)

大水(鉄砲水)のこと 明治四十三年と昭和十年に大水がでた。昭和十年の九月二十四日から二十五日にかけて、三ノ倉測候所の検査によれば、三百七十ミリの雨が降つたという。(十五区)

鳥の鳴き声 鳥の鳴き声はつぎのように聞えるという。

ヒトトという鳥は、「セツクセツチンモチヤ、モチツイチャクンネエゾ」と鳴くという。

ミストリは、雨が降るときに鳴くという。「ケロ、ケロ」と鳴く

名前がわからないが、「ゴロスケドウシン、ゴロスケドウシン」と鳴く鳥がある。

ホトトギスは、「ホットノドツツキッタ」と鳴くという。(中秋間)

一 概 観

秋間地区は安中市に編入されたとは言え、近世は中山道の後背地の農村として経過してきた。しかし、都市化の波はこの地区にも浸透しつつあり、郷土芸能もかつてはかなり盛んであったらしいが、獅子舞を除いて早い時期に廃絶していた。操人形芝居もその一例である。義太夫なども以前はかなりやれる人がいたというが、現在の時点では獅子舞の一人立のほかは休んだまま久しく、往時の状況を復原することさえむずかしかった。幸い公民館長の田島伊作氏と県文化財保護課の近藤調査員の協力があったのでこの報告を書くことができた。(萩原 進)

二 一 獅 子 舞

(一) 二人立の獅子

東上秋間外城の神楽獅子が二人立獅子舞系として注目される。この一式は昭和初期に舞われてから中止されたあと地区で保存していたが、先年秋間公民館内に郷土資料室が設けられたのを機会に委託されてあったものである。

由緒 創始については明らかでないが、一式の中にある幟旗に「文政十三年庚寅弥生吉日、春献天満宮御旗二流、大広前、外城村」とあり、その時点にはすでに行われていたと推定できよう。この幟にあるように外城にあった天満宮(菅原神社)に属していたが、天満宮が合



東上秋間神楽獅子



東上秋間神楽獅子カシラ

併されたため有志の手で維持されてきた。この神楽獅子は、村内に疫病が流行したときなど臨時に舞われたが、主として天満宮の例祭に村をねり歩いた。おねりは別に記す特殊な御輿に獅子頭を載せた。舞うときは御輿から頭を取出して舞った。最後に舞ったのは昭和の初め頃に村に赤痢が出たとき、「悪魔払い」としてやったときで、そのあとは全く忘れ去られてしまった。

由緒を物語る一つの手がかりは、曲目を記した明治十三年の「太神楽習傲覺帳」に「師匠高瀬村源五郎外宅名」とあることである。高瀬



神輿の宮に納められた神楽獅子
(側面)



神楽獅子に使う御幣束



神楽獅子の組立て神輿

演技 一人が前足となり、大きな獅子頭を両手に持ち踊り舞う。獅子の舌や耳、口も動かし、観衆にも戯れる仕草をする。いま一人は後足兼尾まわしとなり、神楽獅子が前足一人で舞うとき、後から舞に応じて動く。囃子方につれて特に興舞では観衆を笑わせる動作を行う。神輿 この獅子の大きな特長は、使わないとき一式を入れる箱があり、その中にカシラ、ホカン、お宮の解体した部品、宮祠につける幕、提灯などが納められている。箱の大きさは、縦一〇一センチ、横四〇センチ、高さ七三センチで、上蓋のところは祠の宮型を組み立てる柱穴がある。前と後の板の上部にかつぐときの角棒を通す口型の穴がある。いよいよ使

うときになると、箱の中の部材を出して屋根、柱、を組み立てる。宮は高さ六五センチになる。間口は三九センチである。まわりに幕や提灯を吊し、中に獅子頭を鎮座させる。このやり方は、獅子ガシラが神体であることを示している。おわりのときは箱の上に組み立てた宮を二人で担ぐ。途中の御旅所で休憩するときはそのまま地上に置く。こうした仕方は、獅子ガシラが単なる芸能のためではなく、むしろ神聖な御神体であることが示すもので、県下の他の二人立獅子(神楽獅子)には例を見ない。こうした道行きの方法に、一人立ち獅子(獅子ガシラ)の神格性が強くみられる。前橋の近世の紙團よりの祭礼絵巻をみると、大きな獅子頭を社殿の中に鎮座させて車の上に乗せて神輿として引っ張っている図があるが、秋間の二人立の獅子にも紙團祭となんらかの関係があったのかも知れない。大間々町の紙團やその他の紙團にも獅子ガシラを神輿に乗せてゐる例が多い。秋間の二人立があるいはそうした例と通するものではないだろうか。

付属の品 神輿の台となる箱に巻く垂れ幕(横幕)一点があり、梅鉢紋(菅原道真をまつる天神様の神紋)と「御神楽」の文字が染め抜かれていた。つぎに締め太鼓と撥があるが、その太鼓を乗せる台とともに、箱の上の宮祠の後に取りつけるようになっていた。道行のとき、一人がこの太鼓を叩いて進んだものと思われる。別に大太鼓があり、笛と太鼓とともにすり鉦もある。この楽器で囃したものである。

(二) 一人立の獅子

秋間地区には一人立の獅子が神社ごとに行われており、下秋間の榎名神社、東上秋間の東(あずま)神社、下秋間八幡神社、中秋間の大森神社と四組の獅子がある。カシラなどはほとんど共通し

ているが、演目その他は必ずしも同じでない。

(1) 中秋間の大森神社の獅子舞

由緒 創始については明らかでないが、関係者から話によると、もとは黒後の神社に付属して初午にやっていたが、その神社が明治時代に大森神社に合併されてなくなってしまうからこの獅子舞として演じられるようになったという。大森神社境内には立派な神楽殿があり、神楽も行われたことがわかる。現在は地元の人では神楽はやれなくなり、他村から頼んでやる。その代り獅子舞は祭の日にするが毎年はやれなくなつた。

カシラ 前獅子は黒塗である。巾一〇・三センチ、奥行三三センチ、高さ一八・三センチある。中獅子は朱塗で巾二〇センチ、奥行二三センチ、高さ一七・七センチ、後獅子は黒塗で巾二〇センチ、奥行二三センチ、高さ一八・二センチ。いずれも塗は新しい。大森神社の社殿



大森神社獅子組の人びと



大森神社の獅子カシラ

に保存されている。昭和五十三年に実演した。

構成 獅子三人、大太鼓一人、しめ太鼓一人、笛若干人、御幣持三人から構成されている。道行きのときは神輿のあとに獅子が続く。その神輿は大森神社の拝殿に保存されているが相当重量のある神輿である。

演目 (一)序之口 四方かため、ばちかつぎ、をかざき。(二)引は 〓まわりかざり、しりこけ。(三)引は 〓ふりがい、をやまざり。(四)引は 〓どじようふみ、どじようねこ。(五)引は 〓ひたる、つるぎ。(六)引は 〓中入後、さわ、おかざきくづし。(七)引は 〓花すい、とんどり。(八)引は 〓とびちがい、入りちがい。(九)引は 〓やっこ、女舞がくし。これらの演目は舞いの特長から名づけられたものが多い。「しりこけ」「ふりがい」「どじようふみ」「とんどり」「とびちがい」「入りちがい」などはその演目の動作からそうよんでいる。興舞の「花吸い」「女獅子隠し」は演舞の内容の主題名である。「つるぎ」は獅子が刀を口にくわえて舞うのであるが危険なので最近はやらないという。序之口は、いわば神事舞であるのに対して、「花吸い」や「女獅子隠し」はドラマで興舞系統に入る。



大森神社の前獅子

曲目と獅子舞眼 現在のごさされている資料を引用すると次のようである。

歌之部

おかざきのうた
大藏きはの花はいくつとながむれば、枝が九つ花が十六く十六の花に黄金がなりさがるく

つるぎのうた

獅子のもうやいやいかにつるぎがこいしく、
神のおにわでつるぎはわされよ、

獅子のもうやいやいかに女獅子がこいしくも

神のおにわでつるぎはわされよ、

おやまぎりのうた

おやまからきりわきりわとせめられて、ならいまうしたおやまやあ

つうぎり、

さきにしのかけたたいこにめいがかくれて、いまのたいこにおやま

やあつぎり、

獅子舞之歌

花すい

大くらぎはの花はいくつとながむれば、枝が九つ花が十六、枝が九

つ花が十六

十六の花に小判がなりさがる、花に小判がなりさがる

小山ぎり

大山からわきりわきりわとせめられて、ならいまうしたお山やつぎ

つるぎ

獅子のもうやいやいかにつるぎがこいしくも、よれやわれらにつるぎは

わされよ、よれやわれらにつるぎはわされよ

獅子のもうやいやいかに女獅子がこいしくも、よれやわれらにつるぎは

わされよ、よれやわれらにつるぎはわされよ

女獅子かくし

一、わがとのわたかをそろえて奥山で、なりをしずめすのねをきい

てすすのねをきいて

二、きりに女獅子がかくされて、心ならずや心ならずや

三、おもいもよらぬあさひりがをりて、そこで女獅子がかくされたか

くされた

四、十五夜やちこのころわかるとも、女獅子男獅子の心かわる
な、女獅子男獅子の心かわるな

五、天じてんのあいそめ川原のはたにこそ、しくせ(宿世)むすび

神のたたりな神のたたりな

六、やくしのこむそう(御夢想)はやめてそうらう、にしきのみはた

かけてまいらせう、かけてまいらせう

七、男獅子こそはこいし(恋路)の道にあこがれて、沢をのぼりこい

の歌よみ、こいの歌よみ

八、ふえふきのほひぶくろのを(緒)が切れて、じゃこうこぼしに

をい(句)をもしろ、にほいをもしろ

九、南無薬師をもしし妻にはやめて候を、を花がくれ見(え)るうれ

しさ、見えるうれしさ

十、奥山なるいかづちのおでやる如く其如く

奥山の松にからまるつたの葉も、えんがきればほろりほぐれ

る、

国からは急げもどれの文がきた、おいとま申てもどれこささら、

以上からみて、この獅子の中心の演目は女獅子がくしにあることが

わかる。

演する時期 通常は秋の十月十五日となっているが必ずしも毎年

やれない。

(2) 東上秋間東(あずま)神社の獅子舞

由緒 創始年時不詳。信州の諏訪神社から伝わったという伝承がある。以前は十月一日の日をやった。獅子組の運営は総代と副総代が選ばれ、三年の任期で回り番でつとめた。昔は各家の長男だけしか獅子はできなかつた。一時絶えたが、子供に教えて復活し、現在は十月十五日にやる。



東神社の獅子カシラ

構成 前獅子、中獅子、後獅子の三人と、カンカチという付人が一人、大太鼓一人、鼓三人、謡い手一人、笛吹き五〜六人で構成されている。その他のものを加えると二〇人から三〇人が獅子に加わってやる。

カシラ 前獅子のカシラは巾一八センチ、奥行二八センチ、高さ一七センチで黒塗である。中獅子はホウガンといい朱塗である。巾一七・二センチ、奥行二三センチ、高さ一六センチ。後獅子は黒塗で、巾一八・一センチ、奥行三三センチ、高さ一八・三センチ。それぞれ戦後塗り替えたらしく、ウルシがま新しい。東神社の社務所に保存されている。

演目 道中の「道拍子」と神社でやる「宮廻り」と、本格的な舞の三つに大別される。道中の順序は万燈一花(二本)―笛―太鼓―獅子―見物人―花となっている。最初神社の境内で舞ってから各戸を訪れて演ずるが、全戸は回れないので三年で一まわりするようになってい

演目を順序を追って記すと次のようである。

一人三番(四方固め)

五人三番(獅子三人、狐、ひよつとこの五人の舞)

御幣掛り(五本の御幣束を一つずつとてゆく)

花吸い(ツバキの花を中心に躍り狂う)

ぬけ(四人で背を向け合わせるとき足をずる動作をする)

回り掛り

剣の初きよめ(三人の中ホウガンと後獅子が剣をくわえて舞う)

剣のつづき

種播き(農耕の仕草が入る)

糸まき(織物の仕草が入る)

これから「中切り」(中の切れ目)となり、ドラマ的な舞となる。

女獅子隠し(四十分からかかると)

提掛り(三区の獅子が橋を渡る)

庭くずし

引きは(終りの舞)

このほか、昭和三十三年に作製した東神社の獅子舞の台本をみると、「五人三番」の次に「幣掛り」があるし、「花吸い」の後に「笹掛り」が入っている。

獅子唄 台本(前記)によると、この獅子の歌詞は次のようである。

〔廻り掛りの唄〕

廻れや車は水車、おそくまわりてせきにまようなく

武蔵野に月も入るべし山もなおや、をばのかくれに引けよ小くも大

はながく

〔剣の舞〕

廻れや車は水車、遅く廻りてせきに迷うな

獅子の子は如何に剣が恋しくも、よれや我等に剣貸そうな

〔剣のつづきの唄〕

獅子どもは如何に舞獅子が恋しくも、よれてかえしてししゆわいそ

ばしよく

〔中切の唄〕

か島河原に霧よ霧よとせめられて、ならえ申したか島きり

〔中切のつづきの唄〕

獅子の子は京で生まれて伊勢育ち、腰にさしたる伊勢の御藏

武蔵野に月も入るべし山もなおや、大業の隠れに引けよ小雲

〔雌獅子隠しつづきの唄〕

獅子の子は生まれて落とるとひさを折り、それを見まねに熊のおりひさ

奥山を笛や太鼓の音がすれば、雌獅子雄獅子の心かわるな
思いもよらぬ朝霧が多くて、そこで雌獅子が隠しとられた
十五夜の月の色は変るとも、雌獅子雄獅子の心かわるな

奥山で松にからまるつたの葉も、縁が切ればほろりほぐれる
〔橋掛りの唄〕

白さは海の中にも果をかけて、波にゆられてばつと立ちそろう
このほか台本には笛の曲が演目ごとに記載されているが、ここでは省くこととした。歌詞でみる限り、この獅子も県下の一人立の歌詞と多かれ少なかれ似ている。



下秋間八幡神社の獅子カシラ



下秋間八幡神社獅子の付人 おとうか



下秋間八幡神社の獅子カシラ

(3) 下秋間中組八幡神社の獅子舞

由緒 創始不詳。流派は稲荷流という。県内で多い流派である。昔は毎戸の長男に限っていたが、いまそうではない。年番というのが五人選ばれ、この五人が一人ずつその年番に当たった。

カシラ 前獅子をホウガンと称し、巾二センチ、奥行二四センチ、高さ一七・五センチ。中獅子巾二センチ、奥行二五センチ、高さ一七センチ。後獅子巾二センチ、奥行二四・三センチ、高さ一七センチ。塗は最近塗り替えたらしく新しい。他の獅子組のカシラと大体つきりが似ている。

構成 一人立の前・中・後獅子とひよつとこ（火吹男）一人、狐（おとうか）一人の付人が合わせて二人。囃子方は大太鼓一人、笛十人、花と万燈は獅子一頭につき一つがつく。万燈には天下泰平などと書く。

獅子は小学校の五・六年生に教えてやらせている。その点では子供獅子である。

演目 この獅子独特のよび名で次のようになっている。動作や演舞の目的からつけた。

のうさま（神社の境内で舞う社前舞）

輪々（輪々）

踏ん込み

雌獅子かくし（神事的でなくドラマである）

オンレロ（酒に酔ったように軽く振る）

岡崎（笛の岡崎による命名）

歌切り（白鷺の歌の舞）

以前はこのほか「刺の舞」があったが危険なので現在は廃してやらない。演ずる場所は道行きをして、区域の宇佐八幡、毘沙門天、諏訪神社、観音堂、若宮八幡の順で境内で演ずる。ときに白山神社でも行う。各戸の庭の舞は総代と年番の家の庭で演ずる。

曲目 昭和三十一年十月に新井南花氏が校正して作製した「中組獅子舞笙歌集」によると次のように記されている。

源太笛・太鼓・つづみ・みち笛（通り笛）・入羽・飛違い・引きは・りんりん・おんろ舞にきてこれのお庭を眺むれば、黄金ご草が足にからまるよ

（のう様の唄）

このどはまいろまいろと思えども、はろしはあ引きはし

（雄獅子隠しの唄）

思いもよらぬ朝霧が下りて、そこで雄獅子がかくされたく奥山の奥山の松にからまる馬の葉は、ほろりほぐれる、縁が切ればほろりほぐれる

獅子の子が山で生まれて里に出て、これのお庭で羽を休める



下秋間八幡神社の獅子一式
格納櫃のふた

舞に来てこれのお庭を見てとれば、門は白金桂黄金よ、ああれ見さいな雨が降りそで雲が立つ、おいとま申して帰りししそろ

白さが海の途中に果をかけて、波にゆられてパッと立ちそろ、笛吹きの際にさしたる小鷗差の、つばも目釘も黄金づくりよ

れろ・岡崎・チウリヤ・フシゴミ・ヒーヒヤヒヤリコ・女獅子がくし・のう様の

この記録から見ても、獅子方は笛・鼓・太鼓が使われていることがわかる。現在笛は宮内孝平（五八歳）、脇田島数（五四歳）、太鼓大沢一郎（五四歳）、振付大沢一郎治の皆さんで、保存会長は旧大沢長太郎さん、現在その長男の大沢正一さんである。

獅子唄 台本によると次の唄がある。

（唄切の唄）

徴証 獅子を納める長櫃に次の墨書がある

明治八年九月、鎮守祭獅子頭三ツ入箱、下秋間中組中

獅子三頭狐面塗替昭和三十一年四月三日、大仏師板鼻千木良善弘謹製

若衆総代年番、大沢長太郎・金田房隆・原田時次郎・高橋慶治・武藤兼吉・大沢正一

上演日時 毎年十月十五日に神社の祭礼に合わせて演じるが必ずしも毎年ではない。

(4) 下秋間上組の榛名神社獅子舞

由緒 上組の獅子舞もその創始については不詳である。流派は黒駒流と伝承しているが県内の他にも見られる黒熊流ではないかとも考えられる。昭和五十四年四月に作った「安中市下秋間上組、榛名神社獅子舞譜」のはしがきによると「昭和三十八年二月、時の奉（法）眼田島茂一郎氏の指導により多胡正義氏・稲川直一氏の協力を得て口述筆

記。同年四月の春祭りに獅子舞を挙げる。尚訂正して一冊となしあるを比處に再版いたしました。過去に於て高崎護国神社に獅子舞の奉納あり、亦安中市制施行記念祝賀行事には安中市内に出張し、小学校庭に於て旧町村の獅子舞と共演奉納し、亦市内重だつた店舗や広場で賑やかに舞い、市中をねり歩き、記念行事に色を添えて以二十年、後継者の育成の機会もなく今日に至れり。当上組の獅子舞は昔は優雅な曲あり、活発な曲もあり、奇麗な曲は聞く人をしてほればれするものあり。舞はこれまた面白きこと他に類のない「酒のみ獅子」あり、「花すい」。「でんちゆがかり」のように静かな曲に生氣溢れる活発な舞を加え、動と静の交錯する最高の獅子舞を併せもつ上組の獅子舞を価値ある無形文化財として再認識し、後世に遺すべく、諸兄の御協力を切に御願ひ申上げる次第であります（中山記風）とある。現在一式は秋間公民館の民俗資料館に保管されているが、五十四年の秋に実演した。



下秋間様名神社の獅子カシラ



下秋間様名神社の獅子の法螺貝と腰太鼓



下秋間様名神社の獅子舞（撮影 近藤功）



下秋間様名神社の獅子舞
（付人はオトウカとヒヨツトコ
撮影 近藤功）

カシラ 他の獅子組のものとはほぼ同じである。前獅子・中獅子・後獅子のうち、前と後は二本の角逆八字型につき、中獅子は角がなく宝珠を載せている。作は江戸時代頃と推定される。

演目 曲目（笛）によって分け、「お宮参り」「宮詣り」「立ち笛」「ちゆうりやあい」「糸とり拍子」「抜ばち」「渡り拍子」「入れ羽（中休み）」「七つ上り」「入れ羽」「引き羽」「ちいひやれほ」「長短二種」「おおひやひやいほ」「どじょうふみ」「しりこけたれほ」「おかさき」「こちうどん」「おはるとん」「大天狗」「とおほろり」「前がかり」「小天狗」「女獅子がくし」「酒呑み獅子」「花すい」「でんちゆがかり」となっている。後半の興舞は演舞の仕草やドラマの主題をとって命名している。

曲目 演目がそのまま使われているが、笛の合間に合の手が先に入るのが注目される。

「どじょうふみ」に、「ヒヤレホー、ヒヤイガー、ヒヤーレ、ヒヤイ、

シリコケタレホー、トール、トホヒイ」とか「シリコケタレホー、トール、トホヒイ」とあるし、「しりこけたれほ」で「オカザキ、トホヒヤレホー」とある。「おかさき」に「コチユウドント〜」「こちゅうどん」に「オハルドント〜」が入る。

獅子唄 唄があるのは「とおほろり」と「女獅子がくし」だけであり、「とおほろりの唄」獅子の子は〜、山で生まれて里へ出て、これのお庭で足を休めろ〜

獅子どのは〜、伊勢や熊野へ参り来て、腰にさしたが伊勢の載いだ〜

この宮は〜どこの番匠が建てた宮、飛騨の匠が建てた宮、くさび一本宮を固めた

お稲荷さま〜、当所の鎮守へ参り来て、これのお庭で足を休めろ〜（神社で）

（女獅子隠しの唄）あれ見さえこれ見さえ、女獅子男獅子がきんで来る、これのお庭で足を休めろ〜

前獅子どの〜、なんぼそなたが隠しても、ついに一度はめぐりあわする〜

奥山のおく山の松にからまる鳥の葉も、縁が切ればほろりほろりくる〜

白鷺は白鷺は海のむこうに巣をかけて、波にゆられてパツと飛び立つ〜

囃子方 笛・大太鼓・しめ太鼓のほかには法螺貝があるから、これも囃子方に使われていることがわかる。

三、人形芝居

田碓水都と安中町地方は人形芝居の数が少ない。確認されるものは現在も上演できる松井田町八城一つのみである。中山道文化の影響で農村部にも近世に人形芝居が行われたという推測は当てはまらない。ところが下秋間には当時の人形芝居の一部が遺っており、「助たか人形」とよばれていた。昭和三十年頃大沢佐次郎さん方に保存されていたが、実演されたのは大正頃までだったようである。一人遣いであるが、現存しているのはカシラが十二個のみである（内塗り替えが三個）。そのカシラも芯串はなく頭部のみである。顔面は高さ九センチから一〇・五センチ位のものが多い。種類は立役、女形、ダラスケ、団七、ツメなどで江戸系のものと思われる。眉の上下する仕掛けは、付根で上下する式と、支点を中心にして先端が上下するものの二型式がある。ダラ助のみ口が動く。眼の動くのは立役カシラに見られるだけである。



下秋間人形カシラ（撮影近藤功）

この人形について公民館長田島伊作氏が、大沢長太郎さん（明治三十四年生）からの聞き書調査によると、この人形はもと下秋間日影一七五番地の大沢広志さん宅に保存されていたが、終戦後一たん安中市教育委員に委託していたが、現在は秋間公民館に保存されている。「助たか人形」というのは、下秋間日影



下秋間人形カシラ (撮影近藤功)



ぬりかえたカシラ (撮影近藤功)

の大沢たか、大沢梅太郎さん夫婦と、中島助太郎さんの三人が中心でやっていたことからそうよばれた。もともとこの人形一座は下秋間の刈又、川端、辻、相水、館、打越、若宮、山崎、日影の人びとが中心でやっていたが、特にたかさんは床山や着つけを愛持ち、三味線をひいたりした。助さんは義太夫が得意であった。梅さんは義太夫のほか一切の世話をしていた。昔は年何回かやっていたが、民家を利用して、座敷に舞台をつくってかなり盛大にやっていたが、明治の中頃に梅さんが事故でなくなつてから遠慮してやらなくなった。衣裳や大道具、小道具なども一切失われてしまい、詳細については全く不明である。

獅子舞人形芝居調査の資料提供者(敬称略)

- 小島 浦次郎 (八一歳)
 石井 鶴 寿 (七〇歳)
 多胡 藤太郎 (七二歳)
 関口 力 造 (七〇歳)
 福川 今 吉 (七五歳)
 大沢 長太郎 (七八歳)
 入沢 西 七 (七六歳)
 田島 伊 作 (公民館長)

ことに田島伊作氏には終始手配と資料提供にあずかり、また文化財保護課の近藤功氏にもご協力戴いた。併せて謝意を表する。

四、民 謡

(一) 八 木 節

八木節 六十年前から戦後までしたが、源太連が結成され、春祭四月三日、秋祭十月十五日に、八幡神社の神楽殿に幕を張って演じた。当時の人が、今も二人いる。(下秋間)

源太 かつては八木節とはいわずに、源太をするとか、源太踊りをするなどといった。名人といわれた堀越源太からきているのは、勿論である。

地域にはそれぞれ源太連があり、祭礼などの折には、盛んに行われた。山崎と宮原には、山宮源太連があり、中組には中組源太連があった。中秋間は皆に認められていた。中組にはすごい慢幕がある。源太の間に茶番狂言が入った。(十五区)

つぎに、「地名づくし」の八木節の歌詞を掲げておく。八木節に多い、その土地の地名を面白おかしく読みこんだたぐいの一つである。大正末か昭和初期の作である。

秋間村小字組入小唄

大塚和三郎氏作

大戸貝より下りし貝が、是が道行くお種子こねごとなつて、桑の木貝戸でちらりと見染め、主は森熊私は平、ここは山口都へ出よう、私とお前はよい中間で、人に知らるるおなかとなれば、親に明石で迷い小林よ、三軒茶屋へと腰打ちかけて、是を下れば麻沼へ移る。大石平間で上月ながめ、二軒茶屋へと泊りを定め、榛名道者に迷い起され、麴宝澤から般若澤越えて、山田下りて笠松さして、春の日和りに日影で休み、音に聞えしありや滝の入、ここに長岩出来蒔稲よ、

磐戸山へと参詣いたし、ここへ北原北川越えて、是を下れば御殿や三角、さても馬場の中屋ときけば、ここで一杯野村じやないか、二階座敷はさてよい景気、三味や太鼓に遠い浮かされて、主の恵久保に愛嬌受地、飲めば酔もの、はや十二時よ、鍛冶屋果物小供にさづけ、日向あるけば早すきばらよ、お手を拍して茶漬の無心、貝戸沢より伊豆村ながめ、貝や魚の大平つきで、弁当すませて外城へ出かけ、さても立派な池尻村よ、親子三人清水の樓へ、旅のつかれに泊りの無心、空の模様を案じて出かけ、熊の谷より吹き出す風で、木の巢谷津より櫻山あたり、人のなりふり三角で習い、蛇喰天空あるいたとても、人の浮名も岩下貝戸、酒は毎晩瑞林寺なり、黒後下りて女房の意見、辛抱しよう岩下までと、たとえ野の末笹原なりと、道城世帯が持たないほどに、かけしお願も靈應寺なり、二人中里末宮貝戸、櫛やかんざし油の谷津で、八貝戸の稲荷様へ、二人の身の上見ようと出かけ、末の運勢開くときて、気すい気ままに道楽すれば、末は藏人曾利や高原よ、一生苦世話は山崎なりと、茨が谷津でも厭いはせぬが、天台土台が私しや中の谷津、今や子供も六つや七つ、姥が懐しようはなれ、欠の上から根岸の辺を、日向下りて川久保あたり、釣や川狩気ままにすれば、家で親達子を松原よ、雄子峠を下りてみれば、よくも恨がらみ、ありや藤の木よ、七重八重巻、末は高貝戸、腹は満ちく心は吉田、茲が根古屋の出口ときけば、二人中山けふ立石よ、日影川端はや越石と、つはめ合ない胡又出来て、浮気山崎辻占みれば、主の運勢私しや松の木よ、年は打越気は若宮で、気節よければこの人が、畑中なる製糸で稼ぎ、仕事しまつてお湯へと下り、吉が谷なる鉱泉あびて、ここを出でて、み生仲間の川に、水に映りし寺山月よ、さても涼しい、自性寺橋で、一生つよく相違なりと、腰は弓なり心は矢なり、ここに高砂尾の上松の、末は榮えて落葉かくまで、(註) 提供 中沢多計治氏

なお、下秋間の八幡神社々務所に八木節の額がかかっている。

(二) 雑 話

子守唄

子もりっ子は楽なようて辛いもの
雨降り風ふきや宿はなく
家へいきや母さんに叱られる
おとつあんや横目でにらめられ
人の軒端で日を過す
ねろつてばよう、ねろつてばよう。(下秋間)

糸ひき唄

一にたのむは見番さまよ
十四三十五のワラを
揃うようにとお願申して
二に頼むは糸上げさんよ
さそやケツタンもつくらうけれど
そここのころをよう聞き分けて
糸も大切小わくも大事
もしも小わくをいためたならば
糸も切れるし糸目も切れる
糸目切ればしけんがさがる
しけん下がれば……検査様に叱られる
というようにつづくが忘れた。五十年以上前の歌だから、糸の口をひつ
つけながら歌った。検査が回ってくる時はすまして黙ってる。行って
しまつと大声でうたつたものだ。
ひとつつつければコイジュレン(恋人)のためと、思つてひつ
つけたら二十まる(十五にしようと思つてひつつけたら二十にもなつ
て太い糸になつてしまつたの意)少々ふざけた、おもしろい歌をうたつ
たものだった。(下秋間)

昔の歌

年の始めの福寿草
こがねの夜のあたたかさ
つづいて香る梅ばかり
うぐいす鳴かぬ里はなし
ひなの祭の桃の花
はころびそめて山々の
桜も咲けばなしすもも
みなひととき紅白の
棚の眺めのうるわしさ
野辺も山辺も新緑の
風にかけてさわく時
池水におうかきつばた
垣根にからむ朝顔の
咲き変わりつづいさぎよく
にこりに染まぬ白蓮の
牧場にもるつゆふぐり
夕暮れに咲く月見草
月見の頃も近づけば
はぎのうねりに矢くるたま
さきよかるかやおみなえし
秋の花房多けれど
中にも君の千代八千代
匂うや菊の花の衰
いつしが露もうらがれて
さみしき庭のさざんかや
北風さぶきやぶかげに
びわの花さく年の暮（下秋間）

梅干のうた

小学四年（大正三年頃）の読み方の本に出ていた。ふしはない。読み方が好きだったから自然に覚えた。ひとりて仕事をする時なんか口ずさむ。

二月三月花ざかり

五月六月実がなれば

枝からふるい落されて

何升何合はかり売り

もとよりすっぱいこの体

塩にからめてからくなり

しそに染まって赤くなり

七月八月暑い夏

三日三晩土用干し

思えば辛いことばかり

それも世のため人のため

しわは寄っても若い気で

小さい君らの仲間入り

運動会にもついていく

まして戦のその時は

なくてはならぬこの私

五、義太夫

義太夫はさかんだった。中後閑にオトリバアサン（田中とり）という二味線ひきがいて、この人を泊りこみで頼み、好きな人が集まって習った。上達するとオサライをひと晩やりこれに合せて八代（西横野）の人影を招いてやったこともある。よび状（招待状）を出したりしてにぎやかにやったもので、招かれた人はオツツミ（ハナ）を持って来

た。ハナは紙に書いてはり出し、ハナガエシには石けんとか手ぬぐいを配った。春のお祭りのときには、赤飯を軽木に包んで渡したりした。舞台はむしろがけで、蜜かごにミナガワをつけてつくり、加工場であったこともある。(東上秋間)

大正時代にはみんなで、舞台を作つて、農家の人が練習して演じた。娘義太夫も毎年埼玉や栃木の方から来た。人形芝居も上演して、そのあとで、浄瑠璃を語つたが、三十何人も出るので一晩では終らないで、次ぐ晩も続けた。出し物は「千代萩」・「太閤記」・「朝顔日記」・「関原千両織」・「二十四孝」・「井慶上使之段」などで、当時の見台や肩衣が残っている。(下秋間)

お座敷義太夫 高崎からこの義太夫の商売人を買つてきた。「お座敷すべえや」と皆で語り合つたものである。大正初期二十円位でかつた。(中秋間宮貝戸)

六、その他の芸能・娯楽

踊り 六郷連という踊りが盛んに行われた。「カツボレ」「奴」などが特にやられた。この六郷連は芸居の三番などもやれた。

地芝居 一時掛け舞台で地芝居を盛んにやつたものである。大体大正時代の初期までであつた。その後は買芝居が行われ、地芝居は下火になつてしまつた。

琵琶 現在の歌謡曲と同じで、大正時代には先生を頼んで来てやつた。受地のカツアンという人が好きで、よく宿をした。大正時代のことである。(東上秋間)

春駒 箕屋の婆さん(箕づくり)が回つてきた。わざと、切れっぱしの餅をくれたといつて、悪タレタ(悪口をいつた)。八十歳で亡くなつた婆さんで、でっかい声を出すので有名だつた。(下秋間)

神楽 八幡神社の春祭の時、野殿から一行を呼んで、神楽殿で神楽



下秋間八幡神社の神楽殿

を上演した。子供が参詣に行くとき、修身の本をくれた。(下秋間)

秋間地区の神社の境内には神楽殿のあるものが多い。東上秋間の東神社の神楽殿はことに立派である。下秋間八幡神社の神楽殿は鳥居、参道、社殿の一直

線上にあり、参拝者は神楽殿の下をくぐつて参拝する。この形式は県下でも珍しい。大森神社の神楽殿には明治十四年新築の棟札がある。山車 屋台に組み立てるための車台が残つていて、くさらないように黒池の水の中に埋めて置いた。引き回した覚えはないから、ずつと昔のことだろう。(下秋間)

競馬 直線コースの鉄砲馬場があつて、約二〇〇メートルを走るのを、両側の山の上から見物した。明治二十年ごろのことだ、鞍などなくて、座布団を農耕馬に付けて乗つた。度胸のいい乗り手が、足を隣の馬に掛けたりしてせり合つて勝つた。

自性寺や中秋間、原市のチカッチャマでもハゲサツ競馬を盛んにした。勝つた馬には賞品として、たんす・木炭十俵・石炭・梵天などが出た。五反のぼり、七反のぼりなど、大きいのぼり旗を立てて、景氣を付けた。

見物人の間を、木戸銭を入れるざるを首に掛けて回つて、銭を集めた。このざるを、蜜蝋のクワツミサルに使うと、蜜がよく当たるといふた。あつたか錢頭を売る店も出た。(下秋間)

鉄砲馬場 ウジ神様のお祭りに、鉄砲馬場で競馬をしたり、花火筒で花火をあげたりした。念仏の鐘や百万遍の大数珠もある。(下秋間)

人形芝居 甘藷郡小野村藤木の豆人形、碓氷郡八城の人形が来た、一回三〇―四〇円位、木戸銭は大人五銭、小人二銭だった。大きな家や蜜室等は秋間全体で学校の講堂を借りて上演した。(中秋間宮貝戸)

七、子供の遊び

魚とり どじょうとり 田んぼにいたのでショウギですくってとり、川干し どじょうをとるとき川をせきとめたり、水の流れを変えたりして川干しをしてとる。

ヒブリー 五月中がよい時期で、カンテラを下げて行き、ヤスで突いてとる。鳥川の方へも行っていた。

毒流し 山しよう、エゴの実、とか石灰をまいて魚を浮かしてとった。

ビッチ 子どもはショウギで、ビッチは大人の持ち物だった。

ウナギバリ ハリを買って来て、麻なわをなつてウナギムスビにし、メズのエサで夕方さげて来て、翌朝上げて来ると十本で四本くらいの割合で釣れた。セキではひもを長くし、荒なわの両わきに石をつけて、五本くらいのはりをつけて投げこんでおいだ。

秋間川にいた魚は、ギユウタ・カジカ・ギノス・ホトケ(ドジョウ)・ドジョウ・ガラツパヨ・ホンパヨ(ウグイ)・ドロツパヤ(鮎に似ている魚)・ヤマメは奥地にいた。(東上秋間)

オカンボロ遊び おきな草のことをオカンボロといい、塚山にたくさんあった。とつて来て、花をなめてはもむといはんばいにふくれた。女の子はお髪を結ってやつて遊んだ。(東上秋間)

トウカンヤの遊び イモガラを芯に入れ、わしを巻いて、なわでしつかりしばってトウカンヤをつくり、「十日夜はいもんだ。朝そばきりに昼だんご、夕飯食っちゃひつばたけ」といながら地面をたたいた。

もぐらが出なくなるといい、庭のかわいたところをたたくといひ音がした。(東上秋間)

弓矢 竹を割ってつるをつけて弓をつくる。矢は萱の茎に篠のやじりをつけてつくる。遠くへとばしたり、的をねらって射つたりした。

(東上秋間)

ゴムヒキ いまでいうバチンコのこと、ゴムは買って来て、山からふたまたの枝をとつて来てつくる。木の枝はミズキのようなものを使った。(東上秋間)

たが回し 古自転車のリームをとり中をはずして回す。棒はしのの棒。いい家の子はカジヤで作ってもらう。(下秋間)

モチつくり 小麦粉をよくかんで、水でかすを流してモチをつくり、メジロなどをとるのに使った。(東上秋間)

ブツチメ 篠や桑の枝を使ってブツチメをつくり、ヒトト(ほほじろ)などの小鳥をとった。(東上秋間)

水浴び 大きな子が先頭になって、麦わらを持ちよつて、川原をとんまえて(せきとめ)せきをつくり、そこで水浴びをした。水はきれいでツンムグリ(潜水)をしたり、さかだちをしたりして小石を拾つたりした。(東上秋間)

グミ 黄色いバラのグミはヤマイチゴという。甘くてうまいので山へどりに行つた。赤い田植えグミはしぶい。ギス(キリギリス)が鳴くころでる赤いバライチゴはギスイチゴといった。(東上秋間)

ツツジ 赤いヤマツツジの花をとり、蜜を吸つたりひもにさして首にかざつたりした。(東上秋間)

柿の花のズズ 柿の花の咲くころは、下におちた花を拾つて糸でつるべ、ズズをつくつて遊ぶ。(東上秋間)

れんげの首かざり れんげの花をとり、これを編んで首かざりにつ

くつて遊んだ。(東上秋間)

甘草の人形 チンソカンソ(甘草)の若い芽を使って人形をつくつ

て遊んだ。(東上秋間)

笹舟 笹の葉をとって、折り曲げて舟をつくり、小川に浮べて流したりした。(東上秋間)

ダンゴバチの蜜 れんげ畑でホウキでたいたいてとって、腹のところを切つてなめると甘い。たまにはさされることもある。ささないのが蜜がある。(東上秋間)

おきやつこと 茶わんかけや何かで炊事のまねをした。もちぐさをついたり、土でまんじゅうをつくって遊んだ。(東上秋間)

草笛 シビビ(からすのえんどう)の実をとって鳴らすとシビビと鳴る。

ビイビイ草(すずめのてっぽう)の穂をぬいて吹くとビイビイと鳴る。

ピンチャ(格)の葉をとって口にあてて鳴らす。(東上秋間)

壘の葉とばし カヤの葉をとり、両はしをさいてカヤの芯をとばす。遠くまでとんだのがよかった。(東上秋間)

かご編み 麦がらでかごを編む、ギス(きりぎりす)のかごを編んだり、ユスラゴを入れたりした。今の麦わらは機械でやってしまうから短くて使えない。(東上秋間)

パアブチ メンコのことをパアといい、遊びをパアブチという。相手のものをぶった風で裏返しにするのがオコシッコ、相手のものをきめられた枠の中から押し出すのがブチッコ、遠くまでとばして戸板などにぶつけて、相手のものとのきよりでとったりとられたりするものがブチッコという。(東上秋間)

トツコ 店から買って来たトツコ(紋合せ)で遊ぶ、紋ツケともい

う。(東上秋間)

オナゴ お手玉といわずオナゴといった。親につくってもらったり、自分でつくって遊んだ。ズズグダマ(ジュズグダマ)を中に入れて

た。(東上秋間)

まりつき コケを芯にして木綿糸を巻いてまりをつくったり、イモ

ガラのふくらんだものを丸めてこれに糸を巻き、ヌキ糸とか、ハタ(機)のミミを切ったところの糸をつないで使ったり、廃物の糸を利用して巻いてつくった。ゴムマリを買うことはなく、買ってもらった場合には毛糸で綱をつくって入れて使った。(東上秋間)

竹ナゴ 女もやった。竹を切つて割り、けすつて板をつくり、これでやった。親につくってもらったものである。(東上秋間)

キシヤゴ ガラス製は後から入つて来た。手でにぎつていてぱつとふり出してひろがったのをはじいてとった。オカッキリというのは、

手の上のせておいたのをほうり上げるようにして手の甲にのせ、更に再び手のひらの上のせる。おとしたのはだめという遊びもした。

(東上秋間)

アテナンゴ 二、三人で遊んだもので、キシヤゴを手の中ににぎつてかくして出し「みんなでいくつ」といって数をあてさせ、当ればと

られる遊びをした。(東上秋間)

ギンナンの遊び きれいに洗つて袋に入っているギンナンを買つて来て(一錢に十二個くらい)、数人でいくつかずつ出して、にぎつて振

り出し、一つ上に投げ上げている間に下にあるギンナンを一つとるとか、二つとるとかして続けてやり、とったものは自分のものとなる。

(東上秋間)

ホウズキ鳴らし ホウズキのできる頃にやつた遊び、ホウズキをよ

くもんで、中の種を出した。うまくぬけないので一生けんめいなんだもの。うまくぬけることをネモギといった。種をとったのを口の中に入れて鳴らした。

ゴムのホウズキ・ウミホウズキは売っていたもの。(東上秋間)

シバッコ チガヤの花芽がのびるころ、シバッコといつてとって食べた。皮をむいてもんで食べた。赤みがかったヘビシバコは食べなかつた。(東上秋間)

アジトリ いまはアヤトリというが、何の糸でもよく、縫い糸・毛糸のくすなどでもやった。長すぎて短かすぎてもだめだった。一人でやるのと相手がいてやるのとあった。川とかホウキとか、橋など、いまの人と同じものをやっていた。(東上秋間)

コマ 自分でつくった。ジندانボウゴマといい、松の木をけずり、下に段をつけ、ぶつつけっこ、けんかをさせた。割られるとちがうのをつくった。(東上秋間)

ジゴログルマ かい木を輪切りにして輪をつくり、板を利用して四輪の車をつくって坂道で遊んだ。(東上秋間)

釘とうし 篠の穂の先の方に釘をさしたものをつくり檜投げのように投げてどこかへさして遊んだ。また、線をはいておいて、投げてとんだきよりを競った。(東上秋間)

ツキデッポウ 篠を利用してツキデッポウをつくってトッカントツカン打って遊んだ。(東上秋間)

水鉄砲 主として夏場の遊びとして竹を切って来てつくった。(東上秋間)

羽子板 ミカン箱の板で羽子板を作る。線をはいて一生懸命作った。(下秋間)

ハネつきの羽根 モクレシジの木があって、拾ってきて、黒い実ににわたりの羽をさして使った。(下秋間)

竹とんぼ 竹を細工して竹とんぼをつくった。とびぐあいによっていろいろ細工しなおしたりした。(東上秋間)

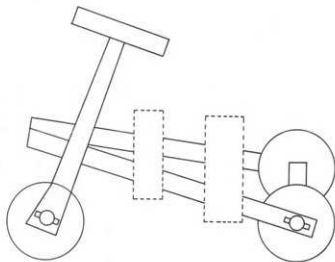
タコ 山へ行って竹をとってきてヒゴから作る。白い紙を貼って新聞紙のしっぽをつける。糸のつけかた、しっぽの加減がむずかしい。しっぽが長けりや上らない。かといって短けりや水くみする。紙をはるのにソクイを作るがひきわりめして作るからいくら練ってもねばりがなくて容易じゃなかった。(下秋間)

カクネッコ かくれんぼのことをカクネッコという。(東上秋間)

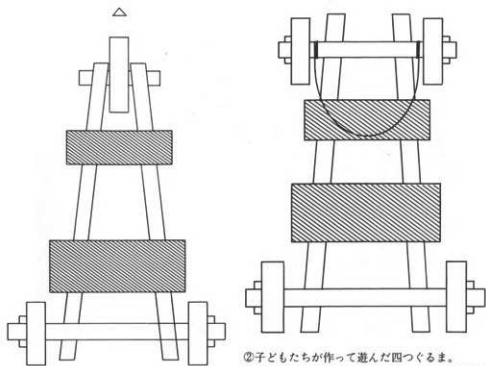
釘ぶち 釘たおしてもいい、五寸釘をもって、田んぼや、地面のやわらかいところ数人で、釘を打ちこんで相手のものを倒しっこをした。(東上秋間)

藤ぶち 藤の葉をとり、柄だけにして、何人かで出しあい、地面におとしてきた三角・四角のすき間の中へ、藤の柄をさしこみ、入った本数だけとれる遊び。たくさんとったからといって帰るときにはみんな捨てて来るのだがおもしろかった。(東上秋間)

その他の一般的な遊びについてはこれを略した。



①手づくりの三輪車 (下秋間 萩原良造さん教示)



②子どもたちが作って遊んだ四つぐるま。
車輪は丸太の輪切り、前につけたヒモでカジをとる。

有形民俗文化財

はじめに

今回の調査では、有形民俗文化財の調査にあたっては、秋間民俗資料館に収集・展示されている数百点にのぼる資料を調査することによってまとめる方法をとった。

秋間民俗資料館は、昭和五十三年三月、秋間公民館内に開設されたもので、公民館長田島伊作氏はじめ、秋間地区有志の手によってつくられたものである。収蔵された資料は、生活用具（履物、食器、調理具、年中行事に関係したものなど）、農耕具、養蚕、製糸、機械用具等、諸職用具（踏鉄屋、下駄屋、板割り、木挽き等）その他の広範囲にわたり、全資料を展示して一般に無料公開されている。

調査には一〇〇余点を選び、生活用具を阪本、生産関係の用具を阿部というように分担して、全体を阪本がまとめた。個々の資料の中には、県内各地と特にちがう点もみられないが、ネコカキや、タアラッパアシ台、ハツリ弁などは新しい報告であり、下駄職人の使用した各種のノミを中心とした道具類は特筆すべきものである。養蚕具、機械用具などは都合で調査ができなかったが残念である。本文を参照せられたい。

調査にあたり、終始、秋間公民館長田島伊作氏、館長補佐須藤西八氏にお世話いただいたことを感謝申し上げる。

（阪本英一）



秋間民俗資料館

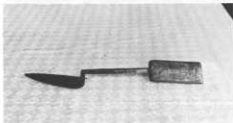
展示室の一部 台所用品の展示風景

1. 生活用具

(写真・阪本英一撮影)

こて 火のしではできない細い部分にあててしわのばしをしたり、形をととのえたりするのに使ったこては、大小さまざまなものがあった。本資料はやや大きめのもので、柄には桐の木を切さしてある。多分最初の柄はなくなったのであろう。

全長 32cm



火のし 電気アイロンの普及する前は、どこの家でも使われていたもので、火入れの中へ炭火を入れ、熱いのを布に押しあてた。柄は素木のままで、丸くしてない素材なものである。

全長 42.0cm
火入れ径 14.5cm



アイロン 火のしと電気アイロンの中間のもので、上部のふたをあけて炭火を入れ、裁縫後の着物や洗たく後のしわのしに使われた。形からわかるように電気アイロンに発展するものである。



小物入れ タンスの小さいもので小さい引出しがいくつもついて、小物入れとしてべんりにできている。本資料は雙結い道具を入れていたといわれるが、あるいはお歯黒道具も入れてあったかも知れない。

タテ 25.5cm
ヨコ 32.8cm
高さ 25.0cm



みだれかご 衣服を脱いだときに入れたり、整理しておくかごとして使われたもの、竹製、桐代欄のもので、農協婦人部の使用していたもの。

タテ 39.5cm
ヨコ 62.5cm
高さ 9.5cm



サシバ ぬり下駄・女もの。



サシバ 桐下駄・女もの。



サシバ 桐のごさうち下駄。



下駄 ごさうち下駄・年輩用。



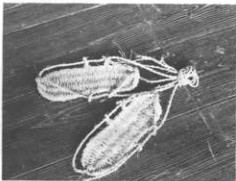
下駄 ごさうち下駄・ぬり物。



ハナムスビ わらぞうりの最も一般的なア
シナカ。しかし足半よりは長くつくられ、作
業用にはかれる。鼻緒の結び方がひげをのば
したようになっているので蛇降けになるとも
いわれている。



わらじ 岡田実五郎氏作製のもので、チ
（乳）は4つの標準型である。昔は旅に出る
ときや山仕事などにはわらじをはいて行っ
た。今でも祭りのとき、獅子舞にはわらじが
必要である。もとは雨の日や夜なべ仕事につ
くったが、現在ではつくれる人も年々少なくな
って来ている。



アゲザル ゆでたものをアゲ（入れ）て、
水切りをしたり、水の中でさらしたりする
ときに使用するザルで、竹製。一般のザルとち
がって朝顔型になっているのが特色。

口 径 38.5cm
高 さ 21.0cm



オカモチ 水分を含んだものをこの中に入れて乾燥するものと説明が付けられているが、夏季、ウドンやボタモチなどを保存するためこれに入れて井戸につるすこともある。竹製、ふたつきで、浅いものもある。

最大径 34.0cm
高さ 42.0cm (柄も含む)



ミノコシ 文字通りミノコシで、汁をつくる時、この中に味噌を入れ、すりこぎ様のものでかきまわすと味噌がふれ、こうじの麦のかすもとれる。また、汁の実の野菜を切ったときなどこの中へ一時入れることもある。

口径 22cm
高さ 13cm



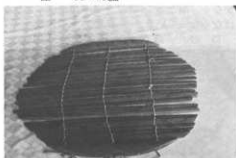
フカシドウ 曲げものでできたせいろうで、赤飯やまんじゅうなどをふかすのに使用。下部が二重になっていて補強されている。中に竹の簀の子を入れ、シキン(敷布)をかけてからふかすものを入れる。

径(口径) 25.0cm
(底径) 26.0cm
高さ 14.5cm



簀の子 フカシドウ(せいろう)の底に敷く竹製の道具。すだれ状に編んであり、商品化されたものもあるが手製のものも多い。

径 31×29cm



こね鉢 粉類をこねる時に使用したもの。うどん、そば、まんじゅう、まいだまなどを作る時には、この中に粉を入れてこねる。本資料はうるしをぬって仕上げている。

最大径 49.7cm
高さ 12.0cm



こね鉢 同前

本資料は木鉢屋が内側を彫り上げたときの刃物のあとがそのまま模様として残っている。

最大径 50.5cm
高さ 12.0cm



鍋 鉄製の鍋で、汁を煮たり、オキリコミをつくるときに使用、古く釜が普及する前は飯を煮るにも使ったといわれるが、本資料については、全体にひろがり大きすぎて深さがなく、形としては珍しいものである。つるはなくなっている。

口 径 35.0cm 深 さ 12.0cm



釜と台 鉄製の羽釜、炊飯用を主とし、湯わかし、野菜をゆでたり、うどんをゆでるときなど多様に使う。台は箱形で杉板でつくり、上部に釜が入るように穴をつくってある。持ち運び用の手かけもある。

台 34.5cm 方形 高 さ 13.0cm



ひしゃく(柄杓) 手柄杓といわれる小さいもので、水がめから少量の水を汲んだり、茶がまから湯を汲み上げるのに使用する。これから直接飲むのが柄杓水である。曲げ物。

全 長 41.0cm 高 さ 7.0cm
口 径 10.5cm



手桶 水汲み用の桶としてバケツの入る以前は広く使用されていたもの。タガが切れると桶屋さんにタガをかけ直してもらっては使用した。もちつきのときはこの中にもち米を入れたこともある。

口 径 37.0cm

高 さ 50.0cm



ホウロク 鉄製、いろりにつるし、焼餅を焼いたり、餅を焼いたりする。粉をゆるくといいてこの中へたらして焼けばジリヤキができる。固くなったマイダマを焼くのも、節分の豆をいれるのもこのホウロクである。

口 径 30cm



鉄びん(小) いろりにつるして湯をわかす道具、戦後しばらくは使用されたが、いろりが姿を消すにしたがって見られなくなった。

高 さ 30cm



鉄びん(大) 高さ 43cm



もちやき 県北部でワタシとよばれているもので、全国的にテッキといわれる。いろいろの端におき、火をかき出してこの上でもちを焼いたりむすびを焼いたりする。本資料には持ち易いように把手がついている。

全長 54cm



ワラビツ 県下各地ではイジメとよばれているわら製の櫃入れ、冬季、この中にオハチ(飯櫃)を入れて保温に使ったり、里いもなどを入れて凍みるのを防ぐ。秋間地区では毎戸あったものでもないようである。

径 フタ 47.5cm

ミ 43.0cm

高さ 32.0cm



カマシキ(釜敷) 釜を板の間や床におくときに下に敷いて、安定するように使用するわら製の輪で、芯になる丸い輪をつくった上にきれいに編みこんでつくったもの。簡単に縄を巻いてつくったものもある。

最大径 28.0cm

高さ 4.5cm



薬研 チンビ(みかんの皮)、とうがらしをつくる時に薬研を使った。また花火をつくるため火薬をこまかくするのにも使った。本資料は木をくりぬいて本体を埋めこんでつくっており、安定のよいものとなっている。

全長 36.5cm

高さ 23.0cm



石臼 米や麦の製粉に用いたほか、キナ粉やソバ粉の製粉にも使用した。把手の部分にのびた石が特徴であるが、これで回転を楽にしている。硬い石臼のメも長い間には摩滅するの職人に影ももらったりした。

最大巾 44.0cm

高さ 下 10.0cm

上 9.0cm



メンバ ナナツバチとよばれる七ツ組の丸小鉢、曲げもので、うるしぬり、神さまへの供えものに使ってからは二ツ組にして弁当入れに使用する。小さい方の二ツ組はお菜入れになる。

径 右 15.3cm 高さ 6.2cm
左 14.3cm



箱膳 ハコゼン、ゼンバコ、オゼンバコなどの名でよばれ、チャブ台が普及するまでは日常のお膳として使用された。箱膳に入れる食器は、忙しい時には大い洗わないでしまったもので衛生的とはいえないが、重宝だった。チャブ台の普及でなくなった。

タテ・ヨコ 27.3cm
高さ 13.0cm



徳利 酒器として親しまれて来た徳利の中で、首の短い賞之徳利といわれるもの。これで酒をつるした時代は遠くだったが、染めつけされた名前に親しみを感ずる人も多からう。当地区には地元の高で焼いた自性寺焼きの徳利や、盃などもまだ多数残っているものと思われる。



柳樽 いまも家内喜樽と書かれるものでツノダルともよばれるのは上に二本のばしてあるからである。祝儀のときに酒を入れて運ぶもので、素木のままのもの、うるしぬりのものもあり、ミガキのかかったタガをかけてある。2個で一荷といった。

高さ 39.7cm



ヤナギダル ツノダルのヤナギダルと同じく、祝儀のときに酒を入れて持ち歩くもので、それも馬の背につけて来るためにつくり出されたといわれるもの。これが花嫁と一緒に同伴したものはるか昔の話になった。

最大高 42.7cm 奥行 12.8cm
巾 42.7cm



膳椀 祝儀、不祝儀が、村中の行事になっていたころは、膳椀は個人持ちでなく、共同で用意しておいたことが多かった。これは、藤ノ木岡田組のもので、必要があると借り出して使い、また保存しておいたものである。

膳 31 cm 方形
高さ 11.8cm



お櫃 膳柄だけでなく、お櫃も組み物として用意されていた。お櫃としゃもじ、膳と組んでいる。これも藤ノ木岡田組の共有である。

膳	27.0cm	方形
高さ	5.3cm	
櫃	径	21.5cm
高さ	11.5cm	



ユトウ 人寄せのときの料理にはうどんが出されたが、汁のオスマシはユトウに入れておわんの中に注いでまわることもあった。湯つきとして使用されたこともある。うるしぬりで膳柄と組み物になっている。

最大巾	27.0cm
高さ	15.5cm



吸物椀 結婚式のときにつくられたお吸物は二通り（三通りは上等）はきまりで、鳥の吸物、オトウフの吸物、時にカマボコの吸物がつくられた。料理番の腕のみせどころだった。吸物椀も組み物で共有のものを使ったりした。藤ノ木岡田組のもの、全の文字が入っている。



膳椀 旧家といわれる家では、膳椀が用意されていて、客人の来たときとか、人寄せのときに使われた。本膳といわれるもので、すべて木の椀が使われ、2汁5菜とか2汁7菜とかの料理が出されたのである。

高さ	17.6cm
方	31.8cm



庚申の膳椀 庚申講のときに使う膳椀を庚申組で持っていることが多い。この場合には、箱膳と木椀。箸と一組そろっているものである。箸は竹を割って削ったかんたんなもので、これで庚申椀にも供えた。紋は庚申の紋といわれる。

(秋間民俗資料館保管)



庚申講の膳椀 箱膳で組み物になっているもので、木椀と皿がそろっており、箸はないが、他の膳椀と区別するために、庚申講と文字が書きこまれている。

(秋間民俗資料館保管)



ひな人形 大正時代のもの
(秋間民俗資料館保管)



ひな人形 明治時代末期のもの
(秋間民俗資料館保管)



ひな人形 (秋間民俗資料館保管)



ひな人形 明治時代初期
(秋間民俗資料館保管)



アアボ・ヒイボ 笹のついた竹の枝に、ヌリデンボウ(ヌルデ)の木を切ったものをさして、堆肥の上に乗る。半数は皮をむいてある。小正月のツクリモノの一つである。

(萩原作造氏作)



アンカ 冬のわら仕事のとくに暖をとるために使用したもので、箱の中に火入れを納めてある。上部から背面にかけてトタン板で傾斜をつけてとめてあり、熱を反射するようにできている。

タテ	25.5cm
ヨコ	26.5cm
高さ	29.0cm



こたつ 移動の自由な置きこたつで、アンカともいわれる。廻りごだつにくらべれば火力は弱いが重宝な暖房具として普及したものである。火入れの中には炭火を入れるが堅炭といわれる木炭の利用が普及させた理由で、熱源が電気にかわった現在は、珍しいものとなってしまった。



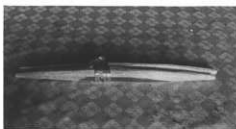
花火筒 戦前は、祭りのときなどに花火をつくって上げたもので、その時の花火筒が神社の社殿の片隅に放っておかれる例が多い。ここには四本あって昔をしのばせている。

全長 156.5cm
140.0cm
109.5cm
66.0cm



ハラミ箸 正月15日の小豆がゆを食べるときに使用する箸で、13日ごろ、ヌリデンボウの木を割ってつくる。家族の人数分つくり、中央部が太くなっていて稲の穂ばらみを表わしているという。実際には食べずらいものだが、必ず使うものだった。

全長 25cm (萩原作造氏作)



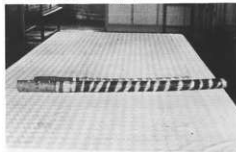
カユカキ棒 ハラミ箸と一緒につくるもので、根元の方は杭のように尖らし、上部は4つ割りにする。木はヌリデンボウ。2本1組とし、半紙に包んで稲わらで結び、15日の小豆がゆが煮えたときこれでかゆの中をかきまわす。あとは神だなに上げておく。

全長 41cm (萩原作造氏作)



カタナ 小正月のツクリモノの一つとしてつくる。ヌリデンボウの木で大小2本、皮をむいたところに籾のつるを巻きつけておき、14日のドンドン焼きのときに持って行って火の中に入れて焦がした後、持ち帰って門口にかかけて魔除けとした。

全長 67cm (大)



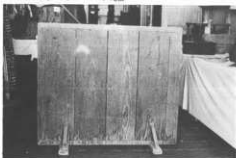
ハナ 小正月のツクリモノの一つ（ハギと思われる）木の皮をむき、刃物で一方にけずりを入れてまとめてつくる。これは粗い削り方なのでチヂレはほとんどみられない。13日のマイダマサシのとき、マイダマカザリにかざった。

全長 16cm



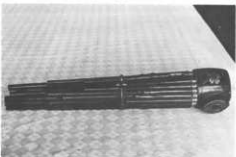
ついでに 杉板でつくられた素朴なもの、これを土間の木尻とよばれるところに立ててお勝手との仕切りにしたりした。大きいものには、上の方に作業衣を掛けたりした家もある。

巾 109cm
高さ 94cm



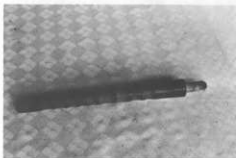
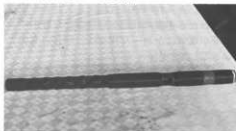
筧 秋間地区は、神葬祭のところが多い。葬式のときは笛・太鼓ではやし、笙、ひちりきでやることが大正時代ころまではふつうで、村人が練習していた。いまはやる人がないので、神官が拝んでいるときはレコードでやるようになった。

全長 39.5cm



笛 しょうと同じように神葬祭のとき吹いたもので、いまは東神社に納めてある。

全長 40.3cm



2. 生産、生業用具

(写真・阿部正恵撮影)

1 農耕用具

テング(手振) もっとも基本的な農具で、田畑の耕作に欠くことのできないテングは、その土地の土質や作物の栽培方法によっても型態のちがってくるものである。土地の鍛冶屋と農民との長い年月の工夫の結果である。

右 柄長 124 cm 刃長 39cm
左 " 130.5cm " 41cm

(松井田製作所製)



マンノウ(万能鉞) 備中鉞とよばれるもので、マンノウとよばれるように田を掘りおこすのに使用するとき、どの農具にもまして有効だったことによる。刃が3本なので3本鉞ともいわれている。

柄長 121cm 刃長 25cm



土入れジョリン 春先、麦の分けつ促進と根を強化するために土入れという作業をしたとき使用した農具で、柄は竹製、刃も薄く、金網でふるいこめるようにしてある。同じ構造のもので砂利をさらったり、道路工事に使用するジョリンもあった。

柄長 117cm 刃巾 16cm
刃長 25cm



土入れジョリン 金網のついたのが戦前のもので、これは戦後に出てきたもので、刃も先が尖って、剣道具の面のような形に付られている。柄は木製になったが持ち上げてふる作業なので軽量につくられている。

柄長 140cm 刃巾 28cm
刃 39cm



ヨツゴ 草やごみをかき集めたり、土をならし、土塊をつぶしたりするのに使用するもので、ヨツゴとはいうが刃は4本ばかりでなく、5本、6本とあり、麦作のとき作の間にある稲株をかき出したりすることもあり、そのあとで土入れジョリンで土入れをした。



エンガ(柄鉞) 畑の土を耕起するのに使用する農具で、ゆすりこむように押しこんだあと、テコの原理を利用して掘りおこし、土を動かす男性用のものである。群馬を代表する農具といえるエンガも、昭和40年ころまで、現在はほとんど利用されなくなった。村岡製。柄長 175cm
刃長 105cm



オング 牛馬にひかせて水田をすきおこすとき使用したオングは、シンドリとよぶすき手の持つ角度によって深耕も浅耕もできた。これは刃先の角度を左右に変換できない一方すきのもので、田の中を一方方向にぐるぐるまわったものである。

全長 約170cm 刃長 54cm



オンガ 木製のオンガをもとにオール金属製にしたものが戦後売られ出されたが普及しないうちに終わってしまった。これはいつごろ購入したか記憶がないというが、刃先が交換できる型式のものもあったようである。刃先は鋤物である。

全長 130cm 刃 47cm



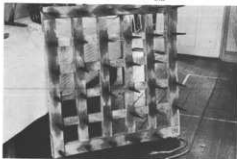
マンガ (馬鉞) 牛馬にひかせて水田のしろかきを使う農具で、ハヨウナワをかける部分の木製のものが古いが、これは鉄製である。馬の体に合せてつくるといわれ、ケン (刃) は9本から12本くらいだった。耕運機の普及によって姿を消した。

最大巾 93cm 高さ 約80cm



ヤグラ馬鉞 ズリマンガともいわれ、水田裏作の麦まきの時、オンガですきおこした後の碎土、整地作業に使用された。栗材を使用し、井桁に組んだところに鉄の刃を打ってある。刃の数は35本、牛馬耕をしなくなって使われなくなった。

90×90cm 刃 24cm



草かきつめ 草とりを使用する農具だが、草かき (浅鉞) のように草を削り取るのではなく、草を掻きとったり、掻き集めたりするには使用したようである。つめといわれるように4本の刃は約5cmと短く、ひろがりも7cmという小ささに比して柄が長い。

柄長 113cm



八反どり 田の草とりは苦しい労働であったがこの道具の出現によって除草と中耕も一緒にできて、1日に8反歩もやれるというのでこの名がある。これは栃木県壬生町の飯田農機製作所の製品である。

全長 150cm



株とり八反 ふつう8反どりは作の間の除草はできるが稲の株と株の間はできない。そこでふうされたのが株とり八反で、先端はすべりよくつくり、回転部分も稲株を傷つけないようにつけられている。これは山形県米沢市の米沢産業の製品である。

全長 約140cm



かご ひもで腰につるして作業するかごで、栗拾い、キノコとりにも利用できる。粗いかご編みで手製のものが多い。底は長方形に近く、口のところはだ円形になっている。

口径 23.5×20.5cm 高さ 20cm



千歯こき 稲の脱穀のために大正ごろまでまさかんに使われていたが、日中戦争前くらいまではみた。稲をひとにぎりずつ持ってひっかけてこいた。別名かごこきともいう。千把もこけるというおどろきも江戸時代にはあったろうが機械万能の時代では資料館にその姿を残すだけとなってしまった。



麦打ち台 麦の脱穀用具として昭和初年ころまで使用していたもので、すのこになっているところへ麦束を持って打ちつけて脱穀する道具で、これは3人ほど並んでやれたものである。穂首から落ちるものも多く、このあとくり棒などで打ったものである。

大きさ 180×65cm 高さ 52cm



くり棒 麦や大豆などの脱穀用具で、むしろの上に穂をおいて、うまく拍子をとって回転させながらトントン打って脱穀した。柄には竹を使い、クルリと回転する部分の木は桜などを使用した。ボウウチボウ（棒打棒）ということもあった。

最大長 208cm 柄長 140cm



足踏脱穀機 脱穀の機械化の第1号で、2人で向き合って踏んで回転させた。大正6年6月購入で、製作は東京、農益社本店、保証、鋼鉄製、玉入特別製とある。はずみ車がついていたが、2人で踏んでも重かったという。

最大巾 約100cm 高さ 約90cm



足踏脱穀機 改良されて足踏みも軽くなり、動力化するまでは主役となっていた花形脱穀機。老人の中にはガーコンとよぶ人もいるが、これは機械の回転音からつけられたものである。1人用と2人用があったという。

巾 62cm 高さ 62cm

奥行 67cm



フルイ 穀類の調整のとき欠かせない道具として使用されるフルイには、モミトオシ、ムギトオシ、マメトオシがあり、他にヒキワリトオシ、粉フルイもある。それぞれフルイの目が細かい、竹製金網製があり、粉フルイは布を使用している。

径 52cm 高さ 7cm



フルイ 持ち上げてゆする作業から、一方を固定して手に重さがかかるとのをなくし、より大量の選別ができるようにくふうされたフルイで、大極上改良 米麦篩と書かれている。ひかくな新しいもので、これと同型式のものが砂利フルイにも使用されている。

最大長 115cm 巾 55cm



俵口 斗ますや箕の中に入れた穀物を、俵とかカマスに入れる時に使用するもので、ジョウゴ（ロウト）のようなもの。俵を上口にしてこれをさしこめば、少しぐらい乱暴にしてもこぼれない。俵を使用しなくなって無用になってしまった。

最大径 62cm 底 18cm
高さ 40cm



斗ます 1斗（18ℓ）入りの桶で、古いものには小判型のものもあり、四角のものもあった。穀類を目方でなく量目で依装して扱っていたときに使用されたもので米1俵4斗などとしていた。上部を水平にするための、カッキリ棒というものも使用した。これはひかくな新しいもので、鉄のどつてがついている。



ネコカキ ネコ（むしろ）をつくる台で、たてなわをかけ、よく打ったわらで1目ずつ編む作業は夜なべ仕事や冬の農閑期の仕事でネコをカクといい、指がいたむので指に布を巻き、ソクイ（米ののり）をぬって固めて、1枚1週間もかけた。ネコは脱穀作業のときや、天日で穀物を乾燥するとき使用した。



籠 秋間地区は、わら製品の生産が多かったことで知られているが、わらじ・ぞうり・なわ・ネコ（むしろ）づくりには、わらをよくなたいてやわらかくしてから作業しなければならぬ。その時に使用するのか輪で、片手で桶わらをまわしながら、片手でたたいたものである。



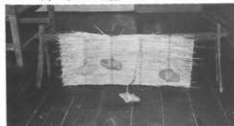
俵あみ台 ふたまたの木を2つにひき割って台にしているのがよくわかる。金具を使用していることや、おもりの形からみてこの部分品だけ購入したようにも見えるが、昭和10年前後、大いに使用されたという。カヤを使えば炭俵を編むこともできる。

最大巾 120cm



俵あみ台 俵は穀物を入れるための容器で、昔はどこかの農家でも自給自足していたし、中には副業で夜なべ仕事をした家もある。台はふたまたの木を2本使って（割ったこともある）その上に木をわたした簡単なもので石を使っている古い型のものである。

最大巾 126cm
高さ 45cm



タワラップアシ台 俵の両端にふたをするタワラップアシ（棧俵）をつくる時に使用する台、大きさがきまっており、必要なわらを台の上において、上にはのぼっておさえながら、ぐるぐるまわって編みこんでつくった。中央がみぞになっているのは、タワラップアシの帯のような部分をつくるためのものである。

径 28cm
高さ 4cm



タワラップアシ 俵の上下の口をふさぐふたのことをタワラップアシといい、俵を編むときには編んだ俵の2倍のタワラップアシをつくることになっている。円座のような形で、上には帯のようにわらがかけられている。使った古いタワラップアシは、竹で編んだ苗とり台に結びつけて使ったりした。



着ごぞ 雨具として昭和20ころには、各自で家で作って着た人もいたというが、その後は農協や雑貨屋で買った。田植えのように背を丸めてする作業にはべんりて、首のところがくふうされていた。田の草とりにも陽除けとアブ除けに着た人もいた。ケデエ（みの）のように長持ちしなかった。



ケデエ ケデエ（みの）は、稲わら・しゅうろなどを材料にして自分でもつくった。これはしゅうろを使い、表は鳥の羽のように重ね、裏は編んである。雨具として欠かせないものであるが、田の代かきのときハナドリに着せたり、田の草とりのとき着ることもあった。現在でも利用されているのを見ることがある。



シヨイコ ショイッコともいう。新炭・桑・稲・麦など山仕事、農作業で背負うとき用いる。車の入らない傾斜地では大切な運搬具で、背中の当る部分にはなわを巻いて痛くないようにした。リヤカーが入って使う機会がへり、一輪車が普及して使われなくなった。

全長 130cm
最大巾 30cm



シヨイビク 岩しばを利用して作られたもので、ナップザックと同じ形をしている。下部はこまかく編み、上の部分はずちに入れたものがよくわかるように目が大きく編んである。弁当や小物を入れて利用したもので重宝なものだった。いまでも利用されている。購入したものである。



ジュウロウタ 背中当てとか肩当てということもあるようで、かごなどを背負うときに背中に直接あたらないようにつけた。わらを編んでチョッキのようにつくり、肩の部分には布を入れてやわらかくなるようにしたようである。冬の仕事を老人がつくったりした。ジュウロウタは主に男子が使い、草刈りには欠かせなかった。



ビク 馬の荷鞍につけて堆肥などを運んだ道具、梯子のような木の枠になわで編んだ袋をつけたもので、すり切れると再び編んでとりかえたものである。堆肥をつけるときには一方を棒で支えて入れ、平均をとらなければならず畑などであけるときには一度にあげないと倒してしまうこともあった。

長さ 115cm
巾 50cm



2 諸職用具

板挽鋸（木挽き鋸） 木挽きを業とするものにとって鋸は生命であり、木材の材質や、その処理の目的によっていろいろの種類があった。これは歯の長さに対して柄までの長さが極端に長く、使用にはこの外技術を要したものとと思われる。銘不明、製作地不明。
全長 約160cm 刃 55cm



板挽鋸（木挽き鋸） 板挽き鋸として立木用に使われていたらしいが、実際に使用した人たちはすでに死亡しているので不明である。刃は巾32cm、長さ45cmほどで、刃と柄の角度が直角に近い。手前のは刃と柄の間が近く、やや細目の木に使用したようである。
手前 全長約100cm 後 全長約 66cm



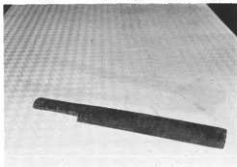
わりなた 下駄の材料を山でとるとき、輪切りにした木を割って荒加工する道具、山道は道が悪く、運搬に不便なため、下駄の原料の板をつくる。柄はトモガネのままとし、しびれないようにし、刃は両刃として平均に割れるようにしてある。

長さ 40cm
刃 28cm 巾 5.2cm



ハツリ斧 左側の斧がハツリ斧で、材木の突起部をハツル（削りとる）道具で、まさかりのようなものである。秋間地区の民家の屋根裏の梁材にこれでハツツたあとが残っているのが見られる。刃をさやで保護してあるが、このような斧を使うのは体力が必要だった。

柄長 96cm
刃 巾 14cm 長さ 25cm



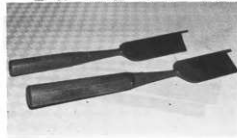
ハツリナタ わりなたと同じく山野で使用する道具で、わりなたで割ってつくった材料をある程度の形に切ったもので、よく切れる（すいつくように切れる）ものでなくてはならない。木の柄をつけてないことに注目したい。大正10年ころから昭和10年ころまで使用したものである。

長さ 37cm 刃 24.5cm



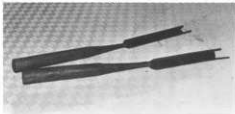
アグツキノミ アグとよばれる下駄の前方を突いて切るノミで、金槌は使わないで突くのだからよく切れないと仕上げがうまくできない。よく砥いでは仕事をした。このノミは、福島県会津の「重のり」という刀鍛冶あがりの人の作ともいわれ、東京浅草の花川戸で購入したものである。

全長 41.5cm 刃巾 7.5cm

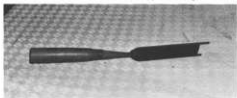


アイダツキノミ 下駄の歯と歯の間を突きながら削ったノミで、下駄職人のノミは全楯は使わない。このノミも使い方がむずかしく、なれるまで苦労する。2、3年はかかるという。会津の作で、昭和10年のころまでは使用したという。

全長	40cm
刃巾	3.5cm
刃長	16cm
柄	15cm

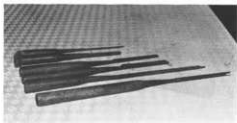


後ツキノミ 下駄の後を突いて削るノミで、大正5年ころ、東京浅草の花川戸で購入したもの。当時の修行はきびしく、仕上げがうまくいかないと涙の出るほどいやな思いをした。手はマメがつぶれ、いつも血がでていたという。会津の重ふさの作である。



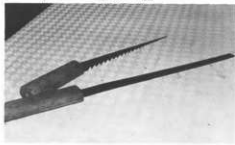
丸ツキノミ 下駄の前歯、後歯の元のところをつくるときに使用するもので、使い方が非常にむずかしく、特に仕上げはノメッコクできなければいけない。

写真手前から仕上げ、あらつき、ひらのみ(8分)、きくいち(6分)などで、きくいちはポックリのうらを菊の花の形につくる道具である。



ツッコミ 下駄をつくるとき、歯の元などで曲る部分に鋸を突っこんで切る。また1つの木から2つとる作業に使う道具。ツッコミ鋸には、横に抜く、縦に抜く、歯のこまかいものに使うもの等、いろいろな種類があり、道具の使い分けもむずかしかった。

手前	全長 57cm
後	全長 46cm



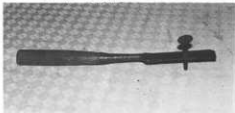
コテノミ 下駄職人専用の道具で、下駄の中でもポックリを作るときに使用した。裏の穴を掘るときはこれでやり、下をノメッコク(滑らかに)するので非常に技術のいる作業となった。大正初期から昭和初年まで使った。ポックリは塗りがめんどうで日数がかかった。

全長	約38cm
刃巾	2.5cm
柄	22cm



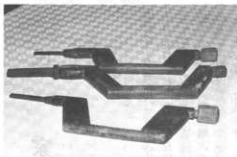
カタツキノミ 下駄の台に傷をつけないで歯の長さに調節してねじでとめ、歯の両横を削るものである。下駄はまとめて小さいものだが、製作に使う道具は、他に例を見ないようなものが多い。カタツキノミもその1つである。大正初年に東京浅草で購入したもの。

全長	34cm
刃巾	2.4cm



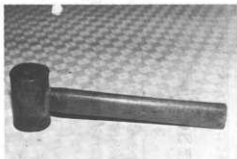
ツボギリ ツボギリは錐の一種で、下駄の穴をあけるのに使用する。下駄の台を足でおさえ、刃をあてて手でまわして穴をあけるが、キリの上部はアゴにあてて安定させてやる。写真前は後の穴あけ、中は前裏穴あけ、後は前穴あけ用。東京浅草で購入したものである。

全長 30~33cm



ツチ 下駄の歯を入れるときたいてい入れるもので、下駄職人用の特殊なもの、綱が入っていない地金のいいもので、やわらかい音ができる。下駄の歯入れはわずかのすき間も許さず、ソクイの榎も木の材質によって水でうすめる度合を加減した。

柄 20cm
槌 8cm



民 家

はじめに

この民家調査は予備調査と本調査の二回に分けて行なわれた。予備調査は昭和五十四年七月九日、秋間公民館長田島伊作氏のご案内によって、秋間地区内をくまなくめぐり、江戸時代および明治時代の末年頃までに建築されたといわれる民家に順次立ち寄り寄らせていただいた。そして昔の家業および母屋遺構の建立に関する伝承等聞き取りながら、家の周囲や主にダイドコ・大黒柱等をながめさせていただき、この結果古そうなもの、比較的改造の少ないもの、ある特定地域に片寄らぬことなどを配慮しながら本調査の対象民家を選定した。

秋間の場合も他の地域と同様に近年における近代化は顕著で、公民館のわきに鉄筋四階建のアパートをみた時は大変驚かされた。十年前に訪ねた時と全く景観が一変してしまっていたからである。道路は相当奥地まで、またかなり細い道まで舗装され、車での移動に大変便利になっていた。反面草葺民家はめっきり少なくなってしまう、今回の調査でとりあげた六棟が秋間地区において確認できた総べての草葺民家であった。

本調査は七月十三日・二十日・八月二日・四日・七日の計五日間にわたって実施し、現状平面図・痕跡図・復原平面図・現状断面図・復原断面図等の図面を採取し、一棟当り二十枚前後の写真撮影もおこなった。

本調査に際しては日本大学理工学専攻科地理学専攻大学院生田島豊

穂氏に、暑い中を連日ご協力いただいたのでここに記して感謝申し上げます。また御多忙中にもかかわらず家の隅々まで心よく開放し、みせていただいた各調査民家の所有者に心からお礼申し上げる次第である。
(桑原 稔)

一、調査民家の形式分類

調査をおこなった民家はいずれも建築当初より開放的にされ、室数も増加していた。これらを痕跡にしたがって復原すると、秋間の民家はその平面形式から次の五形式に区分できる。

- ① 三間取（広間型）の民家
- ② 喰違四間取の民家
- ③ 田字間取の民家
- ④ 五間取の民家
- ⑤ 六間取の民家

次に以上の各形式に属する民家遺構について、形式別に順次建築解説を述べることにする。

二、三間取（広間型）の民家

今回調査を行なった三間取（広間型）遺構は多胡昭一家・須藤寿家・坂田房吉家の三棟であった。

多胡昭一家（写真1-1）は改造激しく、細部の復原までしかねる遺

構であった。しかし復原された平面・断面図は図-1のようであり、土間(ダイドコロとよぶ)内に上屋柱を一間ごとになて、ダイドコロとサシキ境の柱をすべてチョーナ仕上げとしている。ダイドコロの裏側にたつ上屋柱のうち、サシキに最も近い柱をカマ柱とよび、この近くにカマ柱を据えており、カマ柱にはカマ(釜)神様をまつている。遺構は建立年代についての記録・伝承等を残していない。しかし、嘉永3年生れの先祖もあまり古い家なので、建て替えようとしてそのための木材まで用意したが、脳溢血でたおれてしまい、建て替のチャンスを失ってしまったという。当家は建築の原形の示す各種特徴から、一七世紀末期頃に建立された遺構とみてよければ妥当であろう。

須藤家(写真1-2)は多胡昭一家とよく似た特徴を持つ遺構である。しかしダイドコロ裏側では上屋柱を省略し、下屋柱まで梁をのばして下屋と上屋の架構を一体化しているところなどに新しい手法を認め得る。

須藤家の先祖についてのいい伝えは次のようである。

長享元年(一四八七)安中出羽守忠親は越後の新発田から松井田へ移住し、松井田小屋城を築城して、その城主となった。須藤家の先祖はこの時、越後から忠親に従ってきた四重臣の一人、須藤光豊の子孫であるという。

また当家は昔から俗称「イゲンチ」とよばれ、郷土ではイゲンチといえは誰でも知っているほど有名である。これについては次のように推察する。

忠親の弟忠清は原市に榎下城を築いてその城主になった。当家の先祖はこの時忠清の重臣として榎下城に迎えられたことから「榎下城に住える須藤家」という意味が、長い間に「エゲの須藤」になり「イゲノウチ」さらに「イゲンチ」というふうに変化して今日に至っているであろうと考えられる。

年の暮れになるとどの家でもモチをつくのがならわしである。しか

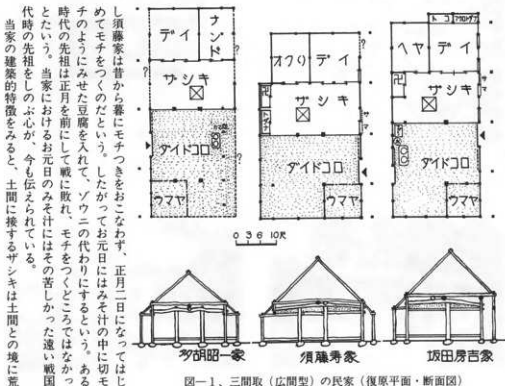


図-1、三間取(広間型)の民家(復原平面・断面図)



〔写真一五〕大塚豊富家（中秋間八貝戸）



〔写真一六〕湯本日出雄家（下秋間根岸）



〔写真一七〕島崎正治家（西上秋間下り貝）
（明治38年に撮影したもので、板葺の
様子がよくわかる）



〔写真一八〕磯貝源三家（西上秋間受地）



〔写真一〇〕田胡昭一家（下秋間根岸）



〔写真一二〕須藤寿家



〔写真一三〕須藤寿家、タイドコ
ロよりザシキをみる



〔写真一四〕坂田房吉家（東上秋間長岩）

くチョーナを掛けた丸太を玉石の上に横たえただけであり(写真13)、さらにザシキ表は半分を土壁で閉鎖し、他の半分をサマにするなど極めて閉鎖性の強い間取となっている(図11)。なお大黒柱はチョーナ仕上げとされている。

以上のような建築的特徴から、当家の建立年代は多胡昭一家より一部の構造に新しい手法を認めることができるといえるが、一七世紀末期頃まで溯る古い遺構とみてよいであろう。

坂田房吉家(写真14)は現在でもザシキを一間として使っていたので、三間取(広間型)の間取そのままの状態、即ち建てられた当時の間取で使われていたためらしい遺構例であった。眞跡によって復原するとその平面・断面は図11のようになり、大黒柱をチョーナ仕上げとし、逃げもない。当遺構は弘化元年(一八四四)に谷津村から旧家を買ってきて建てたものという。図11の平面は眞跡を重視して復原したものであるため、柱間装置・チョーナ仕上げの大黒柱等は移築前の様子とみた方がよいであろう。すなわち弘化元年に移築された時の柱間装置は、へやとテイ境の場合現在みられるように中柱を省略し、換障子としていたのかも知れない。またテイとザシキ表も現在のように中柱がなく、三本溝のうち表側二本に兩戸用板戸四枚を嵌め、内側の一本溝に障子二枚を嵌め込んだ方式であろうと推察する。

三、喰違四間取の民家

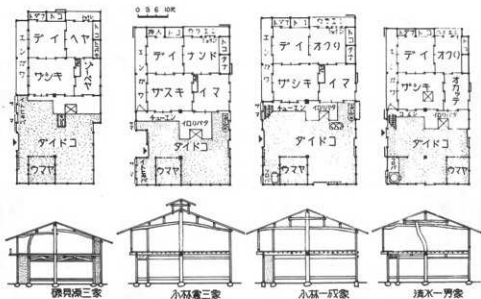
大塚豊富家(写真15)は喰違四間取の民家遺構九棟中で、最も古い遺構と考えられるものである。土間上部では小屋梁より少し低い位置に竹スノコ天井を張り、床部分上部においては小屋梁上に直接竹スノコを張って建設当初より屋根裏利用を考えている。また屋根裏への採光は左右の妻部を切り上げて低い兜造りとし、ここに幅一間の開

口部を設け左右の妻部より採光すると同時に、前面中央部の屋根を幅二間にわたって約一尺五寸程持ちあげ、こより屋根裏中央部に採光するよう考えている(写真15参照)。屋根裏利用を考えた早い遺構例とみてよいであろう。間仕切装置をみるとテイとナンド境を土壁で閉鎖し、テイ表は左右に袖壁を残し、中柱よりこの袖壁の内側(板戸(外側)と障子(内側))をそれぞれ一枚づつ引き込む古い方式をとっている。

遺構の建立年代については、いつのことか全くわからないという。しかし当家は当主(明治四十三年生)で九代目になり、火災にあつたり建て替えたという伝承もないこと、および遺構の原形を示す各種特徴等から、一八世紀中期頃に建立された遺構とみておけば妥当であろう。湯本日出雄家(写真16)は屋根の東妻に大きな破風を設けた入母屋造りとし、西妻を兜造りにしている。屋根裏を有効に利用するため、当初より特殊な架構としている。屋根裏への採光は東妻の場合大きくあけた破風よりおこない、西妻の場合兜造りにした幅一間の開口部よりおこない、正面では桁下に設けた背の低い開口部より考えられている。

当遺構は特に架構に注目すべき点を見受ける。例えば小屋梁を水平にかけず棟持柱で棟木を支持し、棟持柱に登り梁を架けたり、登り梁の上に束を立て棟木を支えるというような特殊な工夫をしている。これは屋根裏を本格的に利用するために考えられた特殊な小屋組架構法として注目される。このようにしてつくられた屋根裏は小堂葉蛭のために使われたものであり、養蚕農家の発達段階を示す遺構として貴重である。建築年代は一八世紀中期から末期にかけての頃とみておけば妥当であろう。

島崎正治家(写真17)は切妻板葺二階造りとし、特に二階の表側では二階梁を三尺程つき出し「二階縁」を設けている。これは養蚕空間の確保をめざしてつくられた二階に付属するもので、養蚕の時二

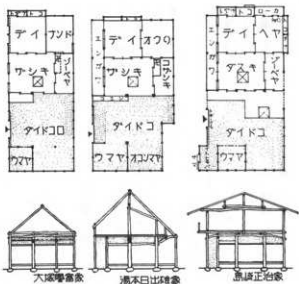


図一 2 喰違四間取の民家（復原平面・断面図）

階線があるとは大変便利であったという。この二階線をつくるために二階梁を突き出す家のつくりを当地では「出梁造り」とよんでいる。ダイドコではウマヤの前面を三尺程突き出し採光用のサマを設け、ここをイトヒキバとしていた。イトヒキバではコンロをすえ薪を煮るナベを掛け、サグりを通して主におばあさんや主婦・娘等が糸をつむいだという。

写真17は明治三十八年に撮影されたもので母屋ばかりでなく門および付属屋まで板葺屋根とし、主屋の棟上に三基の板葺ヤグラをのせた養蚕農家の様子をよく写し出している。

この遺構は現在トタン葺とされ左右の二基のヤグラ（ヤグラはもと



もと後補のもの)を取り除いて、門もトタン葺に改められている。遺構の建立年代は文政七年(一八二四)生れの松五郎さんの親が十六歳の時建てたということから文化元年(一九世紀初頭)の建立とみておけばよいであろう。大黒柱はカンナ仕上げとされ逃げを有していない。

磯貝源三家(写真一八)は島崎正治家と全く同様な平面形式を示し(図一七)、二階の表調にはニケーエンも設けている。当家は土間の出入口の上手二階をサマとし、この内側で糸ひきをした。東妻側に幅一間半の片流屋根の下屋(ツケヤとよぶ)を設けているが、これは後補のものである(写真一八参照)。

当家は代々名主を勤めた由緒ある家柄で、十代目の先祖である磯貝松太郎(号猶川)は天保六乙未年(一八三五)春三月に立派な「秋間志」を著している。当遺構はいい伝えによれば、古家を買ってきて建て替えたものという。しかし、その時期については何も伝えていない。建築の原形の示す各種特徴から、遺構の建替期は一九世紀中期頃とみておけば概当であろう。

小林憲三家(写真一九)は二階の前面における二階梁を一尺五寸ほど張り出し(出梁造りという)、一階より二階の床面積を増大させている(図一八断面図参照)。これは「ニケーエン」よりもさらに積極的に二階の利用を考えたものとみることができ、ニケーエンは外部空間であるためせいせい養蚕道具を置いたり、昼間道路として利用する程度であろう。しかし二階の外壁を出梁の先端まで移行した当家のような二階造りは、張り出した部分を屋内として利用できるわけであり、養蚕の増加に直接影響を与えた空間とみてよいであろう。このような二階造りは遺構から推察する限り、一九世紀中期以降に発達した養蚕農家にみられるものとみてよいであろう。

当遺構は明治十三年(一八八〇)に新築したものといい伝える。建築の原形の示す各種特徴からみても、いい伝えは信頼してよいものと

考える。なお、小黒柱の四面をカンナで仕上げているのも新しい特徴である。

小林一成家(写真一十)は小林憲三家の本家に当り、小林憲三家より一年遅れて明治十四年同じ大工によって建造されたと伝えられている。図一七にみられる如く平面や設備などは全く同様である。現在屋根を瓦葺にしている。これは三十五年前に葺替えたもので、当初は板葺石置屋根であったという。なお、小林憲三家の屋根も当初は板葺石置屋根であったと伝える。

昭和の十年代前半までダイドコでウマを飼っていたといい、養蚕は安中市原市にあった礪氷社の指導によっておこなわれたという。

清水一男家(写真一十一)は調査遺構中における喰違四間取の民家の中で最も新しい遺構であった。二代前の長太郎氏(昭和十七年四月六十五歳没)が十一歳の時に建ったといい伝えられることから逆算すると、明治二十一年に建築された遺構ということになる。図一七の平面図をみるとトボーグチは一間半を開放にしたり、屋内空間の最も条件の悪い位置である東北隅部にウマヤを配置しているなど、最も進んだ方法をとっている。また、小黒柱も四面をカンナ仕上げとしている。なお、当家は内出城(註一)の濠内に屋敷を構えており、屋敷の周囲には現在でも空濠を残している。

四、田字間取の民家

この形式を示す民家遺構は次に述べる真砂正次家の唯一棟を調査しただけであった。

真砂正次家(写真一十二)は表調の室と裏調の室における奥行を等しくとって、床下桁方向の間仕切線を大黒柱線上に統一したものである(図一三)。このような間取は丁度漢字の「田」字を表現していることから、田字間取の民家とよばれるようになったものと考えられる。田字



〔写真—13〕 島崎弘家 (西上秋間関)



〔写真—9〕 小林恵三家 (中秋間油谷津)



〔写真—14〕 島崎七五三吉家
(西上秋間三軒茶屋)



〔写真—10〕 小林一成家 (中秋間油谷津)



〔写真—15〕 田島数家 (下秋間相水)



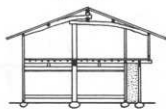
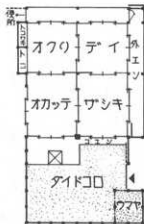
〔写真—11〕 清水一男家 (東上秋間馬場)



〔写真—16〕 原修一家 (西上秋間二軒茶屋)



〔写真—12〕 真砂正次家 (西上秋間般若沢)



真砂正次家

図一 田子間取の民家

間取の民家は喰違四間取の民家におけるサシキ裏の室（ソウベヤ・オカッテ・コザシキ・イマなどとよんでいる）の奥行を、テイとナンド（オクリ・ヘヤともよぶ）境の間仕切線上まで増大させることにより容易に実現することから、喰違四間取の民家から発展して形成されたものとみてよいであろう。

真砂正次家の二階前面は一階より二尺五寸ほど突き出た出梁造りとし、一階における各室境の間仕切では差鴨居の多用が目立つところである。当家は伝えによれば火災にあつて明治三年（一八七〇）に建て替えられたものという。建築の原形の示す各種特徴からみても伝承の年号は信頼してよいものと考えられる。

当家は江戸時代に西上秋間の大名主であった由緒ある家柄で、道路に面して立派な門を構えている。母屋の屋根は現在鉄板瓦葺きにしている。しかし昭和三十年頃までは板葺石置屋根であったという。

五、五間取の民家

十五棟の調査民家中、五つの間取を有する民家は二棟を調査した。島崎弘家（写真一三）は平面をみると喰違四間取の上手前面にゲン

カンを突き出したものである。当家は江戸時代に名主を勤めていたというから、そのためにゲンカンの間を必要としたものであろう。また、ジョウダンの間は他の室より床面を五寸四分程あげておりトコ・天袋の付いたワキドコ・出書院等を設備し、簡略されながらも「書院造り」の体裁をととのえている。

遺構は安政四年生れの先祖が誕生する二年前に古家を壊して建て替えたものというから、安政二年（一八五五）に建築されたものとみられる。なお、安政二年以前に建て替前の母屋は間口十一間、奥行五間半のクス家（草葺家のこと）であったと伝えるから、例えば十八世紀に建てられたものとしても、格段に大きな家であったとみられる（註2）。これも当家が名主役を勤めるような有力農民であったからこそ可能であったものと考えられる。

上秋間と下秋間は江戸時代に旗本領で米倉氏の知行地に属した。いい伝えによれば当家には領主米倉氏が検見の時に宿泊したという。またおもしろいことに当家は昔から五月節句にノボリをたてない習わしであるという。その理由によれば当家の先祖は武士で、ノボリをたてて一休みしていたころを武田氏手勢の矢に当って命を落してしまつたという。それ以後当家は男の息子が生れても決して五月節句にノボリをあげないのだという。なかなかおもしろい、いわれである。

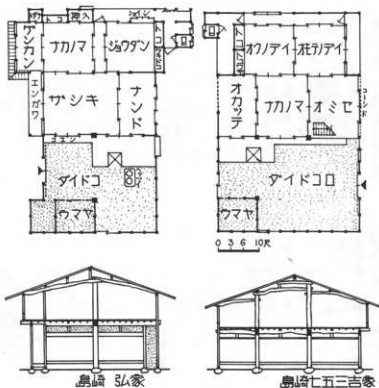
島崎七五三吉家（写真一四）は土間（ダイドコロ）にそって梁行に三室を並べ、その上手に二室を配して五間取としたものである（図一四）。土間に添った室は通りに面した表側から裏側へオミセ・ナカノマ・オカッテと続く。当家は農家のかたわら、荒物屋を営んでいたとい、屋号を「まるや」と称した。土間側の通りに面した室を「オミセ」とよぶのは、その名残りであろう。なお、四・五年前まで屋根を板葺にしていたというが、現在は鉄板瓦葺きに改められていた。

遺構は建立年代についての記録を残していない。しかし三代前に現在のところに分家して出たものとい伝えること、および建築の原形

十五棟の調査遺構中、六間取の民家は二棟を調査しただけであった。田島数家（写真15）は喰違四間取民家におけるテイとサシキの前

六、六間取の民家

の示す各種特徴等から、明治初年頃の建造とみておけば妥当であろう。



図一四 五間取の民家

面にヨリツキおよびトワリ（ロウカを意味する）を設けて床上を六室にしたもので、六間取とはいふもののその基本形は喰違四間取とみなしてよいものである（図一五）。

当主の話によれば遺構は平家造りといい、特に変わった造りにされてはいるのだという。当家に伝わる「相水藤之縁起」（註3）によれば、初代は但馬小將平忠光といい、当時都において平家（一門）と意見の対立を起し、平家が隆盛を極める前の久安三丁卯年（一一四七）四月中旬、妻子四人を伴って上野国に下り碓氷郡鮫馬（現在の秋間をさす）村に住居を定め、氏神として宇佐八幡宮を建て二十一町を知行し、名を改めて田島助三郎平忠光と名乗ったという。

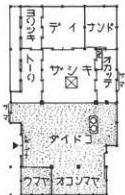
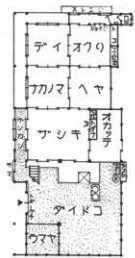
降って戦国時代になると安中城主である安中氏に仕え、特に安中左近源忠成公（註4）より長刀および脇差を拝領している。恐らく忠成公が減亡すると、当地にあって帰農していったものと考えられる。

江戸時代になると初期の頃より代々名主として当地一帯を治め、苗字帯刀も許されていた。

当家は禁忌として昔からネギの種子を蒔くことをせず、トウモロコシもつけれないのだという。また赤毛の馬は飼えず、黒毛の馬に限って飼うことを許されているという。その理由として当家の場合宇佐八幡宮を氏神とし、八幡様は黒毛の馬にしか乗らないからという伝えている。

遺構は軒高を比較的高くとり、妻部に関西風の大きな破風を設けている。しかしこれを平家造りというには当らないし、喰違四間取の前面にヨリツキやトワリの間を設けて室数を増しているのも、名主という上級な家柄であったことによるものとみたほうが自然である。

テイとヨリツキの上部にだけ当初から竹スノコ天井を張り屋根裏を利用した。ヨリツキの表側上下手に幅一間の開口部を設け、ここより屋根裏へ採光し、またここへ外からハシゴを掛けて屋根裏への出入をした。屋根裏を利用した民家遺構の早い例として注目される。



図一五 六間取の民家

遺構は建立年代についての記録・伝承等を残していないので、建築に関する各種の特徴等から推察すると、およそ十八世紀中期頃の建立と推定される。

屋敷の南面には現在鉄板葺の長屋門を構えている。二十年前までは重厚な草葺屋根で母屋と一体になった景観はなかなかみごとであったという。

原修一家(写真16)は農業兼宿屋をしていた家である。出入口はダイドコ前面にあるトボーグチの他に、サシキ表に二間幅の大きな開口部を設け客用の玄関としている。

平面は喰違四間取の上手に二室をつけ加えたとみられるもので、図一五に示すようである。二階は出梁造りとし、養蚕空間として使用された。

当家の庭先を通る道が江戸時代に中山道から分岐して、榛名山(榛名神社)へ抜ける裏街道であったところから、往時は精好宿泊客もあつたということである。なお、この裏街道のことを当地では別名三、四街道ともよんだという。それは三軒茶屋から妙義山(妙義神社)へ三里、榛名山(榛名神社)へ四里の行程にあるところから、そのようによばれるようになったとのことである。そして妙義山と榛名山を信仰の対象とする「講」があり、これが盛んであったため「講」の人達(「ドーシャ」とよぶ)を多く宿泊させたものといふ伝えがある。

当家は屋号を、おもたかや、といひ、昭和三十四・五年前まで竹製榎木の上に栗板を葺いた、いわゆる板葺石置屋根であつたという。屋根を葺いた栗板は専門の板割職人に割ってもらつたもので、長さ一尺一寸、幅三寸、厚さ一分位の大きさのものを下から重ねながら順次上方へ葺き上げていったものであるという。板屋根を葺く場合、板割職人に任せるところもあるが、多くの場合自分で葺いたものという。

当遺構は建立年代を示す記録・伝承等を残していないので、建築の原形の示す各種特徴等から推定すると、およそ一九世紀中期頃に建造されたものとみておけば無難であらう。

七、平面の進化

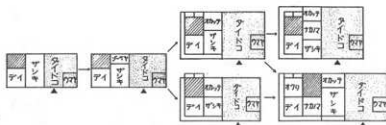
前述したように秋間の民家は平面形式から(1)三間取(広間型)の民家 (2)喰違四間取の民家 (3)田字間取の民家 (4)五間取の民家 (5)六間取の民家の五形式に分類された。これらのうち一七世紀まで潮の遺構は三間取(広間型)の多胡昭一家・須藤寿家の二棟だけであつた。

これに次ぐ古い遺構は喰違四間取の民家にみられ、大塚豊富家の場合一八世紀初期まで潮の遺構とされた。十五棟の調査遺構中、喰違四間取の民家は最も多く七棟を数えた。それらは古いもので前述の大塚豊富であり、一八世紀初期から新しいもので明治二十一年に建造された

清水一男家までみられた。故に喰違四間取の民家は当地における一般本百姓の民家として、一八世紀初期以降明治中期（一九世紀末期）頃の間にも最も普及した民家の平面形式であるとみてよいであろう。

田字間取の民家は一種を調査したものであった。しかしその間取は喰違四間取から進化したものであると推察された。喰違四間取の民家は間仕切に喰違いを有するため、一本の柱に横架材が集中しないので構造的に有利なこと、および各室相互間における連絡のよいことなどの利点をあげることができると推察された。喰違四間取の民家は間仕切の中途に柱がたつため、じやまになつたり、めざわりになつたりすることが多い。間仕切の進化は中途にたつ柱を取り除き喰違いのあつた間仕切を整理して田字間取りへと移行したのであつた。これは農家の平面として完成された形式であるといわれているものである。しかしさらに室数を要求した民家においては五間取あるいは六間取の室を持つ規模の大きい遺構も出現するのであつた。

図一 寝堂(ワホヘヤオノ)

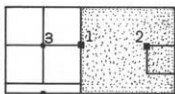


図一六 秋間の民家における平面進化の模式図

図一六は以上のように秋間の民家にみられた進化の過程を模式化して図示したものである。

八、柱の名称

秋間の民家調査で柱の名称を聞き取ることができたのは、図一七に示す四本の柱だけであつた。五十歳以下の若い当主ではこれら四本の柱のうち1の柱名を知っている程度で他の3本の柱名をも知っている人はほとんどいなくなつた。しかし、さすがに八十歳近い老人になると1・2・3の柱名は良く記憶に残っているようであつた。だが、4の柱になるとなかなか聞き出すのが大変であつた。幸にも数名の古老からその名称を聞き出すことができたので、図一七に一括してそれらの柱位置とその名称を掲げておいた。すなわち1の柱は大黒柱とよび、2の柱は一般に小黒柱とよんでいる。しかし例は少ないが2の柱をワマヤ大黒とよんでいる場合もあつた。3の柱はミヤコ柱とよび、4の柱はテント柱と称されていた。このよう



- 1: 大黒柱 (ワマヤ大黒)
- 2: 小黒柱
- 3: ミヤコ柱
- 4: テント柱

図一七 民家の柱名称図

古老たちが亡くなつてしまつたことであらう。そのような状況は残念ながらもう目前にせまつてきている。また、伝承者はかりでなく、これらの柱を残している遺構も急速に減びつつかつていくことを考えると、まことにいい時期に調査を済ませたものだと今になって胸をなで下してやる次第である。

なお、当地区で特に注目されたのは、古い遺構から新しい遺構まで一貫して大黒柱に逃げを認めなかつたことである。それは明治二十一年に建造されたとみられた清水一男家においても七寸八分×八寸七分

の大黒柱はにげを有していないため、大黒柱はザシキ側に大きくはみ出し、柱のはみ出した分だけ畳を欠き込んでいた。この事実から秋間地区では大黒柱が逃げを有する時期を経ることなく現代に至ってしまったものと考えられ、県内に於て他にみられない大変めずらしいことであった。隣接する後閑地区や松井田町九十九・細野地区など周辺の民家の調査が行われることが必要と考えられる問題である。

註1：秋間地区は中世の城址地が多く、内出城もその一つであり興味をひかれる。

2：桑原稔著「住居の歴史」一八一頁参照。

3：古めかしい板製の額面に墨書されている。（社会生活の項参照）

4：永禄六年（一五六三）武田信玄と戦って敗れたが本領を安堵された。しかし長篠の戦に武田方として参戦し全滅した。

資料の一 秋間の字名

西上磯間村(古野田磯永都西上磯間村々誌)

- 日影 本村東方東上秋間村耕地ヨリ西へ連ル東西二丁南北二丁ノ称
 瀧ノ入 本村東北ノ間、日影ヨリ西北へ連ル東西六丁南北四丁ノ称
 山田 本村東北ノ間蔵ノ入ヨリ西南へ連ル東西六丁南北二丁ノ称
 勢森 本村東山田ヨリ東南ノ間ニ連ル東西三丁南北二丁ノ称
 笠松 本村ノ東伊勢森ヨリ東へ連ル東西三丁南北四丁ノ称
 原 本村東笠松ヨリ南へ連ル東西四丁南北二丁ノ称
 山口前 本村ノ東原ヨリ東上秋間村ヨリ入地ヲ経テ南へ連ル東西五丁
 南北一丁ノ称
 田入道 本村ノ東山口前ヨリ南へ連ル東西三丁南北一丁ノ称
 貝戸澤 本村ノ東南田入道ヨリ東南ノ間ニ連ル東西三丁南北三丁ノ称
 大平 本村南貝戸沢ヨリ西へ連ル東西五丁南北五丁ノ称
 鹿沼 本村ノ南大平ヨリ北へ連ル東西三丁南北三丁ノ称
 鹿訪前 本村ノ南鹿沼ヨリ北へ連ル東西二丁南北二丁ノ称
 般若澤 本村ノ元標諏訪前ヨリ北へ連ル東西十丁南北五丁ノ称
 上月 本村ノ南般若沢ヨリ南へ連ル東西五丁南北二丁ノ称
 大石 本村ノ南上月ヨリ南へ連ル東西五丁南北三丁ノ称
 池ノ久保 本村ノ南大石ヨリ南へ連ル東西五丁南北三丁ノ称
 菖蒲沢 本村ノ南池ノ久保ヨリ南へ連ル東西五丁南北四丁ノ称
 大吹 本村ノ南西菖蒲沢ヨリ西へ連ル東西四丁南北三丁ノ称
 藤木田 本村ノ南西ノ間明石貝戸ヨリ北へ連ル東西七丁南北三丁ノ称
 下関 本村ノ南西ノ間藤木田ヨリ南へ連ル東西六丁南北四丁ノ称
 沢 本村ノ南西ノ間下関ヨリ西へ連ル東西五丁南北三丁ノ称
 平 本村ノ西箕沢ヨリ北ニ連ル東西四丁南北五丁ノ称
 中関 本村ノ西平ヨリ南へ連ル東西四丁南北五丁ノ称
 山口 本村ノ西中関ヨリ西へ連ル東西三丁南北五丁ノ称

- 森熊 本村ノ西山口ヨリ北へ連ル東西四丁南北五丁ノ称
 實木貝 本村ノ西森熊ヨリ西南へ連ル東西四丁南北十丁ノ称
 下り貝 本村ノ西實ノ木貝ヨリ西へ連ル東西四丁南北七丁ノ称
 大戸貝 本村ノ西下り貝ヨリ西へ連ル東西五丁南北七丁ノ称
 奈良平 本村ノ西大戸貝ヨリ北へ連ル東西二丁南北三丁ノ称
 東上秋間村(地誌編輯取調書 北廿一大区土二小区磯永都東上秋間村)
 三角 本村ノ中央アリ東西四十間南北十五間ノ称
 馬場 本村ノ中央三角ノ北ニ連ル南秋間道二面又東西七丁南北六丁
 ノ称
 野村 本村ノ北部ニ属ス馬場ノ北ニ連ル東西八丁南北十二丁ノ称
 苜蓿 本村ノ東北ニアリ野村ノ東ニ連ル東西八丁四十間南北五丁四
 十間
 池尻 本村ノ東ニアリ秋間道二面又苜蓿ヨリ南ニ連ル東西三丁南北二
 町五十間ノ称
 廣田 本村東方池尻ヨリ南西ニ連ル東西五丁三十間南北七丁四十間ノ称
 外上 本村ノ東方廣田ヨリ東南連ル東西三丁四十間南北三丁十間ノ称
 白石 本村ノ東南外上ヨリ西連ル東西六丁四十間南北七丁二十間ノ称
 飛谷科 本村ノ南方白石ノ西連ル東西五丁三十間南北二丁ノ称
 諏訪之前 本村ノ南方飛谷科西連ル東西三丁二十間南北七丁四十間ノ称
 伊豆村 本村ノ南方諏訪前西連ル東西四丁三十間南北四丁十一間ノ称
 中澤 本村ノ南、受地向ノ西ニ連ル東西九町三十間南北五丁二十間
 称
 受地 本村ノ西ノ方、伊豆村ノ東連ル東西七丁二十間南北二丁五十
 間ノ称
 日向 本村ノ西方、中澤北ニ連ル東西五丁南北七丁二十間ノ称
 十二 本村ノ西方、受地西連ル東西三丁南北二丁ノ称
 上原 本村ノ西方、日向東連ル東西六丁南北二丁三十間ノ称
 本村西方十二ニ連ル東西四丁三十間南北三丁二十間ノ称

戸谷

本村西方上原北ニ連ル東西八丁二十間南北九丁五十間称

風戸

本村西方戸谷東連ル東西九丁間南北三丁廿間称

久保

本村北ノ方、風戸ノ南ニ連リ東西六丁四十間南北七町十間称

神水

本村ノ北方、久保東ニ連ル東西五丁二十間南北七町四十間称

櫻澤

本村ノ北方神水ノ北ニ連ル東西二町四十間南北四丁四十間称

長岩

本村ノ北方桜澤ノ東ニ連ル東西七町二十間南北四町二十間称

岩戸

本村ノ北方長岩ノ東ニ連ル東西六町二十間南北五町十間称

中秋間村

笹原

本村ノ中央ニ位シ秋間道ヲ貫線シ、秋間川ノ北ニ在リ東西一町三拾五間南北貳町廿八間

久保田

本村ノ西ニ位シ東上秋間村ニ界シ秋間川ノ屈曲ニ訟フ東西貳町四拾間南北七町

宮貝戸

本村ノ西南ニ位シ東上秋間村境ヨリ東へ連リ秋間川ノ南ニ在リ東西三町拾間南北貳町廿間

宮貝戸原

本村ノ西南ニ位シ東上秋間村境ヨリ東へ連ル東西二町南北貳町廿五間

甲油谷津

本村ノ西南ニ位シ東上秋間村境ヨリ東南ニ連ル東西貳町四拾間南北貳町四拾五間

乙油谷津

本村ノ西南隅ニ位シ西ハ東上秋間村ニ境又南ハ下後閑村ニ接ス東西三町拾間南北三町

外出

本村ノ南ニ位シ小俣村へノ村道ノ左右ニ在リ東西貳町三拾間南北貳町

甲八貝戸

本村ノ南ニ位シ小俣村境ヨリ北へ連ル東西三町五間南北三町四拾五間

乙八貝戸

本村ノ南ニ位シ太神宮社ヨリ東へ連ル東西貳町廿五間南北貳町廿間

八貝戸

本村ノ南ニ位シ稲荷社ノ北ニ在リ東西貳町拾間南北貳町三拾間

中里原 本村ノ南ニ位シ諏訪社ヲ繞リテ在リ東西七町三拾五間南北四町三拾間

中里

本村ノ南ニ位シ秋間川ノ南ニ在リ東西七町五拾五間南北七町五間

塚本

本村ノ南ニ位シ秋間川ノ南ニ傍フ東西三町拾五間南北七町五間

竹下

本村ノ南ニ位シ秋間川ノ南ニ傍フ東西貳町廿間南北七町五拾五間

曾里

本村ノ南ニ位シ小湊ノ東ニ連ル東西四町拾間南北三町三拾五間

宮原上ノ山

本村ノ南ニ位シ小俣村境山返ヨリ北ニ連ル東西三町三拾間南北七町四拾間

宮原

本村ノ南ニ位シ大森社ノ西南へ連ル東西三町拾五間南北貳町三拾間

金石衛門谷津

本村ノ南ニ位シ小俣村境山南ヨリ北へ連ル東西三町三拾五間南北三町五拾五間

遠尾根

本村ノ東南ニ位シ小俣村境村道ヨリ西へ連ル東西貳町南北五町

葉師谷津

本村ノ東南ニ位シ村道ヨリ東へ連ル東西七町四拾五間南北四町廿間

藏人

本村ノ東南ニ位シ秋間川ノ南ニ傍フ東西五町三拾間南北貳町五間

鍛冶谷津

本村ノ東南隅ニ位シ下秋間村境ニ在リ東西貳町南北四町三拾間

山崎

本村ノ東ニ位シ下秋間村境秋間川ノ北ニ傍フ東西四町五拾五間南北七町五拾間

観音谷津

本村ノ正東ニ位シ下秋間村境ヨリ西へ連ル東西七町四拾間南北四町四拾五間

礼應寺

本村ノ東ニ位シ秋間道ヲ串線シテ秋間川ヲ擁ス東西貳町五拾間南北貳町四拾間

二城

本村ノ東ニ位シ礼應寺字へ連ル東西貳町三拾五間南北貳町五拾間

西谷津

本村ノ東北ニ位シ下秋間村境ヨリ南へ連ル東西五拾間南北四町五拾間

道城

本村ノ東ニ位シ秋間道ノ北ニ在リ東西貳町廿間南北壹町拾間

天竺

本村ノ東北ニ位シ下秋間村境僅ニ接シテ南へ連ル東西貳町拾五間南北三町三拾間

岩下

本村ノ東ニ位シ秋間道ノ左右ニ在リ東西一町三拾間南北四町五拾間

黒後

本村ノ西ニ位シ全性寺ヲ擁シ秋間川ノ北ニ在リ東西三町拾間南北五町四拾間

上黒後

本村ノ西ニ位シ東上秋間村境秋間川ノ北ニ在リ東西貳町五拾間南北三町三拾五間

瑞林寺

本村ノ西北ニ位シ東上秋間村境ヨリ東へ連ル東西壹町四拾間南北三町五拾五間

小金谷津

本村ノ北ニ位シ山廻ヲ縦横ニ通ス東西貳町五拾間南北五町甲蛇喰

甲蛇喰

本村ノ北ニ位シ下秋間村境ヨリ西へ連ル東西三町南北四町拾間

乙蛇喰

本村ノ北ニ位シ溪流ノ屈曲ニ沿フ東西三町五拾間南北貳町三拾間

三角

本村ノ北ニ位シ下秋間村境ヨリ東へ連ル東西貳町四拾間南北三町廿間

岩下谷戸

本村ノ北ニ位シ東上秋間村境ヨリ東へ連ッテ溪流ノ屈曲ニ沿フ東西壹町五拾五間南北三町拾間

戸上

本村ノ西北ニ位シ溪流ノ北ニ在リ東西壹町三拾五間南北三町三角谷戸

本村ノ北ニ位シ下秋間村境ヨリ西へ連ル東西貳町南北六町

四拾間

甲木樂谷津 本村ノ北ニ位シ溪流ノ北ニ在リ東西三町二拾間南北三町廿間

中嶋

本村ノ北ニ位シ東上秋間村境ヨリ東へ連リ山神社ノ巡リニ在リ東西貳町三拾間南北四町五間

甲櫻山

本村ノ北ニ位シ東上秋間村境ヨリ東西貳町五拾間南北貳町三拾間

乙木樂谷津

本村ノ北ニ位シ下秋間村境ヨリ西南へ連ル東西三町三拾間南北五町三拾五間

岩戸谷津

本村ノ西北ニ位シ東上秋間村境ヨリ東北へ連ル東西五町南北二町五拾五間

乙櫻山

本村ノ西北ニ位シ溪流ノ東北へ連ル東西貳町四拾五間南北五町

大平

本村ノ西北ニ位シ上里見村境ヨリ南へ連ル東西四町拾間南北三町拾五間

熊ノ谷

本村ノ西北ニ位シ東上秋間村境ヨリ東へ連ル東西五町三拾間南北四町廿間

熊ノ谷津

本村ノ西北ニ位シ上里見村ヨリ南へ連ル東西五町五拾間南北貳町拾五間

聞戸場

本村ノ西北隔ニ位シ西北ハ上里見村ニ界シ南ハ東上秋間村ノ境ニ接ス東西貳町五拾間南北貳町廿間

下秋間村(字) 下機間村(字)

村ノ東ニ位シ下野尻村境ヨリ西へ連リ澁澤川ノ北ニ在リ東西六町拾間南北六町拾五間

寺前道下

村ノ東ニ位シ東南ニ秋間澁澤ノ二川ヲ擁ス東西貳町廿間南北貳町

寺前道上

村ノ東ニ位シ桂昌寺ノ西南ニ連リ秋間川ノ北ニ在リ東西貳

寺前道上

村ノ東ニ位シ桂昌寺ノ西南ニ連リ秋間川ノ北ニ在リ東西貳

寺前道上

村ノ東ニ位シ桂昌寺ノ西南ニ連リ秋間川ノ北ニ在リ東西貳

寺前道上

村ノ東ニ位シ桂昌寺ノ西南ニ連リ秋間川ノ北ニ在リ東西貳

寺前道上

村ノ東ニ位シ桂昌寺ノ西南ニ連リ秋間川ノ北ニ在リ東西貳

町拾間南北三町拾間

東平 村ノ東二位シ秋間川ノ北ニ在リ東西三町廿間南北三町五間
原貞戸 村ノ東二位シ神山道ヲ貫通シ秋間川ノ北ニ在リ東西三町南北
貳町三拾間

相水前 本村ノ東二位シ神山道ノ左右ニ在リ東西貳町四拾間南北壹町
四拾間

柳町 村ノ南二位シ溪流ノ南ニ沿フ東西三町拾五間南北壹町

沼田 村ノ南二位シ溪水ノ南ニ在リ東西貳町二拾間南北貳町五拾間

湯ノ木 村ノ西二位シ上野尻村境ヨリ北へ連ル東西三町南北三町

打越 村ノ西二位シ谷津村境ヨリ北へ連ル東西貳町二拾間南北貳町
五拾間

二本松 村ノ南二位シ小俣村境ヨリ東北へ連ル東西二町廿間南北三町
五拾間

三枚畑 村ノ南二位シ村路ニ僅カ接シテ南ニ連ル東西二町十間南北貳
町廿間

館 村ノ南二位シ村路ノ南ニ沿フ東西三町南北貳町四拾五間

館谷津 村ノ南二位シ小俣村境ヨリ北へ連ル東西三町廿間南北三町四
拾間

八幡山 村ノ南二位シ八幡社ヨリ西南へ連ル東西壹町拾間南北貳町三
拾間

若宮 村ノ南二位シ八幡社ノ北ニ在リ東西三町廿間南北壹町五拾五
間

辻 村ノ中央二位シ神山道ヲ貫通シ溪水ノ北ニ在リ東西貳町四拾
間南北壹町

山崎 村ノ西二位シ中秋間村境ヨリ東へ連ル東西三町南北貳町
山崎原 村ノ西二位シ中秋間村境ヨリ東北へ連ル東西貳町南北貳町拾
五間

日影 村ノ西二位シ溪水ノ西南ニ沿フ東西壹町貳拾五間南北壹町五
五間

拾間

如又 村ノ西二位シ神山道ヲ貫通ス東西貳町拾間南北貳町五拾間

後平 村ノ西北二位シ神山道ノ東へ連ル東西貳町拾間南北三町拾間

立石 村ノ西北二位シ春名神社ノ巡リニ在リ東西貳町南北貳町拾間

藤ノ木 村ノ西北二位シ溪水ノ西ニ在リ東西貳町十間南北貳町廿五間

中山 村ノ西北二位シ中秋間村境ヨリ北ニ連ル東西貳町三拾間南北
貳町

中山前 村ノ西北二位シ村路ノ南ニ在リ東西二町廿間南北壹町四拾間

三反田 村ノ西北二位シ村路ヲ貫通シテ左右ニ在リ東西壹町五拾間南
北壹町五拾五間

根岸 村ノ西北二位シ中秋間村境ヨリ東へ連ル東西三町南北三町廿間
拾五間

日向 村ノ西北二位シ中秋間村境ヨリ東へ連ル東西三町南北三町五
拾五間

熊野谷津 村ノ西北二位シ中秋間村境ヨリ東へ連ル東西三町四拾間
南北貳町五拾間

覺院坊 村ノ西北二位シ村路ノ西ニ連ル東西貳町廿間南北三町拾間

明後沢 村ノ西北二位シ村路ヲ貫通ス東西四町南北四町拾五間

川久保 村ノ西北二位シ村路ノ東北ニ連ル東西貳町三拾間南北五町
壹間

茶賀谷津 村ノ西北二位シ中秋間上里見南村境ヨリ東南へ連ル東西
五町南北六町四拾間

七曲 村ノ西北二位シ上里見村境ヨリ南へ連ル東西六町三拾間南北
五町廿間

戸谷 村ノ北二位シ上里見村境神山道ノ西ニ在リ東西四町南北七町
掖子尾 村ノ北二位シ上里見村境神山道ノ東ニ連ル東西三町三拾間南
北九町拾間

萬福 村ノ西北二位シ神山道ノ西ニ在リ東西三町廿間南北五町拾
五間

- 間
- 一ツ田 村ノ西北ニ位シ神山道ノ東ニ沿フ東西各町廿間南北四町廿間
八重巻 村ノ北ニ位シ上里見村境ヨリ南へ連ル東西貳町拾間南北九町
廿間
- 東谷津 村ノ北ニ位シ中里見村境ヨリ南へ連ル東西三町廿間南北七町
五拾間
- 道ノ入 村ノ北ニ位シ神山道ヨリ字後平ヲ隔テ東ニ在リ東西四町四拾
間南北八町廿間
- 善應寺 村ノ北ニ位シ神山道ヨリ字辻ヲ隔テ北ニ在リ東西貳町四拾五
間北五町廿間
- 相水谷津 村ノ北ニ位シ山径ノ西ニ連ル東西貳町三拾間南北六町廿間
広田 村ノ北ニ位シ山径ノ西へ連ル東西四町廿五間南北四町四拾五
間
- 一臺堂 村ノ東北ニ位シ中里見村境ヨリ南ニ連ル東西四町南北九町
大谷津 村ノ東北ニ位シ八幡社ノ北へ連ル東西二町南北拾町四拾間
吉賀谷津 村ノ東ニ位シ溪水ノ西ニ連ル東西三町三拾間南北五町四拾
間
- 広町 村ノ東北ニ位シ溪水ノ西ニ沿フ東西三町南北七町廿間
高森 村ノ東北ニ位シ下里見村境ヨリ南へ連ル東西五町南北五町廿
間
- 二反田 村ノ東北隅ニ位シ下里見下野尻両村境ヨリ西南へ連ル東西三
町廿間南北七町廿間
- 勝負沢 村ノ東ニ下野尻村境ヨリ西へ連ル東西貳町三拾間南北五町拾
間
- 上平 村ノ東ニ位シ下野尻村境ヨリ西南へ連ル東西三町五拾間南北
三町三拾間
- 兼師入 村ノ東ニ位シ熊野社ノ北ニ在リ東西三町四拾間南北三町

資料の二 秋間の食生活

〔昭和十二年十二月 郷土調査 秋間尋常高等小学校〕より

食生活

イ、主食物

A 米

自家製と購入の割合

大農 自家製

中農 自家製 八割

小農其の他 大部分購入

白米として用ひ玄米、半搗米等は食せず。

精米方法

共同水車にて当番日に精白する。

組合電気精米所を利用する者多し。

精米業者に依頼するものは少し。

精米所

昭和十二年の大水害によって水車数半減せり。

水車一、電気精米所三、精米業者二軒

B 大麥

米と混食の割合 米八割、二割(平均)

混食方法 押麥 挽割として使用する。

C 餅

糯米の自家製と購入との割合

大農 自家製・中農 八割自家製

小農其の他 購入

餅をつく時季と食す期間

一月一日より三日間、雑煮其の他二十日位まで客への雑煮焼いて食す。

其の他、搗いた折々に食す。

一月十三日（小正月に食す餅） 三月節句、彼岸、四月八日

蜜餅（春蚕に限りなす。二飯又は三飯の際搗く） 誕生、十日夜

十二月二十六日頃より三十日迄（正月食す餅つき）

D

うどん、そば

摂取の程度 一週間三回平均夕食とする。

毎夕食うどんをなす家も有る。

手打うどん、機械製うどんきりこみとして食す。祝儀の際うどんを

用ふ。引物としては葬式にも使用する。

そばは年数回用ひられるのみにして生産少し。

自家製法

うどん 小麦粉一升水二合塩一つかみ入れてこねる。麵棒での

して二寸巾位にたたみ切る。熱湯に入れてゆでて清水ですすぐ。

しやうぎに入れて水を切る。近來うどん製造機も次第に用いられ

て簡単につくる。

そば うどんと同様にしてつくる。材料そば粉二合小麦粉一升。

尚つなぎと称して山芋、卵を用ふ。

E

粟黍稗 現在は用ひられていない。

口、副食物

A 獣肉

秋冬春用ふ。月に一回位平均。来客又は特殊の場合用ふ。

食用順 豚肉 安中町又は行商人より求む。

兎肉 自家飼養のもの皮を売るとき。山兎の肉は少し。

牛肉 上流家庭で少量とる。

馬肉 中下の家庭で少量とる。

B 鳥肉

鶏肉、病人、儀式（祝儀）に用ふ。

雀、鳩、雉、山鳥等儀式又は捕れたる場合食す。

C 鶏卵

病人の食用、栄養剤として用ふ。自家生産多し。

D 魚介類◎海水産

1 生物

鮎、鯉：刺身、四季

鱒、鱒、鮭：煮附焼物、四季

鱒、鰻：焼物、秋冬

あさり：汁、冬

生物は使用量少く上流家庭多く用ふる。

乾燥物、漬物、罐詰

2 類刺及目ざし：焼物、四季 鮭は正月特に多し。

類刺及目ざし：焼物、四季

竹輪、かまぼこ：煮附汁、秋冬春

塩鯉、粕漬：焼物、春

鯛：焼物、冬

鯛、粕漬：焼物、秋冬春

鯛：焼物、春夏

鰻：焼物、秋冬

鯖：焼物、四季

数の子：水に浸して後醤油漬として食す。一月及祝儀。

佃煮：四季

魚介類は村の店 安中の魚屋又は行商人より求む。

◎淡水産

鯉 病人の食用、儀式に用ふ。購入。

うなぎ 自分でとったもの。少量夏季食す。

泥鰌 購入。夏

鮎、かちか、山女魚、しじみ、たにし 少量自分でとったもの。購

入、僅少。

E 豆類

野菜出盛月別表

種類	月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ほうれんそう		◎											
△三つ葉													
油菜													
人参		△	△										
ごぼう		△	△										
なす													
きゅうり													
△筍													
○馬鈴薯		△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
えんどう													
ねぎ		△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
南瓜													
大根		△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
白菜		△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
体菜													
山東菜													
甘藷		△											

種類 使用の場合
 大豆 味噌、醤油、煮豆、きな粉、納豆
 隠元豆 煮附、きんとん、強飯
 ささげ 強飯
 小豆 赤飯、強飯、稲
 野菜
 ○印＝売出す 無印＝自家用 △＝生産少量も頭部印
 ◎印＝出盛の月を示す ○＝少量生産の月を示す △印＝保存期間を示す月別欄中印

購入割合
 購入四割
 購入五割
 購入四割
 購入五割

種類	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
里芋	△											
△西瓜												
△トマト												
モロコシ												
△藍												
△茗荷												
△玉葱												
いんげん												
大豆												
白瓜												
○こんにゃく												

G 茸

初茸、笹茸、しめじ、なすみ茸、もたせ等山地に産するものを少量
 椎茸、栽培

H 海藻

海苔 すしに使用（節句、児童の旅行、祭）、うどんのやく味。
 青海苔 酢の物、海苔餅

昆布、煮付、佃煮、昆布巻

若布 汁の実、酢の物

ひじき 煮附

加工品

I

納豆 行商人より買ふ。自家製。少量しか用ひられない。
 豆腐 豆腐屋より一軒。安中より行商に来る。汁の実、白和。月一回

位。特別の場合用ひる（祭日、祝日）

こんにゃく 自家製。特別の場合買ふ。煮附、白和。冬多く用ふる。

漬物

J

1 沢庵漬 大根、塩、米糠。十一月十二月大根を干して塩と糠を交
 せて大根を並べた間にまき重ねて大根葉で蓋をし重石を置く。副食

物中最も主要なるものなり。

2 菜漬 休菜、十月、十一月、白菜、十一月、十二月。

白菜は大なるものは四つ割又は二つ割として樽に並べて塩をふり、順に重ねておし石をしておく。副食物として重要なものので有る。

3 奈良漬 白瓜、酒粕、塩。八月、中流以上。

瓜の種子を取り、塩と粕をつめて重ねて密閉し暗い所へ保存する。

4 塩押 茄子、白瓜、胡瓜、塩。七月、八月、九月。

野菜を塩でつけておし石をしておく。

5 糖漬(どぶ漬) 茄子、胡瓜、白瓜、塩、糖、大根、玉菜、じゃうが。夏季、塩水を煮てさまし糖をといて野菜を入れる。

浅漬 大根、塩、玉菜。

6 大根葉、キャベツ等を薄く切つて塩でもみ、おし石を軽く置く。

7 梅漬 梅、紫蘇、塩。六月。

梅に塩をふる。紫蘇の葉を入れて赤く染める。紫蘇の葉はもんでしぼることもある。梅は水出しといつて一夜水に浸して後漬ける。

8 味噌漬 大根、白瓜、牛蒡、茄子の塩押十一月、十二月。

みその中に塩漬にした野菜を入れておく。

9 からし漬 茄子、からし、麴、塩。十月十一月。

からし、麴、塩を交せて茄子の小切とかき交ぜ、かめの中に入れて密閉しておく。

10 らつきょう漬 梅酢、大根、生葉。

大根は薄く切り、生葉はそのまま梅酢につける。

ハ、調味料と香料

A 醬油

自家用として自家製造四五パーセント。購入四六パーセント。半購入九パーセント。

製造期間 四月より翌年一月頃まで。

製造方法 組合、小麦は炒つて、大豆は煮て麴をねせてもろみを造る。一夏過して冬しぼる。

B 原料 小麦、麴、大豆、塩、糖密、味の素

自家用として自家製造六九パーセント。購入二一パーセント。半購入一〇パーセント。

製造方法 大豆を手でつぶれる程軟かく煮て、それを更に搗いてつぶし、前に作った大麦麹と塩と交せてたるにつめて密閉して半年位おく。

C 砂糖

玉砂糖、和白糖 中下層の人に広く用いられる。

D ザラメ 特別の場合の料理に使用。

太白 菓子代りに使用。儀式料理。

E おすし、酢の物(夏)。来客用。儀式の場合。

種油、胡麻油、豚油

F 精進漬、鉄火味噌、けんらん汁、きんぴら等を用ふ。

一月一回一三位位。鉄火味噌(夏)月三回一五位位。出し。

G 煮干、花經節、經節、味の素。

一般に煮干、花經節を使用する程度で經節味の素の使用量少し。

香辛料

からし Ⅱ からし漬

わさび Ⅱ 粕漬、生物のつま

とうがらし Ⅱ 七色とうがらし

からみ Ⅱ 生物のつま

生薑 Ⅱ 漬物

胡椒 Ⅱ 料理の中に入れる

カレー粉^{II}ライスカレー
 柚子^{II}薬味
 山椒^{II}木の芽

二、飲料

A 飲料水

井戸の深さ平均五米。水質、鉄分を含有するもの有り。悪水質、布
 濾にする。

B 酒

儀式、祭日等に用ふる。清酒多量に用ふ。

C 茶

使用量 煎茶、番茶、ハブ茶、上流家庭コーヒー。
 購入と自家製の割合 購入九六パーセント。生産四パーセント。

D 牛乳

牛乳、山羊乳（自家用産出）少量用ふる。

E 清涼飲料

サイダー、シロップ、カルピス、レッキス、氷水、梅酒をうすめた
 もの。

ホ、食事

一日の食事回数 朝昼夜、三回
 春夏秋冬等の農繁期 こじよはん（飯）を食す。

食事の中の並び方 主人^{II}上席、主婦^{II}釜鍋の傍、家族^{II}その周囲

食前食後の挨拶

食前 頂きます。

食後 頂きました。御馳走様

食事の名称と其の時刻

名称 時間夏 冬
 朝飯 五時→七時 七時→八時

へ、献立表

春の部

昼飯 正午
 こじよはん 四時
 夕飯 七時→九時
 正午 三時
 六時→七時

朝	夜	昼	朝	
飯 米麥混食 味噌汁 茄子 お菜 胡瓜糖漬	飯 米麥 味噌汁 葱 お菜 たくあんづ	飯 米麥 お菜 香の物	飯 米麥混食 味噌汁 里芋菜 お菜 たくあんづ	小 農
飯 米麥混食 味噌汁 茄子 葱 お菜 胡瓜糖漬	うどん 澄汁 葱	飯 米麥 味噌汁 菜 お菜 たくあんづ	飯 米麥混食 味噌汁 里芋、葱 お菜 菜漬	中 農
飯 米 味噌汁 いんげん、 茄子 佃煮、お菜、胡瓜 糖漬	うどん 澄汁 菜、三つ葉	飯 米 煮附 野菜、竹輪 お菜 菜漬	飯 米 味噌汁 大根、馬 鈴薯 お菜 たくあんづ	豪 農

夜	昼
飯 米麥 味噌汁 葱 お菜、浅漬	飯 米麥 お菜 うりもみ、 梅干
うどん 澄汁 菜	飯 米麥 お菜 鉄火味噌 茄子、葱、胡瓜糠
飯 米 澄汁 菜 魚、さんま	飯 米 味噌汁 馬鈴薯、 キャベツ お菜 佃煮、胡瓜漬物

秋の部

夜	昼	朝
飯 米麥 お菜 味噌漬	飯 米麥 味噌汁 葱 お菜 芋の煮附	飯 米麥混食 味噌汁 里芋 お菜 菜一夜漬
うどん 味噌汁 馬鈴薯、 茄子	飯 米麥 味噌汁 葱 お菜 芋の煮附	飯 米麥混食 味噌汁 里芋 お菜 大根葉もみ づけ
うどん 澄汁 いんげん、 茄子	飯 米 味噌汁 里芋、菜 お菜 佃煮	飯 米 味噌汁 里芋、菜 お菜 大根浅漬

冬の部

朝	昼	夜
飯 米 味噌汁 大根 お菜 菜漬	飯 米麥混食 味噌汁 里芋、葱 お菜 たくあんづ け	飯 米 味噌汁 里芋、大 根、塩鮭 お菜 菜漬

備考 夏の部の夕と秋の部の夕は入れ替る。

夕	昼
きりこみ 味噌汁 里芋葱	飯 米 お菜 菜漬
うどん 味噌汁 里芋、葱 薬味 とうがらし	飯 米麥 味噌汁 大根 お菜 菜漬
うどん 澄汁 葱 薬味 とうがらし	飯 米 煮附 芋、竹輪 お菜 たくあんづ け

正月献立

朝	昼	夕
雑煮、餅 汁 里芋、大根、 人参、菜 お菜 田作り、 きんぴら、なま す	飯 米 澄汁 野菜 お菜 きんぴら なます、漬物	飯 米 味噌汁 大根、 里芋 お菜 塩鮭 漬物

正月三日間は毎日雑煮をなすが昼、夕食は飯である。とろろ・そばをなす習慣。

結婚式献立

主食 飯(高盛)。後でうどん、そば。汁 澄汁、豆腐、菜。
平 いかまほこ、かんぴょう、人参、こぼろ。
吸物 鶏肉、芹又はかまほこ、菜。

皿 刺身、煮魚等。

その他 きんぴら、こぼろ。数の子、田作り、小皿にもる、ぬっぺい。
箱入の口取をつける。

うどん、そばの料理、平 いかんぴょう、菜、皿 海苔、珍皮、からし、すり胡麻。引物 するめ(又は鱧、鰻節、佃煮) うどん、菓子。

土産祝の献立

○近い親類を招待するのみで隣近所へは強飯を配るだけである。

強飯Ⅱ糯米、小豆又はささげ。

澄汁Ⅱ豆腐。

煮物Ⅱ芋、ごぼう、鳥賊、かんぴょう等。

魚Ⅱ鮭。

引物Ⅱ強飯。

葬式の献立

飯Ⅱ米。

汁Ⅱ豆腐。

平Ⅱ生揚、がんもどき、花菓子。

坪Ⅱぬつべい液汁。

ちよこⅡ水こんにやく。

皿Ⅱ鮭の切身(神葬祭)揚物。

引物Ⅱ饅頭、茶、うどん、反物、砂糖。

雑祭の献立

餅Ⅱ菱餅、赤、白、緑色。

煮しめⅡ里芋、ごぼう、人参、竹輪、切いか、昆布巻等。

白酒

村祭 春秋二回

強飯Ⅱ糯米、小豆、ささげ。

煮しめⅡ雑祭と同じ。

澄汁Ⅱ芋、豆腐、人参。

煮魚、焼魚。

ト、間食

1 大人は、焼餅、ふかし饅頭、甘露、馬鈴薯、里芋、とうもろこし。

西瓜、せんべい、菓子、落花生、密柑、餅

2 小供は、大体大人に同じその他にぎりめし、キャラメル、飴玉等。

子、辨當

1 学童の辨當 アルミニウムの辨當箱。米飯六〇パーセント。麥飯の混合割合 米七、麥三。

お菜。給食するから梅干、澤庵漬を持参する程度。

2 農繁期の辨當

麥飯大部分で飯は重箱に入れ、茶碗、箸、湯持参。お菜は辨當箱に入れて行く漬物類。

リ、料理法

1 さりこみ

うどんと同じにこねて伸して太く切る。汁の実の煮えた中に入れて煮る。温い食品で冬季うどん代りに多く用ひられる。

2 焼餅

小麦粉、重曹、みそ、砂糖を水で交ぜて餅の大きさに作り、焙烙で焼き、尚圍爐裡の灰の中で蒸焼にする。

中央に小豆餡又は砂糖を入れてつくること有り。

3 ふかし饅頭

○小麦粉に重曹を交ぜて水でこね、中に餡を入れて蒸籠に入れてふかす。一名ふかし饅頭ともいふ。

○小麦粉、砂糖、重曹、卵、塩を入れてこね、饅頭の様な形に造り、ふかしてパンの様に薄く切つて食す。

ヌ、栄養

食品は大部分植物性で淡白な料理が多いから動物性蛋白質及脂肪が不足している。しかし新鮮な野菜を多く摂取するからその点はいい。栄養

価が低いから量を多くとって補充している。

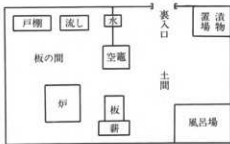
ル、勝手場の使用法及構造

1 竈。石で造る。灰取口も燃す口も一つなるもの多し。煙突は中流以下

の家庭では殆んどつけず、飯炊、焼物、蒸物に使用。

2 円爐裡 汁、煮物、湯沸しに備用。

3 流し 幅二尺五寸から三尺、長さ二尺から五尺、高さ三尺、木製、トタン板張りコンクリート製も有る。



4 勝手場全体

A 面積は広いが空間利用少く床も段が有り、不便。

B 板の間 食事の調理。

C 戸棚 食器、調味料入置場。

D 流し 洗物、調理。

E 竈 飯炊。

F 爐 汁、鍋及釜の類は隅におく。

ヲ、調理用具と食器

日常使用

俎、庖丁、鍋、釜、桶、たわし、ざる、網、しよぎ、すいのう、紅鉢、むしかご、井、杓子、バケツ、茶碗、皿、箸、糖、ちゃぶ台。

来客用

櫛、膳、盆、コップ等、尚大勢招待する場合用ふる食器は区で共同購入しておく。

ワ、食品及食物の貯蔵法

芋類 里芋、甘藷は土室の中に入れ藁でふたをして冬を越す。

馬鈴薯 土間にそのままころがしておく。成可乾燥しているところ。

白菜 家の中におく。

人参、午旁 土の中に埋めておく。

ねぎ そのままおく。

乾物 干葉、干柿、芋茎、勝栗等を造る。ざるや戸棚の中に貯える。

食物 ねずみ入らず、茶、菓子の戸棚に入れておく。

調味料 味噌、醤油は樽、漬物は冷暗所へ貯へる。

カ、飲食に関する俗言

御飯を食べながら飯粒をこぼすと盲目になる。

食べてからすぐ寝ると牛になる。

赤飯に汁をかけて食べると祝儀に雪がふる。

正月十五日の粥を吹いて食べると田植に風が吹く。

子供はお茶を飲むと馬鹿になる。

鍋のつる越に汁をもると外へ出て恥をかく。

箸と箸で食物の受渡をすると言吉が生じる。

茗荷を食べると馬鹿になる。

食へ合せ毒物

鱧と梅干

西瓜とてんぷら

黒砂糖と生梅

とろろとお茶

はつかと馬鈴薯

そばとかき

かにと氷水

綿帽子	164, 171
わらじ	16, 179, 278
わらじがけ	12, 16, 24
わら細工	64, 75
わらじぬぎ	125
わらぞうり	16, 181
藁鉄砲	237
わらにゅう	56, 237
ワラビツ	281
ワラマブシ	71
わりなた	293
椀	38

厄除け	187
薬師様	148, 149, 163, 236
薬師堂	123, 150
役付き	177, 181
ヤグラ馬嶽	288
やけど	84, 85
薬研	281
屋号	251
	6, 49, 50, 78, 87, 120
	122, 126, 127, 130
屋敷稲荷	135, 137, 138, 189
	199, 207, 208, 240
	243
屋敷神	137, 138, 142
屋敷どり	42
屋敷まつり	6, 8, 36
	138, 239, 240
夜食	26
ヤセ馬	208
屋台	187
ヤッカガシ	207
ヤツマキ田	4
柳樽	165, 282
屋根板	66
屋根替	44, 45, 241
屋根ふき	10, 62
屋根棟	183
屋根屋	10, 45
ヤブ入り	204, 234
山芋	33
山入り	186, 193, 194
ヤマカカシ	95
山栗	199
山桑	70, 198, 199
ヤマゴボウ	97, 211
山シバ	24
山津波	108
大和フキ	44
山人参	97
山の神	8, 109, 126, 134
	186, 194, 198
山の口	99
山初め	194
山開き	211
山まゆ	21, 25, 71, 95, 247
ヤリ	58
ヤリンボウ	52, 53
ゆ 行	
ゆい	177
結納	165
融通念仏	183

夕日	92
夕焼け	93
湯灌	178
行方不明	17
ゆず湯	85
ユズリ	182, 183
夕立ち	9
ゆでまんじゅう	33, 212
ゆで湯	199
ユトウ	283
弓張提灯	166, 229
弓矢	272
ユルリ(イロリ)	120, 158

よ 行

夜遊び	103, 153, 163
八日節供	187, 209
八日ダメ	195
八日山	84
ヨーグリ	55, 58
横浜開港	2
糞蚕	2, 52, 68, 149
糞蚕炭	81
糞蚕農家	299, 301
ヨバイ	153, 163
呼び引き	130
夜田	93
子兆	175
ヨツゴ	287
四ツ身	14, 15
ヨツメ	83, 174
夜泣き	87, 141
夜泣きの神様	141
夜なべ	75
よみがえり	176
嫁御の受渡し	167
嫁御のお茶よび	173
嫁御の客	203
ヨメナ	98
嫁の持参物	169
嫁のつとめ	120
嫁の年始	193
嫁迎え	166
よもぎ	210, 211, 249
寄合	102
寄合い車	65
ヨリツキ	205
ヨリマシ	188
ヨロク	116, 119

ら 行

雷電木	96
雷電様	142
羅漢様	149
楽隠居	122
ランプ	50

り 行

リキボウ	61
立春	207
リボン	17
竜柱	46
リヨウバケ	165

れ 行

恋愛結婚	164
------	-----

ろ 行

ロウソク	185
労力交換	4, 62
労力補給	165
六算除ケ	87, 207
六尺フンドシ	156
六地藏様	185
六間取	304
六文銭	179
ロクロ	81
ロジ	43, 46
炉の神	140

わ 行

	99, 153, 154, 163, 167
若衆	168, 172, 173, 200
	212, 235, 237
若い衆契約	104, 187, 206
ワカイシザシキ	163, 173
若衆総代	103
若水	186, 190, 191
ワカメ売り	107
若餅	198, 199, 204
ワカレン	163
脇差	196
ワクツケ	68
ワグリ	159
ワケエシセワニン	99, 104
ワタゴ様	132, 213
ワタゴ精進	213
わたまし	50
わな氣	68
別れ霜	210

味噌蔵	37
ミソコシ	279
味噌汁	30
ミソタマ	37
みそやきもち	31, 32
みたまの飯	187, 202
みだれかご	277
みちあけ	214
道草刈り	106
道コセイ	106
道普請	100, 107, 150
みつまた	21
三ツ身	14, 15
三峰講	113
ミツメ	114, 158, 174
ミトドケ	153, 167
箕	191, 235, 236
箕なおし	76, 81
ミナガ織り	4, 74
ミナガワ	63, 87
みなさんよび	173, 176
ミノ	24
三夫婦	171
三間取	296, 299
耳だれ	86, 87
耳の神様	142
耳塞ぎ	125, 185
みみず	95
みやげ物	229
ミヤコ柱	306
妙義詣り	153, 161
む 行	
六日年	35, 186, 193, 242
六日山	186, 194
無縁仏	188, 217, 219, 228
迎之一見	166
迎え火	188, 221
ムカデ	210
麦打ち	58, 65, 71
麦打ち台	58, 289
麦麴	93
ムギコナシ	55
麦作	52
麦とおし	58
ムギバナ	33
ムギブ	67
麦踏み	57
麦まき	57, 62
麦まき祝い	59

麦休み	33, 52, 57, 58 131, 174, 238
麦休みがら	58
むぎわら帽子	18
ムギワラ屋根	44
婿	170, 172
ムコいちげん	166
婿入り	171
婿とり	168, 170
ムコドン着	10, 11
ムコ養子	105
ムジナ	94
ムジナ憑き	126, 147
駱の肝	85
娘義太夫	271
虫歯	198
虫封じ	207
虫除け	188, 215
棟上げ餅	115
棟持柱	299
村入り	102, 106
村共有	99
ムラ座敷	172
ムラトシトリ	242
ムラ人足	122
村廻り	102, 173
村役	99, 102
め 行	
銘旗	181
メエヤク	163
メギル	56
メクラジマ	11
メケエ	86
飯くわぬ女房	249
メシヤキモチ	33
メズラ燗	215
女蝶	170
メド鯛い	70
メドキ	69, 70
メツバ	49, 86
メツバジキ	8, 155, 181, 182
目の神様	149
メンコ	273
メンバ	191, 243, 244, 282
メンバ飯	93
メンバ板	26, 41, 204, 205
メン棒	41
綿羊	94

も 行	
もうろくずきん	18
モッコフンドシ	158
もぐら	85, 237
目録	165, 175
もし木	48
モズ	250
もち	35, 93, 237, 297
餅がつけない家	244
モチグサ	209, 211
餅契約	5, 99, 104, 105, 206
もちやき	281
餅つき	48, 119, 244
餅投げ	46
もっこ	75
もどし針	178
物奥者	249
モノヅクリ	186, 196, 197
モノ日	26, 28, 31, 33
モミスリ	55
木綿	19, 20, 21, 199
桃太郎	248
ももひき	12
モモンガ	95
モヤイ仕事	4, 62
モライイチゲン	165
モライッコ	117
もらい湯	115
モロミ	37, 38
紋付き	11
モンベ	13
や 行	
八重巻焼	2, 53
山羊	74
ヤキガン	41
焼子	66
八木節	163, 268
ヤキモチ	25, 31, 32, 57, 58 59, 187, 192, 205
ヤキモチッコ	118
ヤキモチのオヨゴシ	3, 32
ヤグ	25
厄おとし	125, 153, 163, 202
厄年	162, 163, 201
厄年の子	87, 160
厄のがれ	163, 200
厄ばらい	201
疫病神	150, 212
疫病除け	150

蛇	210	盆買物	216	娘酒	85
へびシバコ	273	盆ガラ	58, 212, 233, 234	豆がら	191, 207
べべずきん	120	盆行事	8	マメツタマ	37
蛇のおカタ	97	盆供	220	豆まき	207
蛇罫	249	盆ごさ	218	まゆかき	73, 199, 204
へび除け	90	本家	114, 116, 121, 220	まゆだし	68
便所	43, 198, 199	本裁	14, 15		35, 50, 53, 73, 135, 141
便所神	152	盆棚	188, 217, 230	まゆ玉	186, 187, 195, 196, 198
弁天様	142	盆棚くずし	233		199, 200, 201, 202, 203
		盆提灯	218, 220		208, 236
ほ 行		盆月の死者	185	マユネリ	204
ホウキ	179	ぼんでん	35, 109, 113, 132, 213	魔除け	150, 182, 186, 196, 197
豊作祈願	203	ホントウ	110		198, 200, 207, 249
ホウズキ鳴らし	273	ボンドンブ	80	魔除けの刃物	177
ホウソウ神	89, 142	盆の食事	234	摩利支天	204
ホウソウ棚	142, 161	盆花	216, 217, 220	まりつき	273
ホウタロメシ	3, 10, 27	盆見舞	228	丸ツキノミ	294
ホオヅキ	160	盆迎え	223, 229	マルマゲ	18, 173
ホウロセ	88	ホンヤク	163	まるめどし	35, 75, 186
訪問着	11	ま 行			198, 199, 242
柿屋	96	埋葬	181	真綿	71
ほうり塚	247	マイダマガイ	204	マンガ	288
ホウロク	3, 33, 39, 280	マイダマ木	194, 196, 198	まんが洗い	55, 56, 211
穂掛け	56	マイネリ	35	マンゴク	40
ホカン	256	前掛け	12	万才	82
ボク	194	マキ	96, 122	まんじゅう	33
木刀	197	マキダワラ	212	まんじゅう笠	18
ホカケ	45, 46, 114, 115, 173	巻き藁	237	マンナン	70
ぼっこし	66	馬草かご	67	マンノウ	287
星	92	マグサバ	184	み 行	
ホシイ	70	まくそ	91, 185	見合い	164
干草	74	枕返し	90	三日月	89
ホシザカナ	34	枕団子	177	身代り人形	185
墓葬札	181	枕飯	83, 177	神輿	260, 261
ぼたもち	36, 184, 209, 234, 249	マクリ	160	ミゴ	24, 64
ホド	32, 35, 140	マケ	5, 6, 116, 122	ミックイ	88
ホドイモ	30	マスノシタ	174	三鳥様	14
仏様の休み場所	227	マモチ	193	水きり	55
ホトトギス	250, 254	ませんぼう	73	水ごり	176
ホド払い	155, 185	またたび	97	水盃	169
ホマチ	116, 118, 119	松飾り	190, 193, 202, 243	水鉄砲	274
ホマチガイコ	119	松小屋	199	ミズドリ	254
ボヤ	48, 93	マツヒキ	195	水楯	96
保有米	27	松迎え	242, 243	ミズハカリ	92
ホロオプツ	68	間取り	42	水餅	191
ボロ織り	21	マナイタ	26, 39	味噌	37
ボロットジ	24	まふじ	21, 70	味噌桶	38
盆	36, 50	ママッコ	98	毎日ソバ	244
盆送り	188, 223, 230	まむし	88, 110	ミソギ流し	213, 214
盆踊り	235			ミソギ場	35

春祈禱	109, 133, 140 185, 189, 208
春駒	76, 81, 107, 271
榛名街道	8, 78
榛名湖	246
榛名講	112, 113, 132
榛名様	128
榛名山	9, 203
榛名神社	56, 90, 124 128, 140, 141
春祭り	36, 106, 210
ハンギリ	57
ハンギリアライ	52, 58
半夏	53, 211
半夏水	89
パンゴ	58
半曙	12
半てん半日	22
ひ 行	
ヒアガリ	7, 153, 159
ヒイラギ	49, 206
火打石	136, 239
火	52, 60
ヒエボ	19, 196, 197
ヒエボリ	57
ヒエミズ	57
東風	92
彼岸	36, 107, 124, 209
彼岸風	93
ひきがえる	251, 254
ヒキツメ	40
ひきもの	182
火切り	136
ヒキワリ	10, 26, 27, 33, 40, 41
ヒク	61, 292
ヒゲンボサマ	4, 140
ヒザナオシ	174
ひしもち	114, 209
ヒシヤク	162, 174, 254, 280
ビツテ	272
ひつつめ	18
ひとえもん	12
ヒトガタ	213, 214
ひとかま	19
ヒトキツバ	94
ヒトケ	54
人だま	147, 176
日時計	91
ひとつ石	181
ヒトト	254, 272

ヒトトオク	67
一七日	183, 184
ひとに	75
一ツ身	14, 15
火止め	48
ひとり呼び	173
ヒドロクツ	54
ヒナ市	209
ひな飾り	209
ひな人形	209, 284
丙午	91
ヒノキ笠	170
火のし	23, 277
干葉	30
火鉢	47
火吹竹	47, 141, 142
火伏せ神	50, 213, 248
ヒフリ	272
ひめずり薬師	86, 149
ヒメッコ	70
百軒着物	160
百庚申	132
百姓の神様	109, 111, 112 131, 212
百万遍	104, 105, 108, 113 123, 128, 150, 212
ヒヤシル	28
ひやめしぞうり	16
病気見舞	114
日備とり	65
ひらばし	56
ヒラツケ	68
平家造り	304
肥料	60
ヒルヅリ	68
ヒルバテ	234
披露宴	172
拾い親	160
ビワ	49
琵琶	271
火渡り	129, 149, 204, 206
ピンチャ	273
貧乏ゆすり	83
貧乏よけ	91
ふ 行	
フイゴ	81
夫婦べっつい	48
笛	286
フカシドウ	279

ふかしまんじゅう	63, 214 215, 235
フキノトウ	205
フキヤキモチ	33
フク	185
副食物	313
フクチ	49
ふじつつる	237
藤ふち	274
不祝儀	176
フタケ	54
ふたとこどし	186, 193
二人役	62
ふだん着	12, 14
フツメ	272
フツツケ	273
二つ身	14
仏壇	199, 245
不動様	149, 156, 250
布団	24
フナ餅	35, 68, 69, 72, 211
フナ休み	68, 69
ブノビ	119
踏みごぎ	41
冬の仕事	64
ブラク	101
ブラブラ提灯	221
フリマंगा	57
フリワケ	78
フルイ	86, 290
フルホンケ	121
フレ	107
無礼講	198
フレマワス	103
風呂	50, 115
ふろの蓋	229
風呂場	43, 220
分家	121
粉食	10, 31
ふんだき	47
フンツマリ	88
ふんどし	15
へ 行	
ヘエトリボウ	95
米寿	162
ヘソクリ	116, 118, 119
ヘソの緒	88, 157
ヘツツイ	46, 76, 156, 197
別火	7, 152, 153, 156

ね 行	
姉さんかぶり	19
ネエバ	91
ネゲエシ	94
ネコ	53, 93
ネコ織り台	75
ネコカキ	290
ネゴナ	41
ネコの食い扶持	27
猫のしっぽ	117
ネコムシロ	75
ねじりずっぽう	12
ねじりはちまき	19
ネズブサゲ	57, 59, 238
ネバカチ	60
ネバガレ	93
ネハン	208
ネプタ	216
ネマキ	25
ネーラ	88
年忌	184
年忌供養	36
ねんざ	85
年始	186, 191
ネントウ	193
年ばたき	74
年番	100, 102, 128 206, 208, 212
念仏	109
念仏組	8, 150, 177, 182, 185
念仏玉	182, 183

の 行	
野位牌	182
農閑期	184
農具市	81
農具の模型	196, 198
農休み	15, 33, 63, 132, 150 187, 212, 234, 235
農休みガラ	150, 212
ノシモチ	36
ノゾクコミ	163, 164
ノッペ	60
野辺送り	181
のぼりはちまき	19
登り梁	299
ノマワリ	53, 218, 234
野良着	14
野良仕事	18

ノリキ	7, 126, 133
は 行	
バアバチ	273
灰小屋	48
歯痛止め	186
灰のあく	23
灰やき	4, 61
鐘唄	173
馬鹿舞	249
馬鹿嫁	249
墓掃除	216
墓直し	155, 179, 182, 183
墓場	220, 228
墓場の団子	87
墓まいり	175, 230
バツカリ飯	28
萩	97
はきたて	68, 73
ハギの木	197
履物	84
ハグサツ競馬	271
白山様	142
バクチ	130, 249
ハクラク	89
ハゲン	91
羽子板	274
箱膳	38, 39, 282
ハゴナ	33
箱びな	209
ハコベ	98
箱枕	25
はしか	85, 161
ハジキイモ	29, 32
箸はさみ	41
バシン	117
ハズナのうどん	224
知うない	63
はたおり	19, 20, 43, 72
旅籠屋	78
肌褌袴	11, 12
ハタフリ	88
畑の御年始	195
破談	165
ハチササレ	86
八十八夜	93, 210
はちなげ	83
蜂の巣	89, 90
八幡様	137, 240, 304
八幡神社	128, 141

バチンコ	272
初午	8, 124, 129, 130, 135, 141 187, 189, 208, 239
初絵	141, 192
ハッキョウサン	70
二十日ゲイヤク	208
二十日正月	191, 201, 204
初雷	89, 140, 207
八朔	36, 120, 174, 175, 235
初正月	192
初節句	114, 161, 210
初ダナ	194
八反どり	288
バツタン	20, 21
初誕生	36, 160, 161
初荷	192
八丁じめ	101
初不動	206
初便	160
初穂	48
初参り	191, 245
ハツミズ	191
初夢	192
初嫁	175
ハツリ弁	293
ハツリなた	293
馬頭観音	43, 89, 148
ハナ	196, 197, 199, 271, 286
鼻緒	17
ハナガエシ	271
花かき	96
ハナカゴ	181
ハナ菓子	197
ハナクソダンゴ	208
花ごぞ	217
鼻血	85, 86, 88
ハナドリ	64
バナナ糖	18
花火筒	285
ハナムスビ	13, 16, 278
はねつるべ	49
ハマビ	49
ハママンマイ	71
ハライチゴ	272
腹帯	152, 155, 174
ハラジ	33
ハラミ箸	55, 191, 194, 196 197, 202, 203, 285
張板	23
針供養	5, 22, 104, 105, 208
春皮	67

道祖神小屋201, 202
 道中着11, 165, 166
 トウトウ念仏212
 とうなすかぶり19
 盗難よけ188, 215, 238
 トウバ160
 当番102, 129
 豆腐36, 146, 239
 唐箕54
 棟梁46
 同令関係125
 道路普請105
 ドウロクジン198, 202
 ドウロクジンヤキ200
 ドウロクジン屋台202
 戸隠講113
 毒消光り77, 81, 107
 毒流し272
 徳利282
 トックリイモ29
 床上げ159
 トッコ273
 床の間198
 床柱43
 年祝162
 年男186, 190, 191, 243
 年がさね163
 年神様189, 201
 年神棚189, 190, 192
 年徳神190, 199
 年取り26, 35, 89, 186, 189, 206, 207, 240, 241, 244
 年取り魚242, 244
 土葬178
 土蔵40, 42
 ドタレ59
 トチカン67
 都々逸173
 隣り組101, 114
 隣組長102
 トボグチ43, 166, 169, 170, 186, 196, 197, 198, 200, 201, 207
 トボ盃170
 ドアツケ28
 土間43
 斗ます290
 葬いおさめ184
 とめ尺22
 友引91, 185
 土盛り8, 221, 231, 232

トヤブチ68
 富山の薬屋107
 土用ネギ28
 寅の日91
 取上げばあさん156, 157, 158
 鳥居169, 170
 鳥打帽18
 鳥追い201
 トリコミシツケ63
 トリムスビ43, 154, 166, 167, 170, 171, 172
 トリモチ172
 鳥除け216
 とろろ汁28, 30
 とろろ飯192
 96, 125, 162, 186
 どんどんやき187, 189, 196, 198, 199, 201
 トンビノハネ164
 トンボ214
 な 行
 ナイバ55
 苗代53, 203
 苗日55
 苗尾57
 長居客91
 ナカイド104
 仲人121, 164, 211
 中打帽子18
 ナカグロ54
 夏越113, 213
 長福杵11, 12
 ナカシロガキ55
 ナカヌカ40
 中柱299
 長屋門305
 流れ灌頂162
 流れ星90
 ナスの馬228, 229
 名付159
 七草191, 194, 215
 七草がゆ35, 195
 七つのはら162
 七つ鉢40, 192
 七日火215
 鍋38, 280
 ナマグサ109
 なめみそ27, 37
 納屋40, 42
 成り木責め203

成田山125
 鳴沢不動206
 ナワツタワシ39
 なわな64
 ナンテン50, 212
 南天星97
 ナンド43, 156
 ナンマイダ150, 183
 に 行
 二階縁299
 搾り飯208
 にごわめし36
 二十三夜109
 二十二夜塔209
 二十二夜様109, 123, 149, 156
 ニシン味噌28
 にずん棒74
 二夜様150
 入棺178
 にちゅうはん74
 ニナイモッコ61
 荷縄218, 228, 231
 にばつ72
 二番契約36, 99, 104, 105
 二番ごめ26
 二百三高地17
 ニボウトウ32
 入家式7, 169, 179
 乳牛74
 乳歯90
 新蕎麦237, 239
 ニワオキ71
 庭ころがし238
 ニワトコ86, 96, 197
 ニワバン115
 ニワ休み68
 人形芝居267, 271, 272
 妊娠155
 人參の年取り52
 む 行
 ヌカ枕25
 貫前神社125
 ぬく灰35
 めすつとかぶり19
 めすつとぼう18
 ぬつべい汁30, 35, 36
 189, 196, 197
 ヌリデンボウ199, 200, 201, 203

田の呼称	52
田字間取	301
タノモノ節供	235
タビ	16
タビハソン	16, 24
旅立ち	91
タマッコログシ	148
魂よび	157, 176
タマリ	38
タマンマイ	71
タライ	178
タラシコミ	10, 32
タラシヤキ	3, 39
タラの干物	210
タルイレ	165
タルガエシ	37, 175
タレッコ	70, 71
たれごえ	57
たれまき	57, 61
タロッペ	97
俵あみ台	291
俵かつぎ	12
俵口	290
俵ころがし	81
タワラッベシ	160, 291
炭缸	76
端午の節供	210
だんご	229, 236
ダンゴバチ	273
誕生祝	119
誕生餅	161
たんすのこやし	11
ダンナザシキ	120
ち 行	
地下足袋	10, 13
チガヤ	41, 188, 217, 273
力石	103
力くらべ	103
力米	152
地形音頭	45
地芝居	271
地震	90, 92, 110, 112
チチオヤ	161
乳兄弟	161
地づき	45
乳ばれもん	88
地梨	96
地主	27
地蜂	95

血ブク	109
地干し	53
地まつり	45
チヤノマ	42, 43
茶ばん狂言	163
茶店	78
チャンチャンコ	12, 15, 162
中気	86, 87
中耳炎	85
チュウマイ	71
中宿	11, 166, 167, 168, 169, 170
ちよいちよい着	11, 14
提灯行列	250
チョーナ	297, 299
調味料	315
チリメン	11
チンソカンソ	272
黄金車	65
チンゲ	17, 86, 161
つ 行	
ついたて	286
ツカ	188, 223, 224, 227, 233
ツキソイ	167
ツキデッポウ	274
月待ち	109
ツゲ	115, 178
ツゲガラス	176
つけ木	49, 173, 193
ツゲヌ	74
ツケヤ	301
辻っぱり	163
ツジユウダンゴ	238
樋	290
ツチ	295
土入れ	57
土壁	299
土引き	67
ツッコミ	294
ツツジ	272
ツトッコ	135
ツバメ	89
ツバテウチ	57
つぶれやしき	124
ツボギリ	295
ツミッコ	10, 32, 238, 294
鶴亀	171
つるごし	41
つるべ井戸	50

て 行

デイ	205
テイシザシキ	47
デエ	42, 43, 48
手桶	280
デキモノ	86
手ぐわ	215
手甲	13
鉄火味噌	27, 28
てっこう水	38
鉄びん	280
鉄砲馬場	271
鉄砲水	254
鉄砲虫	95
テテナシッコ	117
ではのメシ	179
出針	83
テヒキ	107
出不足	5, 100, 106, 107
手間取り	4, 63
寺の年始	193
テング	57, 196, 197, 286
てんかん	86
電気	50
天候	92, 253
天井	43
天竺木綿	16
天神講	187, 205, 210
天神様	101, 142
天水場	140
伝達	99, 103
テントウサマ	50, 140
天道柱	43, 50, 140, 187, 207, 306
天王様	101, 123
てんぶら	28
と 行	
トウイト	19, 20
十日夜	8, 35, 36, 60, 189, 237, 272
オウギ	13, 15
峠講	112
峠様	113
峠道	78, 79
道着	79, 80, 82, 305
トウジユウ	125
冬至	87, 135, 239, 241
道祖神	90, 146, 163, 187, 197, 199, 201

杉	96
杉皮	44, 67
杉の葉	217, 228
すきんかぶり	120
菅笠	170
スケツト	4, 62, 63
助たか人形	9
スズクダマ	273
ズズ	272
スス年	189, 241
すすはき	210, 241
すすめのつぼう	273
頭陀袋	179
頭痛	87
捨子	160
ナスレジョリン	57
賣の子	279
スマンジュウ	33
炭焼き	198
すりこぎ	39
スリヂチ	160
すり鉢	39
するすひき	54
ズロース	15
諏訪講	112
坐りびな	209

せ 行

製炭	66
聖天講	113
青年会	163
青年学校	20
精米所	40
施餼鬼供養	220
石尊行	187, 213
石尊講	35, 100, 109 112, 149, 213
石尊楼	56, 132, 141, 142
石尊山	140
石板	15
赤飯	36, 59, 83, 93
赤飯家例	191
檀普講	55, 107
世間話	249
石灰	81
節供	36
セッチン	158
セッチン神	140
セッチンマイリ	153, 158, 159

節分	49, 89, 187, 189 203, 206, 207
セマモリ	15
セミ	214
セリ	81
セリタタキ	195
世話人	100
世話番	100
膳	38
膳碗	282, 283
センゲン畑	146
善光寺講	113
染色	21
先祖神	127
先祖様	123, 188, 220
先祖祭り	5, 6, 123, 124, 135
仙台平	11
洗濯道具	22
先達	183
仙痛	88
千歯こき	289
千本旗	146, 176
せん米	243

そ 行

葬儀	115
葬式	34, 114, 158
葬式組	131
ゾウズ	243
雑煮	123, 191, 297
雑煮餅	196
草履	16, 237
ソウリョウ	117
葬礼	34
ソダ	4
外便所	43
ソバ	33, 191, 192
ソバかき	34
ソバ家例	192
ソバ枕	25
そばまんじゅう	33
ソバヤキモチ	3, 34
そば湯	31
ソラックチ	37
そりひき	67
そろばん灸	87
村宮組合製糸	71

た 行

大黒様	204
-----	-----

大黒柱	9, 43, 199, 301, 306, 307
大根の年取り	52, 60
大根畑	188
田植え	26, 36, 52, 53, 62, 63, 94 141, 197, 203, 211, 212
田植え祝い	27, 53, 211
田植禁忌	56
田植えにしん	28, 211
代参	113, 132, 213
大師けえ	241
大蛇	247
大豆	59
太々神楽	128
台所	43
タイマツ	154, 169, 220 221, 228, 229
高尾山	113
高砂	171
たか箒	83
タグ回し	272
タカモリ	109
ダケニ天の法	133
竹皮ぞうり	16
竹スノコ天井	299
竹タルキ	44
竹筒	224
竹とんぼ	274
竹ナンゴ	273
竹の花	89
タケ休み	68
タコ	274
脱穀機	289
山車	271
出梁造り	300, 301, 303, 305
タスキ	13, 178
畳の敷目	84
祟り	84
太刀	197
立白	157, 182, 199
タチブルマイ	113
タツガシラ	181
タテジ	46
タチマエ	10
七夕	33, 43, 50, 215
七夕飾り	188
たにし	96
狸	94
種馬所	73
種稗	54
田の草取り	53, 65
田のくろあずき	59

仕事始め	186, 192, 194	十三仏	182, 183	淨瑠璃	271
ジゴロ	67, 76, 274	十三夜	33, 43, 188, 236	食事	316
私財	116, 118	主食物	312	食生活	312
獅子	90	十二講	109, 134, 186, 194, 198	植物染料	21
獅子唄	261, 263, 265, 267	十二様	126, 134	食物貯蔵法	319
獅子頭	256, 266	出棺	179	食用植物	28
獅子組	263	出産	156	食用油	38
獅子舞	9, 101, 206, 255, 261 262, 264, 265	じゅばん	15	除草	55
シジ休み	68	主婦権	120	初乳	160
四十九日	91, 178, 183, 184	十四日年	35, 242	ジヨリン	287
四十九日の団子	183	狩猟	68	シラジ	185, 234
四十九日の餅	36, 183	シユロ	24	しらた	56
四十九日苗	52	ジュウロウタ	24, 75, 292	シラハ	67
自性寺焼き	2, 52, 75	ジュンヨウシ	118	尻まくり	206
自然暦	93	ショイカゴ	67	ジリヤキ	3, 32, 33
シタザシキ	47	ショイコ	24, 53, 67, 292	汁かけ飯	41
シタン田	4, 54, 57	ショイビク	292	白岩観音	148
七五三	18, 35, 36, 209	書院造り	303	代かき	4, 52, 55
祠堂	198	笙	286	白絹	72
しなの皮	21	ショウガ	235	シロシタ	70
死装束	178	ショウガの節供	120	シロズミ	66
死に水	176	正月	163	白南天	86
シバオコシ	99, 101	正月送り	187	白ムク	11
シバサキ	169	正月飾り	190, 243	ジワカサレ	116, 121
シバダイ	5, 7, 154, 166 167, 168, 169	正月家例	124	ジワケ	116, 121
シバヅケ	153, 154, 169	正月様	5, 35, 110, 189, 196, 244	ジンギ	167
シバッコ	273	正月三ヶ日	140	神経	85
シビ	117	正月棚	186, 188, 189 190, 201, 202	信玄袋	15
シビビー	273	勝軍の木	196	シングリ	176
シビブトン	24, 156	小黒柱	301, 306	身上まわし	118
シビレ	87	ジョウサマ	61	身上わたし	40, 118
死アク	109, 111	ショウジンマツリ	150	心臓病	85
四方堅め	46	精進料理	109, 131, 182 212, 234	シント	54
しまい十二講	109	じょうそう育	70	新宅	114, 117, 120, 121
シマ正月	8, 187, 204, 206	上簇	35, 62, 71	ジندانボウゴマ	274
シマダ	173	上簇祝い	72	新築見舞	114
シマダマブシ	71	聖大権現	129	新年会	191
シマナエ	54	上棟	35, 36	新米	27
縞蛇	95	上棟祝い	115	人力車夫	18
シミコン	34	上棟式	45, 114	シんルイ座敷	163
シモククリ	70	しょうぶ	45, 210, 211	親類づきあい	121
シモの病	84	ショウブ湯	249		
蛇宮様	141	ショウボン	175, 234	す行	
シヤックリ	87	城峯講	113	水害	108
シヤグッチヤマ	86, 142	上毛蚕糸	2	水車	40, 65, 103, 109
しゃもじ	39	醤油	37	水神様	44, 108, 109
祝儀	176	醤油汁	30	水神待	65, 66
十五日かゆ	84, 187, 203	少林山	193	水天宮様	156
十五夜	33, 43, 188, 235, 236	小林山講	113	すいとん	31, 32
				吸物桶	283

こて	277	賽の河原	179, 182	サルノコシカケ	86
コデ	116	財布じっぽ	118	サルボウ	254
こてなわ	64	裁縫道具	22	猿まわし	107
コテノミ	294	材木運搬	67	さわぎガラス	176
コト八日	3, 208	祭文	82, 107	三ケ日	30, 191
ことわざ	251, 252, 253	埴木	67	三角頭巾	18, 181
粉ひき	40	逆さ水	178	三月節供	161, 187, 209
粉糰	41	魚をたべる日	28	サンギ	41
コナ餅	36	魚とり	272	三軒茶屋	80
コヌカ	179	魚の骨	87	サンゴ	74
御年始	191, 192	坂本やき	3, 33	産後の食事	157
こね鉢	279	サキウナイ	94	蛭座紙	206
ゴフウ	234	先灯籠	181	三三九度	171, 172
古峰ヶ原講	112	鷺の宮	72, 80	サンジツ	23, 26, 206
ゴブチ	58, 65	サキヤマ	238	産しの禁忌	158
ご幣	195	さくおとこ	65, 117	さんじやく	13
ゴボウツギ餅	210	さくきり	57	蚤種	69
ゴマガラ	207	サクタテ	195	35日苗	52
ゴマ	97	ザクニ	193, 204	山樵	52
ゴマミソヨゴシ	32	作番頭	64, 117, 173	三東雨	253
ゴマヨゴシ	3	さくらの皮	21	産妻講	113
小麦	57	座繰り	20	産妻様	7, 129, 156
ゴムヒキ	272	ザゴイ	56, 61	サンダワラ	75
コメカイザシキ	47	ザゴイマキ	57, 61	サンチュウ	67
こめかき	46	ササイタ	66	サントイモ	29, 59
米櫃	40	笹舟	273	サントクイモ	29
小物入れ	277	坐産	152	三年ビネ	37
子守り	64	ザシキタビ	13	産婆	156, 157
子守唄	269	差鴨居	303	三儀がえし	103
子もりっ子	161	ザシキ	297	産部屋	156
コヤシ場	61	サシッコ	14	三宝荒神	44, 140, 189, 214
暦	91	サシバ	277, 278		87, 150, 151, 160
ゴロゴロ様	92	ザッコ	73	三本社	162, 188, 207, 220
強飯	123	サツマイモ	29		221, 229, 230, 231
コワリ	40	サツマガワラ	59	サンマの開き	209
コワリ餅	36	里いも	4, 28, 29, 52, 59, 188	産見舞	114
コワリヤキモチ	3, 33		191, 199, 235, 247	三四街道	305
婚姻圓	164	サトの米	157	三隣亡	91, 146
紺がすり	14	サトイモの葉	224, 229, 231	し行	
コンコチ帽	18	里がえり	120, 154, 173	シアゲ	183
こんにやく	200, 202, 237		174, 193	ジオウ様	203
コンバンワ提灯	221	砂糖湯	160	塩釜様	156
金毘羅様	14, 80, 81	ザナオシ	173	塩づけ	29
ゴンボツバ	69	サナダ	65	しお焼もち	31
さ行		サマ	43, 299, 301	ジカタ	116
サイギョウ	249	サラシ	178, 181	數屠	84
採石	76	さら湯	86	式の料理	172
さい銭	202	サル	111	四九菜	91
祭壇	188	サルスベリ	199	シケツタ	57
		猿田彦	131, 135	仕事着	12
		猿田彦大神	110, 146		

共満社	208	熊野神社	129, 187	郷境	168, 169
清水寺	237	グミ	272	江州屋	81, 107
清水観音	238	組合製糸	20	庚申組	109, 111, 114, 115, 131, 176
キヨメ	178, 182	組の行事	105	庚申講	100, 110, 111, 132
清めの酒	182	蜘蛛	89	庚申様	5, 112, 130, 131, 251
共有膳帳	103	クモチ	244	庚申待	26, 35
共有山	109	黒熊流	265	荒神様	47, 189
共有林	105	倉開き	195, 196	こうず	21
共有林野	103	倉や	201	コウセン	10, 34
漁撈	68	栗	96	楮	97
桐	96	栗板	44	コウチ	99, 101
キリモチ	196	車番	66	こうで	86
きわだ	96	くるみ	20, 21, 96	弘法大師	241
禁忌	123	くるり棒	58, 289	柑屋	21
禁忌作物	84	黒いアザ	158	講宿	113
ギンナン遊び	273	黒釜	66	香料	315
く行		クロズミ	66	水餅	211, 244
食い講	5, 105	黒滝講	112	五カン日	193
喰違四間取	299, 303, 304, 305, 306	黒穂	57	五月節供	161, 187, 249, 303
食い初め	160	クワダテ	186	コキアゲ	53
クギザケ	153, 165	クワデ	48	虚空藏様	142
釘たおし	274	クタンヒリョウ	61	こごめ	56
釘とおし	274	け行		ゴゴリ	57
釘ぶち	274	ケイアン	64, 65, 71	ゴザウチ	11
草かきつめ	288	慶甲	114	小作人	27
草刈り	74	競馬	85, 271	小作農	61
クサ木	97	ケイヤク	5, 99, 102, 104, 105, 154, 167, 168, 169, 187, 206, 209, 213	小作米	26
草笛	273	ケエシマンガ	55	小作料	61
櫛	17	ケエバ	74	腰あげ	15
くしあげ祝い	45	ケッカイ	49	コジクメ	140, 195
グシモチ	45, 46, 114, 135, 136, 239	ケーカキ棒	196	腰巻	11, 12, 15, 16, 23
葛	57, 97	削りバナ	97, 186	コシヤリ	70
クズカキ	13, 243	下駄	16, 278	ご祝儀	34, 114
クズカキカゴ	67	血縁集団	122	コジュハン	25, 29
クズ小屋	61	結婚式	174	小正月	35, 50, 75, 191, 194, 244
屑米	198	ケデエ	24, 75, 291	コジラ	4, 52
くず屋根	45	ケード	220, 221	コジラン	55, 57
藁屋	77	樺	96	コシリ	69
クゾ	41	下痢	85	コシリトリ	64
クゾフジ	75, 97	ケンタクパオーサマ	141	ごじる	30
クチキキ	164	源太速	268	ゴゼ	25, 71, 77, 81, 107
クチシメシ	176	ケンチン汁	30, 35, 205	ごせいにな	155, 184
くちなし	21, 97	元禄袖	12	戸籍年令	162
クチヨセ	176	こ行		コセツクリ	119
クツツキアイ	164	コイノホリ	209	御先祖様	182, 214, 228
クネユイ	243	講	5, 100, 305	子育て吞竜	161
区費	102	文際の範囲	114	こたつ	48, 285
熊野様	128			コタツヤグラ	156
				ゴチモチ	45

かきあげ	31	カマ神様	48, 53, 56, 89, 140, 189, 190, 191, 240, 297	カンジンボウ	89
カギ竹	47, 84, 185	かまきり	95	観世流	173
ガキ仏	228	カマシキ	281	甘草	272
カキマモリ	15	カマド	47, 48, 178	ガンタク	85, 95, 251, 254
角帯	13	カマド神	44	刈稲焼	2, 53
カクネッコ	274	カマド分け	140	観音講	113, 133
かくら	82, 89, 107, 271	かまなり	38	観音様	73, 129, 148, 163, 204
神楽獅子	255, 256, 260	釜の口あけ	3, 8, 33, 187, 214	願果し	86
神楽殿	261, 268	カマ柱	297	眼病	86
カクラン	88	髪洗い	19	甘味料	38
カケス	250	髪洗い粉	24	カンラソウ	70
カゲの俵	10, 27, 29	神かくし	177		
カゴ	289	髪型	17	き行	
カゴ編み	273	神様の日	24	忌あけ	183
カゴかい	69	神棚	43, 189, 191, 198, 199, 201, 203	紙園	260
龍屋	76	髪 of 毛	216	着ごぎ	24, 213, 291
カザト	251	神の鉢	190, 191, 192	埴子観音	163
椀	96	神無月	184, 236	キシヤゴ	273
火事	90, 111, 158	雷	89, 92	喜寿	162
火事見舞	114	雷よけ	190	きじり	47
カシグネ	49	カヤ	45	ギスイチゴ	272
カジつけ	132	櫃	96	義太夫	130, 163, 270
ガスぬき	69	カヤカリ	103	木出し	45
風邪	85	苜の葉とばし	273	北枕	177
風切り鎌	90	かやまぶし	70, 71	北向き観音	163, 204
カゾ	75, 76	カヤ屋根	44	吉方	91
家族関係	116	カユカキ棒	53, 113, 187, 196, 203, 285	忠中礼	177
肩あげ	15	カライモ	59	狐	94
片月	236	空白	37, 84	狐憑き	126, 147
カタツキノミ	294	カラス鳴き	170, 175	狐の嫁入り	147, 250
カタテ	254	カラスの餌	196	綱笠様	68, 72, 139, 141, 192
カタナ	196, 197, 198, 199, 285	カラスの絵	203	キネ	196
形見分け	184	からすのえんどう	273	茸	98
かつぎっこ	103	から炊き	83	キハダ	21
門付け	81	カラミ餅	237, 238	木鉢	73
合羽	24	カリブン	153, 165	木部姫	246
角ガリ	17	刈り分け	62	鬼門	91
門松	190, 202	カ例	123, 190	脚絆	13
カナコギ	53, 94	カワジリサマ	122	キュウテ	106, 118, 119
カナババ	160	カワソ	74, 75	牛馬組合	2
金物屋	77	カワドウシ	44	凶荒食	28, 41
カニ	89	川干し	272	キョウカタヒラ	179
カネツケ	154, 173	皮むきがま	67	行者	147, 208
加納坊様	149	棺	178, 181	行商	77, 107
カピタリモチ	238	棺かつぎ	179	鏡台	19
歌舞伎	101, 210	かんち馬喰	74	共同井戸替え	104
兜造り	299	かんざし	18	共同耕地	103
株とり八反	288	間食	25, 318	共同作業	4, 52, 62, 107
かぶりもの	18			共同水車	65
釜	38, 280			共同墓地	106, 123

奥座敷	171	オタチブルマイ	166	オミゴク	202
おくまん様	166	オタナ	243	オミタマサマ	189, 220
オクヨウ様	87	お柳さがし	34, 191, 192, 193	お宮参り	159
送りいちげん	166, 173	オタナサライ	193	オモユ	160
送り火	228, 229, 230	オタマ	39	オヤキ	93, 205
送り盆	228	オチッキ	166	親子盆	170
おくれば	56	落葉かき	94	オヤシキマツリ	238
オクンチ	235	お茶がし	31	オリワラマブシ	71
オケンミ	61	オッカド	194	おるすい様	234
オコアゲ	69	おつき	7, 153, 167	オンガ	57, 287, 288
オコジョハン	32, 58, 198	オッチャンばしより	14	御旗行者	126
オコト八日	238	オツボ	35	御旗講	90, 130, 132, 133 141, 146, 206
おこもり	163, 236	オツモリ	166	御旗様	204
おこもり堂	129, 237	オツモリザカナ	34	御旗信仰	126
おこわ	27	オテガツク	136	女一見	174
お賽銭	201, 202	おてっこもり	112	女契約	5, 99, 104, 105
お歳暮	114, 160, 243	お手玉	273	女仲人	172
オサキ	37, 41, 83, 146	おてのこぶ	121, 239	女の慰安日	211
おさご	140, 158, 194, 195	お天狗様	141	女の仕事	64
お座敷	42, 221, 223	お天道様	179, 190	オンバコ	98
お座敷義太夫	271	オテンマ	4, 5, 99, 100, 106 107, 154, 168	オンベロ	121, 194, 212, 213
お産	185	オトウカ	94, 126, 147, 250	か行	
お産の神	109, 149	おとうにんずう	111, 131	蚤祝い	72
お産見舞	159	男契約	105	蚤祈禱	208
オシウチ	240	男衆	170	蚤道具	80
オシクメ	146, 190, 195 198, 201, 243	お年玉	198	かいこの神様	68, 141, 149
オ七夜	36, 114, 153, 159	おとしやど	110	蚤の病気	70
おしめ	14	オトットキギモン	11	蚤番頭	65
押麦	26	オトメ	109, 111, 131	カイコビョウ	26, 69, 71
オシヤ	27, 34, 191, 192	お伴	165, 166, 181	蚤拾い	62
おしゃか様	210	お取持	166, 170, 172	カイコモチ	68
オシムギ	40, 41	オナنگ	273	蚤休み	72
オシヤクッコ	170	オニタ飯	189, 244	買芝居	271
お正月様	202	鬼の豆	207	カイジョ	21
お精進	5, 55, 102, 108, 150, 213	鬼の世	207	回虫	86
お相伴役	172	お念仏	182	害虫予防	203
オシラ様	6, 69, 72, 138 139, 240	お歯黒	18	回転まぶし	71
オシラマチ	208	おはち	83	カイド	42
オシリョウサマ	6, 7, 78, 126 127, 137, 138 189, 239, 240	おばあさんかぶり	19	かいまき	25
オシロサマ	6, 127, 139	帯	13	改名	159
お諏訪様	129	お櫃	283	回覧板	103
お節句	35	オヒマチ	32, 100, 109, 111 148, 202, 236	改良まぶし	71
お雑煮	191, 192, 196	お百度	146, 157, 176	かかあ天下	120
お供へ餅	190	オヒラ	35	家格	171
お高盛り	35, 110, 131, 132 171, 172, 205, 240	おふるまい	173	化学染料	21
オタキアゲ	140	お蘭玉	140	カカシアゲ	8
		お待女房	154, 171	案山子まつり	189, 238
		お松枕	243	カカリゴ	118
		尾まわし	256, 260	カカリツ	118

糸ひき唄	269	碓氷郡役所	1	エビス様	3, 8, 50, 205
イトヒキバ	300	碓氷桑	70	えびす大黒	198
糸蘭商	81	碓氷社	1, 2, 20, 30, 72, 79	エボ	87
イナカッパ	56	碓氷ミカゲ	76	絵馬	67, 73, 88, 128, 133, 148
いなご	95	ウスヤキ	3, 32	縁側	170, 179, 220 221, 224, 227
稲作	53	論	166, 170, 173	エンガ	196, 197, 287
稲含山	9, 92	うちかざり	196	縁起物	198
	121, 125, 130, 133	うち中よび	114	演芸会	163
稲荷様	138, 140, 141, 166 187, 194, 198, 239	打ち身	85	縁遣い神	205
稲荷祭り	36, 48, 123, 208, 238	うでぬき	13	お行	
稲荷流	264	うどん	10, 31, 93, 218, 228, 230	オイヘッコ	162
戌の日	91	ウドンゲ	175	お色なおし	174
稲刈り	53, 58, 94, 140, 175	卯の日卯の刻	189	お祝いの餅つき	119
稲わら	24	産明け	114	オエビス講	136
一把線香	227	初着	114, 160, 174	大石稲荷	7, 129
位牌	121, 184	うぶ毛	17, 88	大打ち	58
位牌わけ	183	ウブスナ様	176	狼除け	182
一番ケイヤク	104, 105	ウブタテ	129, 158	オオケイヤク	99, 106
イボ	207, 229	うぶ湯	158	大精進	104, 132
忌煙	4	鱧	68, 95	おおどし	35, 193, 242, 244
芋	10	ウナギバリ	272	オオヒキ	95
芋壘石塔	146	馬井戸	104	オオブチ	65
芋から	10, 30, 237	馬と女の年取り	35, 241, 242	大本家	121
芋くし	29	馬の餌	231	大水	92
いも地蔵	142	馬の毛色	73	大晦日	48, 189, 192, 244
芋の年取り	52	馬の子とり	73	大麦	57
いものとりぞめ	29, 59	うまのくつ	16	大森神社	128, 141
イモの葉	215, 230	馬の縄	204	大山講	113
いもめし	27	馬の鼻取り	63	おかいこ餅	36
いもり	95	馬の病気	73	お顔かくし	55, 177, 189, 190
入母屋造	299	馬屋	73	オカッキリ	273
イロリ	11, 35, 46, 47, 48, 159	馬屋肥え	61, 186	オカサ	183
いわしの頭	207	ウマヤ大黒	306	オカシラツキ	135
岩鼻県	1	生れかわり	185	オカズ	27
隠居	122	梅	2, 60	おかなび	12, 13
インキョモン	122	ウラギリ	57	オカボ	141
インドウ田	4	ウラマツリ	128	オカモノフタ	228
う行		売り絹	20	オカモチ	279
ウエシロガキ	55	うるしかぶれ	85	オガラ	7, 142, 170, 179 187, 221, 233, 242
ウエツギ	53	え行		オガラの鳥居	154
ウケトリワタシ	166	エエ	4, 62	麻幹の門	179
牛	74, 95	エエゲエシ	62	お飯屋	113, 120, 129, 135, 136 137, 238, 239, 240
牛のはなどり	84	疫病神	213	お願しょ	84
牛の病気	89	枝塔婆	155, 184	オカンボロ	272
氏神	5, 123	越中さん	31, 55, 58, 65	オキナツケ	7
氏子総代	128, 141	エツラ	74	おきやく着物	11, 14
ウシロヤク	163	江戸づま	11, 165	オッキリコミ	10, 27, 31, 32
ウジコロシ	67, 97	エビス講	26, 187, 189, 204 205, 240, 241		
碓氷郡誌	2				

索 引

あ 行

アアボウ	194, 196, 284
藍	21
アイダツキノミ	294
アイロン	23, 277
あえもみ	56
あおごめ	56
青大将	95
赤いアザ	158
赤米	52, 54
アガタ	176
アカダキ	114, 159
赤樽	165
吾妻神社	101
アカノゴハン	26
赤ンガエル	95
アキアゲ	175
秋皮	67
秋間石	2, 4, 76
鮑間組	72
鮑馬郷	1
鮑馬神社	101, 128
秋間梅林	2
秋間ミナガ	74, 75
秋祭り	36, 106
アグツキノミ	293
あくまっぱらい	104, 150 203, 255
揚げ返し	72
アゲサク	57
アゲザル	278
アゲシロ	55
あけび	97, 211
朝いちげん	166
朝エビス	204, 205
朝草	74
麻の皮	178
朝焼け	93
朝湯	191
アシツルシ	95
アジトリ	274
アジナシタスキ	178
足踏脱穀機	289
小豆	59
アズキトギバアサン	250
アゼ	54

あすびじまい	211
愛宕様	33
愛宕精進	108, 109, 187, 212
アタマスキ	70
当り塚御	73
亜炭	2, 76
アツケ	85
アツクメケエシ	32
アテナンゴ	273
アトサク	94
後産	157
後ツキノミ	294
アトトリ	117
穴掘り	115, 154, 179, 181
雨乞い	56, 90, 128, 140 141, 149, 211
甘酒	37, 200
甘茶	210
アメ屋	81
アヤトリ	274
アラガキ	55
アラク掘り	60
新粉	175
新仏	228
新盆	175, 227
新盆舞	227, 228
新盆見舞	185, 228
栗稗	197
栗餅	31
アンカ	284
安産祈願	129, 156
安産信仰	152
安中県	1
安中藩	1
アヒル	41
油菜	38

い 行

イイツギ	103, 107
家印	125
錆掛屋	81
いかだまぶし	70
イッケ	5, 116, 122, 123
イッケ稲荷	230
一本木	67
イザリバタ	21
石臼	157, 281

石裏	16
石釜	66
石切り場	76
イジッコ	118
一升枀	196
一升めし	110
石積職人	77
イシブネ	140
石舟様	247
いじめ	161
石屋根	62, 107
イズリ	184
伊勢講	113
板材	2
板挽鋸	293
板ぶき	45
板葺石置屋根	301, 303, 305
板葺ヤグラ	300
板屋根	10, 44, 45
板割職人	44, 45, 107, 305
市	80
イチゲン	115, 174
一見客	31, 34, 167
一見座敷	163, 166, 172
いちげん負け	166
イチゴ	29
一膳めし	83, 178
一駄の量	73
イチダンジリ	61
一人前	22, 63, 74, 93, 94
一年番頭	64
一針二機	22
一番契約	5, 99
一番ソウゴ	55
イチマケ	121, 122
一夜かざり	241, 242, 243
一夜ゼリ	195
一夜もち	35, 244
イッケ	116
イツナさま	123
イツメンバ	93
井戸	42, 176, 199
井戸替	49
井戸神様	49, 86
井戸坊主	49
糸とり	10, 19, 21, 72
糸ひき	21

群馬県民俗調査報告書第二十二集

安中市秋間の民俗

昭和五十五年三月二十八日印刷

昭和五十五年三月三十日発行

(非売品)

編集発行 群馬県教育委員会

前橋市大手町一丁目一番一号

電話 0286-22111

印刷所 朝日印刷工業株式会社

前橋市元総社町六七番地

電話 0286-11111